

鬼眼麗人

鬼眼麗人

The Cyber
Slayer

Authored by

虚淵玄

(ニトロプラス)

角川スニーカー文庫

鬼哭街

鬼眼麗人

虚淵 玄(Nitroplus)



角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

目次

四 浦東地獄变（承前）

五 驟雨血風

六 愛憎之園

き 虚淵玄

車両の調達はスチュグレフ達に一任していたが、ロシア人が用意したスラスト・SヴィーグルVは乗るだけでも心こころ許もとない代しろ物ものだった。明らかにがたのきたガスタービンエンジンの不規則な唸うなりが、車体を不安なほどに震しん動どうさせる。

「本当にこいつ、対岸まで渡わたれるんだろうな？」

窓の外を、危あやういほど間近に飛びすぎていく黄こう浦ほ江こうの黒い水みな面もを眺ながめながら、濤タオ羅ローは陰いん気きな口調でばやく。

「文句言うなよ。ジャンク屋から拾ってきた廃はい車しやなんだ。飛ばせるようになるまで部品揃そろえるだけでも一苦労だったんだぜ」

スチュグレフが調達したS Vトラックは、元を辿たどればベル社の軍用モデルの払はらい下げ品だった。本来の機内レイアウトはヘリボーンのそれに準じゆん拠きよしていたものを、前のオーナーはコックピットとカーゴルームを隔へだてる間仕切りを取り払い、無理矢理マイクロバス風にアレンジしていたらしい。

それを今度は、五体のアサルトギアを積み込むために乗客用の座席を撤去し、再びカーゴスペースに戻もどしている。スチュグレフと濤タオ羅ローはドライバーシートの背中と積み荷のアサルトギアに挟はさまれる形で、床ゆかに直接座り込んで機体の震動に晒さらされていた。

「……仕方ねえだろ。盗とう難なん車しやじゃ金きん融ゆう貿易区には入れねえよ」

有輪車両よりも高価な上に煩はん瑣さな登録が必要なS Vは、非合法に調達するのが難しい。また手動マニュアル運転が許されるのは郊こう外がいのみで、都市部での運用は交通管制センターによって徹てつ底てい的にモニタリングされる。登録番号を照会されれば、疚やましい車は一発で露ろ見けんしてしまう。

夜よ霧ぎりが輝かがやきを孕はらみはじめたかと思うと、不意に晴れたその向こうから浦プー東ドンのイルミネーションが視界の中に立

ち現れる。

それと前後してS Vは緩ゆるやかに減速し、まるでいきなり地に足を降ろしたかのように、自動運転ならではの無む謬びゆうの安定感を取り戻す。

無線に交通管制局の定型アナウンスが入り、この車両が完全管制エリアに入ったこと、以後の運行は管制局からのナビゲーションとオートドライブに一任される旨むねを告げてきた。

ドライバーが音声入力 of 目的地選せん択たくで上シヤン海ハイ義ぎ肢し公司本社ビルを指定すると、S Vトラックは徐じよ行こうのままレーンを横断し、最短距きよ離りの誘ゆう導どう軌き道どうに合流する。

「渡しておくぞ」

濤タオ羅ローは梁リヤンから仕入れたメモリカードのひとつ—S Vオートドライブの強制解除プログラムを収めた一枚を、ドライバーに投げ渡した。

これを使えば、管制局からの割りインター込みセプトをブロックして車両のコントロールを取り戻せる。誘導軌道などお構いなしで勝手放題に動けるようになるが、即そく座ざにエアボリスが飛んでくるのは言うまでもない。

「さてと、パーティー会場が近づいて来たな」

囁うそぶきながらスチュグレフが、携たずさえ持った突とつ撃げきカービン銃じゆうの機関部に装そう弾だん子しを叩たたき込む。このS Vには武装がないため、万が一の時には乗員自らがガンナーになるしかない。

濤タオ羅ローも愛用の倭わ刀とうは下げ緒おに肩かたを通して背中へ廻まわし、渡されてあったカービン銃に初弾を装そう填てんする。銃器に関しては専門外だが、それでも扱あつかい方ぐらいは知っている。

さらに、腰こしのベルトに挟んだ鉤かぎ撃うち銃もチェックしておく。ガス圧で三〇メートルの極ごく細ほそワイヤーとハーケンブロー

ブを射出する簡易な装置で、ウインチもなければ再装填もきかない使い捨てだが、そのぶんコンパクトに携けい行こうできる。

「そんな物、何に使おうってんだ？」

「この車が墜おちそうになったら、こいつで隣となりの車に飛び移る」

真顔で応じる濤タオローの口調は、冗じよう談だんとも本気ともつかない。その背中の刀と鉤撃ち銃を見比べたスチュグレフは、何をか言わんやという風ふ情ぜいでかぶりを振ふった。

「見えてきたぞ」

ドライバーの呼びかけに振り向けば、上海義肢公司ビルは正面のキャノピーいつ杯ぱいにその威い容ようを晒して立ちはだかっていた。

交通管制局から到とう着ちやく車両の照会をされたのだろう。無線に受付嬢じようからの着信が入り、慇いん懃ぎんな口調で来訪目的とアポイントメントの有う無むを質ただしてくる。

「始めるか……ちょっと揺ゆれるぜ。お客さん」

再三にわたる義肢公司ビルからの呼びかけを無視して、ドライバーは濤タオローから受け取った違い法ほうプログラムを起動した。

途と端たんに車体が大きく震ふるえたかと思うと、黄浦江を渡ってきたときと同様、まるで荒あら波なみに揉もまれる小こ舟ぶねのように揺れはじめた。機体の勢せい御ぎよが管制局のコンピュータからドライバーの操そう縦じゆう桿かんに戻ったのだ。

即座に管制局からの警告音声を立て続けに鳴り響ひびく。オートパイロットの喪そう失しつがただのマシントラブルの類たぐいではないと見て取るや、合成音のメッセージは係官の肉声に取って代わった。『車体ナンバー K Y V B 4 8 6 2、あなたは空路交通法に抵てい触しよくする重大な違反を犯おかしている。繰くり返す……』

「オイ・ヨイ・ヨーイ！ そりゃ気の毒だったナァ」

ドライバーは躁そうめいた哄こう笑しようで一いつ蹴しゆうするや、スロットルを全開にした。誘導軌道を滑かつ空くうするのは

うって変わった荒々しい加速で、SVは上海義肢公司ビルめがけて突進する。

スチュグレフはロールバーに掴つかまって身体からだを支えながら機体の最さい後こう尾びまで移動し、カーゴルームにひしめく金属球たちへと激げきを飛ばしながら、後部の貨物用ハッチを開放する。途端に、刃やいばのように冷え切った外気が、逆巻きながら機内へと雪崩なだれれ込む。

「出番だ、野や郎ろうども!!」

『おうよ、いつでも落としてくんなッ』

音声出力で応じるミーシャに続き、異形のサイボーグたちが次々に雄お叫たけびを上げる。

SVはビルの周囲を螺ら旋せんめにめぐる軌道を描えがいて壁へき面めんすれすれを飛びながら、徐じよ々じよに高度を上げていく。

まず最後尾に乗っていたアサルトギアが、スチュグレフの振るうサバイバルナイフで、機内にボディを固定していたハーネスを切断された。

機首が上向いたぶん、SVの車内には緩ゆるい傾けい斜しやがかかっている。支えを失った球形のボディは、その傾斜を重々しく転がりながら貨物ハッチの縁へりを乗り越こえ、地上一〇〇メートルあまりの空中へと放ほうり出される。

自由落下状態に陥おちいったところで、アサルトギアは機体側面のスラスターを点火。文字通り砲ほう弾だんよろしく火の玉となって、義肢公司ビルの壁面へと突入する。

超ちよう高こう硬こう度どのベアリング外がい殻かくに身を固めたまま、スラスター推進で敵要よう塞さいへと突入。外壁を突つき破った後は四し肢しを展開して機動モードに入り、内部から破は壊かいの限りを尽つくす……それが三七型空くう挺ていアサルトギア的设计思想に基もとづく運用法である。

間を置かずスチュグレフは二本目のハーネスを切断し、次のアサルトギアを虚こ空くうへと送り出す。

義肢公司ビルに蜷局とぐろを巻いて絡みつく蛇へびのような軌道を描きながら旋せん回かい上じよう昇しようを続けるS V。その後部ハッチから次々と転がり墜ちては、クレーンから振り下ろされる破は砕さい鉄球の如ごとく、唸うなりを上げてビル内に突入していくアサルトギア。

五体の鉄球が残らずビル内に突入するまで、所要時間は二分弱。だがすでに内部は阿あ鼻び叫きよう喚かんの地じ獄ごく絵図にちがいない。

「よし、離り脱だつ……」

「まだだ」

興奮したスチュグレフの声に、濤タオ羅ローが冷ややかに割り込む。その手に構えたカービンの銃口は、ぴたりとスチュグレフに据えられていた。

「……!!」

怒いかりに目を剥むいたのも束つかの間、スチュグレフは動どう揺ようを押し隠かくして声のトーンを落とす。

「ここでそんなものブツ放したら、貴様だって無事じゃ済まんぞ」

「そうだ。誰だれ一人助からない。……解わかっているなら抵てい抗こうするな」

「……」

スチュグレフもまた、ストラップで脇わきに吊つった自分の銃じゆうを意識しないでもなかったが、右手から銃じゆう把はまでの距きよ離り、銃把から安全装置までの距離……どれをとっても濤タオ羅ローの銃口の前には遠すぎる。

「もっと接近しながら高度を取れ」

「馬ば鹿か野郎！　すぐにも市警のエアボーンが来るんだ。撃うち墜おとされてえか!？」

「なら急げ。手間は取らせん」

短い返事には何の逡しゆん巡じゆんもない。その声に本気の響きを聞き取ったドライバーは、スチュグレフの許可を得るのも待たず操縦

桿を操作した。狭せまい機内で銃を乱射されれば、機内の人間は一人として無事には済まない。

S Vはビルの壁面を舐めめるようにして垂直に上じよう昇しようし、四〇階辺りの高度で再びホバリングに戻もどる。

右手にカービン、左手に機内側面のロールバーを掴んだまま、濤タオ羅ローは油断なく後ずさり、空いたままの貨物ハッチの縁までにじり寄る。

「何を……考えてやがる？」

「これから地獄を覗のぞいてくる。あんた、俺に付き合うつもりはないんだろ？」

すぐ足元に奈な落らくが口を開けているにも拘かかわらず、濤タオ羅ローはロールバーから左手を放し、背中をハッチの縁に押しつけてバランスを保ちながら、腰こしに差した鉤かぎ撃うち銃を引き抜ぬく。

「あばよ、同志」

別れの仕し種ぐさに銃口を小さく振ふってから、濤タオ羅ローは斜ななめ頭上のビルの壁面へと向けてハーケンを射出した。

展開式の鉤と強力粘着剤のカプセルを組み込まれた射出体プローブが、高速でワイヤーを手た繰ぐり出しながら虚空を横断し、ビルの壁面に食らいつく。

S Vの機体が突とつ風ぶうに揺ゆれ、宙に渡わたされたワイヤーが遊びを失う。その途と端たん、濤タオ羅ローはワイヤーの張力に引っ張られて虚空へと飛ばされていた。

「クソツタレがあッ!!」

隙すきを見て引導を渡すつもりだった相手をまんまと取り逃にがして、激げつ昂こうしたスチュグレフが貨物ハッチの縁から発砲する。

だがもう遅おそい。ドップラー効果で遠ざかる怒ど号ごうと銃声を聞きながら、濤タオ羅ローはワイヤーの末端で遠心力に身を任せ、斜めに傾かたむいた振り子の軌き道どうで高度一五〇メートルの虚空を滑かつ空くうした。

重力加速とビルの壁面で渦うずを巻く突風が、コートの裾すそを引きちぎらんばかりに翻ほん弄ろうする。風圧に歯を食いしばったのも束の間、明かりの消えた総ガラス張りの壁へき面めんが致命的な勢いで濤タオ羅ローに肉にく薄はくする……

あわや叩たたきつけられんという寸前に、濤タオ羅ローは右手に構えたカービン銃を乱射した。高高度の突風をものともしない分厚い強化ガラスも、銃弾の前では病わくら葉ば同然だ。ほんの数発で亀き裂れつが走り、あとは内外の気圧差が割れたガラスの一面を木っ端ば微み塵じんに吹ふき飛ばした。

ダイヤモンドダストのような破は片へんの中をくぐり抜け、濤タオ羅ローは様子も定かでないフロアの内部に突入する。

すぐさまワイヤー銃のグリップから左手を放し、鞠まりのように床ゆかを転がって着地のショックを分散。そのまま勢いを完全に殺しきる前に床を蹴けって立ち上がり、カービン銃を肩かた付けして構えるまでが一動作……武術家として極限の修しゆ業ぎようを積んだ者ならではの離はなれ芸である。

素す早ばやく周囲に視線を巡めぐらし、飛び込んだ場所を確かく認にんしながらも、まず濤タオ羅ローは手近な遮しや蔽へい物の陰かげへと身を寄せる。

そこは迷路のようにパーティションが立ち並ぶワークステーションだった。窓から突っ込んだ拍ひよう子しに二つ三つほどブースを蹴散らしてしまっている。窓に明かりがなかったことから察してはいたが、残業組がいなかったのは幸いだった。

慎しん重ちように警けい戒かいしつつ、それでも足早に部屋を通り抜けて廊ろう下かに出る。

耳を澄すませても、このフロアに騒そう動どうの気配はない。爆ばく音おんや警報ベルの発信源は、はるか下のフロアだ。

下階に突入したアサルトギア五機を鎮ちん圧あつするために、保安部隊の大半は階下へと向かっている筈はずだ。連中を囿おとりにして、濤タオ羅ロー独りはある程度まで自由に行動できる。

だがロシア人たちが陽動の役を果たす時間はそう長くない。連中は社内LANにインテリジェント・ワームを注入し次し第だい、早々に撤てつ収しゆうするだろう。

ミーシャたちの武装は過か剰じようと見えて、実のところは樂觀で
きるほどのものではない。このビルの保安部隊であれば、充じゆう分
ぶんに対処できるだけの装備を備えている可能性は極きわめて高い。
奇き襲しゆうによるアドバンテージを消化した時点で、襲しゆう撃げ
き部隊は引き際と見切るだろう。

目指す呉ン・榮ウイン成シンを、いかに短時間で見つけだすか。今
現在も、社内のVIPは護衛に護まもられて安全な場所へと誘ゆう導
どうされているに違ちがいない。

その中から呉ンを見つけだし、そして警護の弛ゆるんだ隙を見て襲
おそうとなると.....標的を捜さがすのは騒さわぎに乗じて、そして仕
留めるのは事態が沈ちん静せい化した後で、ということになる。

万ばん事じはロシア人たちの暴れ方次第だ。さっさと鎮圧されても
困るが、あまり度を過ぎた暴れ方をされては、呉ンたちがビルから退
去するかもしれない。

人気のないエレベーターホールに出ると、階数表示でようやく現在
位置が解った。三九階。予想より上のフロアに飛び込んでいたらし
い。ひとまず目指すべきは最上階.....五五階の社長執しつ務む室フロ
ア。

直通エレベーターで乗り込むのが一番たやすいが、それではドアベ
ルを鳴らして訪問を告げるも同然だ。ひとまず非常階段で近づいて、
そこからエアダクトでも探して忍しのび込む手だろうか。

ホールを横切って奥まった廊下に入り、突き当たりにある非常階段
のドアノブに触ふれたところで.....金属のノブの冷たさだけではな
い、それ以上の悪お寒かんが背筋を趨はしる。

レバー型のノブにカービン銃じゆうのスイベルを引っ掛け、濤タオ
羅ロー自身はその脇わきに身を退いたまま、そっとベルトを引いてノ
ブを動かした。

予期こそしていたものの、それでも思わず首を竦すくめるほどに盛せい大だいな銃声が、反対側からドアを蜂はちの巣にする。

金属製のドアが一いつ瞬しゆんでよじくれた鉄てつ屑くずになって蝶ちよう番つがいからもげ落ちた。少なく見積もって三挺ちよう以上のマシンガンによる集中砲ほう火か。敵はすでに非常階段で濤タオローを待ち伏ぶせていたのだ。

早すぎる.....たまたまこの三九階近辺に居合わせた保安チームだろうか。出だしから幸さい先さきの悪い展開だった。

相手の銃撃が途切れたところで、濤タオローは半身を乗り出し、咄とつ嗟さに見み咎とがめた踊おどり場の人ひと影かげに向けてカービン銃の乱射を浴びせる。

立ちこめた暗くら闇やみを真っ白に暴あばきたてるハレーションの如ごとき銃じゆう口こう炎えん。銃声は狭せまい空間に反はん響きようし、途方もない轟音となって濤タオローの鼓こ膜まくを直撃する。

あまりの音と閃光に五感を攪乱された濤タオローは、視野に捉とらえていたはずの人影を、気配ともども見失ってしまった。むろん撃うった弾たまが当たったのか外れたのかも見当がつかない。

たまらず身を退ひいて壁かべの陰に隠かくれたところで、今度はさっき以上に壮そう絶ぜつな銃じゆう弾だんの応おう酬しゆうが、踊り場から返礼とばかりに浴びせられる。

".....くっ!!,,

これでは埒らちがあかない。

濤タオローは廊下を駆け戻もどってエレベーターホールまで退たい却きやくしながら、まだ弾の残っているカービン銃を苛いら立ちまぎれに投げ捨てた。

ひとたび撃つごとに、この轟ごう音おんと反動.....身構えれば全身が硬こう直ちよくし、内息が滞とどこおって丹たん田でんの氣きが乱れる。こんな厄やつ介かいな武器を使っでは内功が駆く使できない。

勝手知ったる得物の倭刀とうを背中から抜ぬき払はらいつつ、エレベーターホールに戻った濤タオ羅ローは支柱の陰に身を潜ひそめて、調息、閉息、練気の行程をこなす。

いったい何人を相手取る羽目になるのかは定かでないが、ここに居合わせ敵に増ぞう援えんが加わる可能性は薄うすい。保安部隊の主力はまだ階下のアサルトギアと交戦中の筈だ。新たな侵入者が濤タオ羅ロー独りと知れば、今いる人数以上の兵員を動員してくることはあるまい。

はたして敵はほどなく姿を現した。非常階段へと続く廊下から、まず二人の人影が中ちゆう腰ごしでホールに侵しん入にゆうしてくる。残りは廊下に潜んだまま掩えん護ごを務めているのだろう。

戦せん闘とうサイボーグではないにしろ、プレート入りの防弾ベストにサイバーサイトつき短C距離Q制圧B火器Wという重武装は、ビル警備員どころか軍の特とく殊しゆ部隊に相応ふさわしい。

ヘルメットの下顔面を覆おおうのは、無数のレンズが複眼のように並んだ集中光学バイザー。暗視鏡だけでなく各種熱線、マイクロ波、さらにサイバーサイトから送られる照準情報までも画像処理し、装着者の網もう膜まくに直接投とう影えいするシステムだ。

“もらった……”

ハイテク装備に身を固めた兵士たちを前にして、だが濤タオ羅ローは勝機の確信にほくそ笑えむ。ああいう小道具に頼たよる手合いを相手取ってこそ、“電磁発はつ勁けい”の真骨頂というものだ。

丹田に溜ためた氣をさらに練る。迫せまり来る前衛の二人は、明らかに警けい戒かいが甘い。濤タオ羅ローが廊ろう下かに捨てた銃を見て、すでにこちらに戦意がないものと高を括くくっているのだろう。

氣息充じゆう溢いつした濤タオ羅ローの知覚は、すでに二人がそっと床ゆかに踏ふみ降ろす靴くつ底ぞこの音まで聴きき分けている。ここまで引き付ければもう充分だろう。まずは、この二人から……

「呵かッ!!」

鋭するどい吐と氣きとともに放つ渾こん身しんの『轟ごう雷らい功

こう』。濤タオローの横おう隔かく膜まくを中心に、辺り一面へと発散された電磁パルスの衝しよう撃げき波はは、その圏けん内ないに捉えた電子機器を悉ことごとく破は壊かいする。

今回その餌え食じきとなったのは、先行した警備兵たちの光学バイザーだった。生命維持に直接関かわるサイボーグの体機構に比べると、この手の副次的な携けい帯たい装備はシールド処理が徹てつ底ていしていない。『紫し電でん掌しよう』の指向性パルスを使うまでもなく無力化できる。

はたして二人の前衛は、何の前まえ触ぶれもなく視野を闇に閉とざされて恐きよう慌こうに陥おちいった。

うち片方はそのまま思し慮りよを取り戻すこともなく――そしてもう独りは、何はともあれバイザーを外そうとヘルメットに手をかけたところで――どちらも白はく刃じんの餌食と化すまでに、○コンマ数秒の時差しかなかった。

廊下に待機していた残りの三人は『轟雷功』の圏内になく、光量増ぞう幅ふくされた視野の中で一部始終を見届けることになった。

突とつ如じよ、フロア中央の支柱の陰から躍おどり出た賊ぞくの刀に、先行した二名が何の反応もせず、案山子かかしのようには棒立ちのまま叩たたき斬きられる様は、悪い冗じよう談だんとしか思えなかっただろう。

何があったのか理解もできぬまま、それでも三人の警備員たちは廊下からホールに躍り出て、散開もせずに銃を構える。相手は刀を持った一人だけ。一いつ斉せい掃そう射しやで仕留めれば何ら脅きよう威いたり得ないと判断したのか。

そんな三人の反応に、濤タオローは呆あきれるところか憐れん憫びんさえ抱いだいて苦く笑しようした。彼ひ我がの距きよ離り、およそ一五メートル。わずかそれだけの間合いの開きで、銃弾に軍配が上がるとでも思ったのだろうか？

いかに神経を電子化し、弾丸が音速を越こえようと、一挙手一投足を判ずる“心の速度”までは変わらない。それを鍛きたえ得うるのは

内家の功夫のみである。

よって彼らは、戦いに臨のぞんだその時点で致し命めいのてきなハンディキャップを追われているも同然なのだ。トラックレースに喩たとえるならば、濤タオ羅ローとはすでに走り出す地点が違ちがう。たかが音速の弾丸初速程度では取り返せないほどに。

ただ脚あしで床を踏むという動作ひとつを取っても、その瞬しゆん発ぱつのタイミングと重心の移動だけで根底から違う。腿ももを膝ひざを腰を稼か働どうさせる腱けんと筋と血流のリズム、それらすべてを“把は握あく”し“同調”させるだけの集中力によって駆使される肉体は、人体の運動能力についての常識さえも覆くつがえす。それが内家拳けん法ぼうの“輕功術”……

まず一歩目の踏み切りは右斜ななめ前方。濤タオ羅ローは身体からだを横に傾かたむけながら一気に壁まで跳ちよう躍やくする。そこから続けて壁を蹴けり、引き続き旋せん転てんしながらさらに頭上へ。

およそ人間として有り得ない動きに、警備員の照準は完全に惑まどわされた。虚むなしく交こう錯さくする火線を眼下に見ながら、今や姿勢の天地を逆転させた濤タオ羅ローは、そのまま爪つま先さきで天てん井じようを踏んで一気に三步を疾しつ走そうした。

輕功の達人にかかれば重力など何の束そく縛ばくにもならない。垂直であれ逆さであれ、腿たい力りよくをこめて踏める足あし掛がかりさえあれば、それだけで事足りる。

不用心にも密集していた警備員たちは完全に虚きよを衝つかれた。まさか予期すらしなかった真上からの奇き襲しゆう。振ふり仰あおいだ視線が恐きよう怖ふに凝こごる。コート裾すそを翻ひるがえし、頭上から襲いかかる濤タオ羅ローの姿は、まさしく死神の似姿そのものだっただろう。

“愚おろか者……”

怯ひるむ隙すきに銃じゆうを構えていれば、まだ活路もあったものを。

真上を駆け抜ぬけざまに一人目の頸けい動どう脈みやくを裂さ

き、その背後に回転しながら落下する途と中ちゆうで二人目の背中を薙なぎ払はらい、着地と同時に放った突つきで残る三人目を仕留める。防具など物の数にも入らない。内勁を込めて放つ戴たい天てん剣けんは戦車の正面装そう甲こうすら断たち割ってのける。

絶命した警備員が折り重なって倒たおれるのを残心しつつ見届けてから、濤タオ羅ローは倭わ刀とうを血振りして鞘さやに収めた。

気を抜いている暇ひまはない。いま殺した五人の心音は保安部の司令室でモニターされているだろう。全ぜん滅めつしたとなればこの三九階には増ぞう援えんが大挙して押し寄せてくる。

調息を怠おこたならなければ、内傷の疼うずきもまだ今のところは抑おさえておける。

濤タオ羅ローは引き続き軽功術で疾しつ駆くしながら、非常階段を一気に駆け上がった。

二一階の様相は、文字通り戦場と化していた。

いかに保安部の武装が軍隊なみといえど、常勤の警備員に支給されている火力は自動小銃までが限度である。機動兵器との交戦までは想定されていない。

襲撃者の装備は三七型重機動甲こう装そう.....皮肉にも上海義肢会社の製品である。そのスペックを鑑かんがみるだけで警備員たちが太刀たち打ちできないのは明白だった。たった一体のアサルトギアが、群れなす保安要員を虫けら同然に薙ぎ倒していく。

だがそこへ、ゴルフバッグほどもある無骨な重火器を担かついだ隊員が上階から非常階段を駆け下りてきた。

「退さがれ！ 退がるんだッ!!」

然しかるべき装備を携たずさえてようやく到とう着ちやくした増援に、武装警備員たちは胸の中で喝かつ采さいを叫さけぶ。二〇mm携けい行こうレールガン。初速八〇〇〇で劣れつ化かうラン徹てつ甲こう

弾だんを射出する重火器である。これならば装甲を施ほどこされたアサルトギアにも通用しよう。

「掩えん護ご頼たのむ！」

眦まなじりを決したガンナーの叱しつ咤たに、生き残っていた警備員たちはバリケードの陰かげから身を乗り出し、迫せまり来るアサルトギアにありったけの弾丸で集中砲ほう火かを浴びせる。

かつてない密度の弾幕を浴びて、アサルトギアがセンサーと関節部分を防ぼう御ぎよする。動きの鈍にぶったその際に、ガンナーはレールガンの照準スコープを敵の中ちゆう枢すうユニットに向け……そこで彼を睨にらみ返すスマートグレネーダーの砲口と目を合わせてしまった。

一手先んじて火を噴ふいたアサルトギアのランチャーは、既すでにサーチ済みの地形における最適効果の手段として、F A E 榴りゆう散さん弾だんを自動選せん択たくしていた。射出された弾体は、まず粒りゆう子し燃料を詰つめ込んだカプセル霰さん弾だんを扇せん状じょうに撒まき散らし、続いて高圧電流のスパークを散らす。

霰弾から飛散し、瞬時に通路の角やバリケードの裏にまで充じゅう満まんした粒子燃料がこれに引火。粉ふん塵じん爆ばく発はつを引き起こして辺り一面を炎ほのおのヴェールで包み込む……

耐たい火か性ボディアーマーを着用した警備員たちに対しては、破は片へん榴弾ほどの直接殺傷力こそないものの、衝しよう撃げき波はによるスタン効果は覷てき面めんだった。居合わせる全員が吹吹き飛ばされて銃を取り落とし、ことごとく無力化される。

「ぐ……」

辛かろうじて気絶を免まぬかれたガンナーは、床ゆかに転がったレールガンの砲身を掴つかんだものの、破断したパワーケーブルを見て顔色を失う。膨ぼう大だいな電力を要するレールガンは、背中に背負った外部バッテリーパックからの供給を絶たれば只ただの鉄てつ塊かいでしかない。

そして再び顔を上げたそこには、目と鼻の先まで肉にく薄はくして

いたアサルトギアが、格かく闘とう戦装備の高周波振しん動どうバイスを今まさに振り下ろさんとしていた。

生身の人間を相手に非効率きわまる過か剰じよう殺傷……『嗜し虐ぎやく性』という人格の一側面を見せつけたのは、この鋼鉄の化け物がまぎれもなく脳を備えた“人間”である証あかしといえよう。

「ひィ……」

恐怖と絶望に身を凍こおらせたガンナーが、そのとき目まの当たりにしたものは――

閃せん光こう。轟とどろく爆ばく裂れつ音。

そして一瞬のうちに急所という急所を破は壊かいされ、糸が切れたように頹くずおれる鋼鉄の残さん骸がいたった。

「あ……？」

「大だ事じなないい。安あん心しめめさされよよ」

炎の中から忽こつ然ぜんと現れた、拳けん法ぼう着姿のサイボーグ。つい昨日に通達されたばかりの、青チン雲ワン幫パンの用心棒たちだ。

彼らが手に携えた護ご手しゅ鉤こうと浮ふ萍へい拐かいを、初見では鼻で嗤わらった警備員たちだったが……たった今、その前時代的な武器が軍用アサルトギアを瞬殺してのけた光景は、まざまざと彼らの目に焼きついている。

「ここより上の階は安全だ。速すみやかに非戦闘員の誘ゆう導どうを」

「あ、ああ……」

狐きつねに摘つままれたような面おも持もちのまま撤てつ退たいを始める警備員たちを見守りながら、元氏双そう俠きようは改めて、破壊しつくされた二一階の惨さん状じようを見み渡わたす。

そこかしこに転がる遺体は武装したものばかりではない。逃にげ遅おくれた従業員のものも数多く見当たった。

「……」

みしり、と、元ユン尚・ソー英インの手の中で拐の柄つかが軋きし

みを上げる。

「尚ソー英イン……」

「このすべてが……」

感情を押し殺した声は、しかし隠かくしきれないほどの怒ど気きに燃えていた。

「すべて、孔コン濤・タオ羅ローめの差し金か？ ……このすべてが……」

兄の手を肩かたに乗せられて、尚ソー英インは感情を鎮しずめた。憤ふん怒ぬに呑のまれている場合ではない。今この場での務めは他ほかにある。

「階下に降りるぞ。下にはまだ敵がいる」

「……ああ」

社長室の端たん末まつから外部のネットを巡じゆん回かいしつつ、呉んは己おのが帝てい国こくの末路を眺ながめていた。

階下に突とつ入にゆうした五機のアサルトギアは保安部隊の奮ふん闘とうによって概おおむね鎮ちん圧あつされつつあるものの、連中が社内LANの幹線に直接注入したインテリジェント・ワーム……もっとも効率的に経営上のダメージを与あたえるよう調整されたクラック特化AIは、物理攻こう撃げきによって社内がパニックに陥おちいった数分間のうちに、器材や人員の損失よりなお致ち命めいのてきな被害がいをもたらしていた。

すべてのワームが駆く逐ちくされ、メインサーバの支配権が社内のおペレーターの手に戻もどるまでに要した時間は二〇〇秒。だがその三分余りの間に、会社は貴重なパテントや特許権の大半を二束三文で投げ売りし、加えて暴落途と中ちゆうの株券や不良債さい券けんを手当たり次し第だいに購こう入にゆうしていた。

さらに複数の匿とく名めいBBSに片かたっ端ぱしから公開された

新製品の開発図面や数々の機密情報。株価は今こうして見守っている間にも急転直下の下落を続けている。

社内に食い込んだスマートワームと、あらかじめネット上で待機していたハッカー達とが連れん携けいして、迅じん速そくな電撃作戦を遂すい行こうしたのだ。被害総額はもはや想像もつかない。数百億円単位でも収まるかどうか。もはや上海義肢公司是企き業ぎようとしての命脈を絶たれたも同然だった。

“.....ちっ„

呉ンにとっては、もとより拾い物も同然だった社長の椅い子すだ。蜜みつ月げつの終わりは名残なごり惜おしいが、それ以上の感かん慨がいはない。むしろ気にかかるのは、騒そう動どうの最中さなかに三九階で発生した遭そう遇ぐう戦せんの報告である。

一五分ほど前.....社長室の警護に呼び戻した一班が、移動途中の三九階で新たな警報を察知し、侵しん入にゆう者しやと交戦したのちに全ぜん滅めつした。後ご詰づめの部隊の報告によれば、現場の痕こん跡せきからしてアサルトギアによる襲しゆう撃げきではない。殉じゆん職しよくしたガードマン達はすべて刀とう剣けんの類たぐいで斬ざん殺さつされていたという。

誰だれだろう、まごうかたなき孔コン濤・タオ羅ローの仕し業わざだ。あの男はもうこのビルの中にいる。

“これだけの騒さわぎが.....まさか手で前めゑ独りのための陽動だったのか？ 孔コンっ!! 何もかも.....俺一人を狙ねらったのか？„

考えるほどに悪お寒かんが背筋を蝕むしばむ。そこまでの執しゆう念ねんを向けられて、一体どうしろというのか？

どうせここにいても出来ることは何もない。上海義肢公司はもう終わりだろう。それもこれも劉リユウのせいだ。あの男が孔コンを放置し続けたのが悪い。呉ンにしてみれば、我が身に咎とがめられる謂いわれはない。

“今となっては、命あつての物もの種だね.....„

そうと決めれば呉ンの判断は速かった。この場は退散するに越こしたことはない。

「ペトルーシュカ、おいで……」

脇わきに控ひかえていたガイノイドを側そばに呼び寄せ、デスクの抽斗ひきだしから護身用の拳けん銃じゆうを取り出しながら、呉んは高速エレベーターを社長室フロアへと呼び寄せ、すでに社長室の警護に集つどっていた完全武装の警備員たちに下知を飛ばす。

「三九階からの侵入者は、遠からずこの階を目指してやってくる。何としても迎むかえ撃うて。私は万が一の場合に備えてこの場を離はなれる。……おい、お前」

念のため、警備員の中から特に屈くつ強きような一人を選んで、どう伴はんを命じる。

不安げな眼まな差ざしで見送る他の警備員たちを後しり目めに、呉んは到とう着ちやくしたエレベーターに、護衛一人とドレスの少女人形を引き連れて乗り込んだ。

目指すは四五階、飛空ヴィーグル専用の第二駐ちゆう車しや場じょう。屋上のヘリポートを使うのは不用心すぎる。何が仕し掛けられているやら知れたものではない。

“こうなると斌ピンも、簡単にや収まらないだろうな、”

先日斌ピンが主張した通り、やはり孔コンについては早急に手を打つべきだったのだ。それを洩った劉リユウの責任を、盟証は徹てつ底ていして追つい及きゆうするに違ちがいない。下手をすれば幫ほう会かいにはトップ二人の間で分ぶん裂れつた。

だが何よりも由々しいのは、幫会そのものの行く末である。劉リユウの政策によって、青チン雲ワン幫パンは収益の基き盤ばんをほぼ完全に裏サイバネティクス市場へと移行させてきた。それがここにきて、命いのち綱づなとも言える上海義肢公司を失ったのだ。

“下手をすりゃあ、青チン雲ワン幫パン自体がぶっ潰つぶれたって不思議はねえ。いっそここは、さっさと雲くも隠かくれする手かなあ

……”

そんな呉ンの思考を一突とつ如じよエレベーターケージの屋根を突つき破って奔はしり出た銀光が中断させる。

「な……」

凝ぎよう然ぜんと目を見開いたときにはもう、隣となりにいた警備員がヘルメットごと脳天を串くし刺ざしにされていた。刀身に冷たく波打つ倭わ刀とうならではの刃は文もんが、みるみる血ち飛沫しぶきに染まっていく。

件くだんの襲撃者は呉ンの脱だつ出しゆつを見み越こして、もっとも逃にげ場のない場所に網あみを張っていたのだ。……社長室直通エレベーターのケージの屋根で。

呉ンは咄とつ嗟さに、手にした拳銃を傍かたわらのペトルーシュカのこめかみに突きつけた。いざこの局面を迎えたときの行動を、あらかじめ決めていた周しゆう到とうさがものを言った。

「動くんじゃねえッ！」

「……」

はたして頭上の襲撃者は、それ以上の行動を起こさない。血刀がずるりと屋根の上に引き戻もどされ、即そく死しした警備員の骸むくろがケージの壁へき面めんに寄りかかったまま頹くずおれる。もし呉んが何の思し慮りよもなく銃口を頭上に向けていれば、たちどころに隣にいた警備員の後を追っていただろう。

「へ、へへ……余よ程ほどコイツにご執心だな。紫し電でん掌しよう」

明るいケージの中からは、上にいる孔コンが一体どこの隙すき間まからケージ内を窺うかがっているのか判わからない。見えざる敵との睨にらみ合いが続くうち、呉んの顔を脂あぶら汗あせが伝い落ちる。

やがてエレベーターはゆるやかに減速し、四五階に到着した。滑すべり開いた扉とびらから後ろ足で出る間も、呉んは片かた腕うでで抱だきかかえた人形の頭に銃を突きつけたまま離さない。

床ゆかも支柱も打ち放しのコンクリートが剥むき出しのSV駐車場は、地下にある昔むかし馴な染じみの有輪車両用駐車場とさほど変わ

らない。フロアを一いち巡じゆんする形で敷しかれたタキシング通路の左右に駐車ブースが区分けされ、色とりどりのＳＶが搭とう乗じよう者しやを待って鎮ちん座ざしている。

唯ゆいーいつの相そう違いは出口の外にあるのが地上路へと向かう傾けい斜しや路ではなく、テラス状にせり出した離り着ちやく陸りくデッキになっている点だけだ。

呉ンは通路の真ん中まで出たところで、ペトルーシュカをそこに立たせたまま、さらに駐車ブースまで後退する。むろん拳銃の照準はペトルーシュカの頭部に据すえたままだ。

濤タオ羅ローもまた、狭い視野から呉んが失うせたところで整備用ハッチを蹴けり破り、ケージ内へと降り立った。抜ぬき身の倭刀を手を提さげたまま、エレベーターから半歩だけ踏ふみ出して、銃を構えた呉んを凝視する。

両者はちょうどドレス姿のガイノイドを真ん中に挟はさんで直線上に対たい峙じする形になった。

「あらためて紹しよう介かいするぜ。俺の自じ慢まんの“ペトルーシュカ”だ。このまま俺が引金を引けば……お前の可愛かわいい瑞ルイ麗リーのデータは、木っ端ぱ微み塵じんに吹ふき飛ぶ。解わかるよな？」

「そのときは貴様も命を落とす。生まれてきたことを後こう悔かいするような死に方で」

「ハハハ、そいつぁ願ひ下げだな」

張り詰つめた乾かん笑しようを張り上げた後、呉んは不敵に口元を歪ゆがめて銃の構えを解く。

「撃ちゃあしねえよ、勿もち論ろん。何たって俺の大事なボディガードだからな。一なゝそうだろうペトルーシュカ？ そろそろ頼たのもしいところを見せてくれよ」

「う……」

それまで冷然と濤タオ羅ローを見据えていたガイノイドが、ふいに小さな呻うめきを漏もらす。その目にははっきりと苦痛の色が……ブ

rogramされた人格でない、生きたまま封ふうじ込められた魂たましいの痕こん跡せきが……垣かい間ま見みえた。

「う、ぐ、うううう……ッ!!」

いったい何が起こったのか、ペトルーシュカはまるで急激な痛みの発ほつ作さにでも見み舞まわれたかのように、激しく震ふるえる身体からだを掻かき抱いだきながら、両りよう肩かたを押さえてその場にへたり込む。

「な……」

悶もだえ苦しむ人形へと、訳も解らず駆け寄る濤タオ羅ロー。すでに呉ンの銃口は余所よそを向いている。緊きん張ちようの糸が解ほどけたあと、つい瑞ルイ麗リーを想おもう心が冷静な思慮より先に立った。

「瑞ルイ麗リー、どうし……」

震える肩に手を触ふれようとしたその直前、稲光のような刃やいばの一閃が濤タオ羅ローの喉のど元もとへと奔る。何の前触れもなく放たれた、それはペトルーシュカの繰くり出す一いち撃げきだった。

少女の腕うでの間合いでは、断じて有り得ないはずの奇き襲しゆう攻こう撃げき。濤タオ羅ローが反応できたのは、ひとえに内家武芸者として培つちかった無意無想の防ぼう御ぎよ本能によるものだ。体勢が崩くずれるのも構わず限界まで後ろへと反り返り、そのまま一転して膝ひざ立ちに起きあがる。

いま彼を襲った武器を見て取った濤タオ羅ローは、その場で凝然と凍こおりついた。

鎌かま、である。だがそれはペトルーシュカが手に持った得物ではない。

いや、人形の少女は腕そのものを失っていた。さっきまで右肩があった場所からは細く長い腕節が伸のび拡ひろがり、鎌はその先せん端たんに直じか付づけされている。

まるで蠮螋かまきりが折り畳たたんでいた前ぜん肢しを伸ばし拡げたかのような……そう、ペトルーシュカの腕そのものが展開して伸し

ん長ちようし、内蔵されていた刃を露あらわにしたのだ。

「ひいいいいッ!!」

悲痛な絶ぜつ叫きようととも、今度はペトルーシュカの左腕が縦にはぜ割れる。ドレスの裾すそを裂さいて現れたのは、やはり右と同じ腕節と鎌。このガイノイドは内蔵武装を擬ぎ装そうした戦せん闘とう型だったのだ。

苦く悶もんの叫さけびを上げながら、ペトルーシュカは倍以上に延長された両腕を振りかざして濤タオローに襲おそいかかる。その固く直線的な挙動は、先刻までの生物的な滑なめらかさとは似ても似つかない。四肢を駆く動どうさせるドライバプログラムまでもが交代したらしい。

鎌の斬ざん撃げきそのものは危なげなく躲かわわしたものの、予想もしなかった脅威にどう対処していいものやら判断できぬまま、濤タオローは守りの姿勢で後退する。

素す早ばやく視線を巡めぐらせれば、すでに呉ンの姿は見当たらない。もういずれかのSVに乗り込んでいるのだろうか。

“このままでは取り逃にがす……”

再び風巻く唸うなりとともに二本の鎌が迫せまる。だが反撃に転じた濤タオローは、左右から襲いかかる鎌のうち一方を倭わ刀とうの峰みねでいなし、返す刀で残る一方を鎌の付け根から断たち切った。

「キャアアッ!!」

直後、絹を裂くような絶叫がガイノイドの喉のどからほとばしる。その、あまりに瑞ルイ麗リーを彷彿う彿ふつとさせる悲痛な声に、濤タオローは愕がく然ぜんと凍りつく。

「あううッ!! あぐううッ!!」

怯む濤タオローを苛か烈れつな連続攻こう撃げきで容よう赦しやなく追い立てるペトルーシュカ。だがその頭部だけは髪かみを振り乱し、愛くるしかった美び貌ぼうを痛々しく歪めて涙なみだを散らしている。

腕を引き裂いて鎌を出したときの苦しみようから、察すべきだっ

た。恐おそらくは.....別プログラムにボディの制御を譲りつづけた今も、痛覚だけはそのままに彼女の神経網もうを直撃しているのだろう。

「く.....」

これが呉ンの用意した、濤タオローと対峙するための秘策だった。

ペトルーシュカのボディを徹てつ底て的に改造して武装化し、さらに元々の有機メモリとは別に戦闘ドローン用の戦略AIを積んで、有事には割り込み制御させる。

従来の痛覚神経をそのままに残したのは、ひとえに濤タオローの戦意を萎なえさせるためだ。

呉ンの目もく論ろ見み通り、濤タオローは完全に戦意を削そがれて逃げに徹するしかなくなった。敵と見なして尋じん常じように渡わたり合えば、その刃の痛みを受け止めるのは人形の中に囚われた瑞ルイ麗リーの魂こん魄ぱくなのだ。

間合いが大きく開いたところで、ペトルーシュカは破損した節を基部から破は棄きした。さらに内側の腕節がもう一度展開し、今度は黒光りする筒つつ状じょうの武器が滑すべり出る。

「!？」

それが放熱ジャケットを被かぶせた銃じゆう身しんだと見て取るや否いなや、濤タオローは傍かたわらに停とまっているSVの陰かげへと身を躍おどらせた。

間かん一いつ髪ぱつ、一連の銃声とともに銃じゆう口こう炎えんが狂くるい咲ざき、機銃掃そう射しやの弾だん幕まくが周囲一面に吐はき出される。

飛び散る跳ちよう弾だんの火花の下、身を屈かがめて遮しや蔽へい物の隙すき間まを駆け抜ぬけながら、濤タオローはSVの列を抜けて反対側の通路にまで逃のがれ出た。依い然ぜん、逃げたはずの呉ンの姿は見当たらない。

倭刀を身体に引き付けて構えたまま、車体の陰に身を隠かくす。戦

闘形態に変型したガイノイドは追ってこない。ただ痛ましい嘔すすり泣きの声がコンクリートに反はん響きようし、いずこからともなく耳に届く。

“落ち着け……”

死線に於おいて動どう揺ようすれば、即すなわち活路を見失う。心頭滅めつ却きやく、鏡水の如ごとき心で氣息を調ととのえ、はじめて功は成るというもの。極限下においてこそ内家の心得が問われるのだ。

目を閉とざして調息に専念しながら、濤タオ羅ローは全身を神経の針にして駐ちゆう車しや場内を探さぐった。

キチ…… キチ……

かすかに聞こえる、腕節の冷たく触ふれ合う音が……じわじわと近づいてくる。濤タオ羅ローを目指し一直線に一整列して駐車したＳＶの並びを、まるで無視して移動している。

慌あわてず騒さわがず、濤タオ羅ローは頭上を仰あおぎ見た。

ペトルーシュカはそこにいた。スカートの下に隠していた夥おびただしい数の節足を蠢うごめかし、天てん井じようを這はう配管にしがみつきながら、蜘蛛くものように濤タオ羅ローへと忍しのび寄ってきたのだ。

黒く虚うつろな銃口と目が合った刹せつ那な、濤タオ羅ローは考えるより先に動いていた。

銃声。弾丸。閃ひらめく火炎。それらすべてを別個に判じるほどの切せつ迫ぱくの間。

身を翻した濤タオ羅ローの背後で、その残像の如く遅おくれてはためいたコートの布地が、唸り飛ぶ銃弾に縫ぬわれて糸いと屑くずを散らす。

貫かん通つうした無数の弾丸の、うち数発が背後にあったＳＶの車体を貫つらぬき、そのうち一発の曳えい光こう弾だんが燃料タンクを直撃し……

轟ごうと花開く大輪の爆ばく炎えん。床に転がった濤タオ羅ロー

は、あわやというところで熱波と衝しよう撃げきをやり過ごす。

幸か不幸か、火災は帳とばりとなって両者を分かち、ペトルーシュカの追い打ちを未然に防ぐ形となった。

濤タオローはすかさず起きあがり、再び仕切り直しになった戦いの次の局面に備えつつ―だが燃えはぜる火炎の音とは別に、うねりながら音階を上げていくガスタービンエンジンの駆く動どう音を聞き留める。

このフロアのどこかに、始動をかけているS Vがいる。いまこの駐車場から緊きん急きゆう発進しようという人間は、ただの一人しか思い当たらない。

猛然と通路に駆け出た濤タオローを、まるで待ち構えていたかのように一条のアップライトが射い竦すくめる。タキシング路にも拘かかわらずスラスターを点火して突とつ進しんしてくる一台のS V。その急加速からして濤タオローを轢ひき殺す意図は明白である。

余人ならいざ知らず、殺意の程ほどでは遅れをとらない濤タオローは、すでに危機感に立ち竦むような当たり前の生理反応など持ち合わせていない。片手をライトに翳かざして目を直撃する光だけを遮さえぎりつつ、迫せまりくる車体に真っ向から立ちはだかった。

間一髪―フロントバンパーがその身体からだを捉とらえる直前で、濤タオローはボンネットの上に身を投げ出し、風防の縁へりにしがみつく。

だが飛びついたその直後に、彼は違い和わ感かんに慄りつ然ぜんとした。

アップライトに目が眩くらんで判別しきれなかったが.....事前に調査したところでは、呉ンの私有するプライベートS Vはジャガーだった筈はず。だが今濤タオローが掴つかまっているのは、同じスポーツタイプではあるが、シトロエン製のS Vだ。

目を眇すがめてスモークのかかった風防の奥をのぞき見れば、あに図らんや.....パイロットシートは無人だった。

“図おとりか!?”

気付いたときにはもう遅おそく、S Vは加速に乗ったまま離り着ちやく陸りくデッキを通過して虚こ空くうへと躍り出ていた。待ち受けていたといわんばかりに、高高度の猛烈なビル風が風防の上の濤タオ羅ローを襲おそう。

歯を食いしばりつつ首を巡めぐらした視野の隅すみには、今まさに離着陸デッキから飛び立つもう一台のS Vがあった。

「ククッ、馬ば鹿かが……」

遅れて発進したジャガーS Vのコックピットで、呉ンは会心の笑えみを嚙かみ殺していた。

前後して義ぎ肢し公司の駐車場から発進した二台のS Vは、管制局のコントロールに身を任せ、眼下を行き交かうS Vの群……ビルの谷間を流れる誘ゆう導どう軌き道どうへと合流すべく降下していく。

孔コンを乗せたシトロエンは上り車線。呉んのジャガーは下り車線。すでに両機の距きよ離りは二〇〇メートルばかり開いている。先に誘導軌道に入るのは、手前の下り車線へと入るジャガーの方だろう。

後部警けい戒かいカメラの画像をズームして、呉ンは反対車線へと降下していくシトロエンを見送った。その屋根には依い然ぜん、黒いコート姿の人ひと影かげがイモリのように張り付いている。

勝負はついた。いま孔コンが自動運航中のS Vの風防を強ごう引いんに開けば、それだけで安全装置が働いて強制着陸を余よ儀ぎなくされる。かといって、あのまま車外に張り付いていればなお悲ひ惨さんだ。誘導軌道に入ったが最後、孔コンは巡じゆん航こう速度二〇〇km/hで並へい走そうする車両の流れに乗って、呉ンとは反対方向へと連れ去られていく。

軌道では通行車両の燃費効率を上げるため、強い追い風の人工気流が空気抵てい抗こうを相そう殺さいしている。走行中の風圧だけで吹

ふき飛ばされることはないだろうが、それでも生身を曝さらしてられる場所ではない。いずれ力ちから尽つきるか、あるいは燃料切れを察知したオートドライブが着地場所を見み繕つくろうまで、ああやって屋根にしがみついているしかあるまい。

後方警戒カメラの解像度では、孔コンの面めん貌ぼうまでは判別できない。だが呉ンは、あの男が為なす術すべもなくこのジャガーを見送っている顔を想像しただけで、腹から湧わき上がる哄こう笑しように抑おさえきれない。

「馬鹿が.....ヒヤハ、馬ッ鹿野や郎ろうがァッ!!」

樟ジヤンや朱チウウを殺し、上海義肢公司の警備網もうまで突とつ破ばした怪かい物ぶつを相手取り、呉ンは勝利を収めたのだ。

たしかに地位も名めい誉よも奪うばわれた。だが彼は、あの死神のような男を前にして、こうしてまんまと生き永らえた。それだけで喝かつ采さいを叫さけんでいい。

高度調整を終えたジャガーは、誘ゆう導どう路ろを行く他の車両と併走に入るべく、滑なめらかに加速を始める。

“あばよ。孔コン濤・タオ羅ロー,,

勝者の余よ裕ゆうに胸躍おどらせながら、呉ンはこれが見納めとばかり再び後方カメラに注意を戻もどした。

豆まめ粒つぶのサイズまで遠ざかったシトロエン。たしかにその上に孔コンはいた。

逆巻く風に抗あらがってしがみつくのでもなく、黒衣の人影はキャノピーの上に悠ゆう然ぜんと直立している。画素の荒あれた望遠画像においても、目も絢あやな白はく刃じんの照り返し。突とつ風ふうにたなびくコートの裾すそが、まるで怒ど気きの炎ほのおの如ごとく肩かたより高い位置を舞まっている。

立って一立ってどうしようというのだ？

地上一二〇メートルの高みにありながら、命いのち綱づなもなしに立ち上がって.....何を、どうする？

咄嗟に呉ンは、カメラの画角を最大ズームにまで引き延ばす。画像

が切り替わったその刹那.....求める孔コンの姿は、忽こつ然ぜんと消え失うせていた。

「.....」

今や完全に無人となったシトロエンが、蕭しよう々しように上り車線の流れに吸い込まれていく。

「.....何処どこだ？ 野や郎ろう.....何処に行った!?」

呉ンは側頭部のT Aユニットから巻き取り式のケーブルを引き出すと、ジャガーのコンソールパネルに接続する。都市を網もう羅らする情報ネットへと神経端たん子しをジャックイン。

まばゆいデータハイウェイの煌きらめきを尻しり目めに都市交通管制サービスへアクセスし、難なくオペレーターのパスコードを盗ぬすみ出して、交通モニタシステムに侵しん入にゆうする。

回線内の混乱した様子から、何か非常事態が起こっているのは一目で知れた。呉んのアクセスを正規オペレーターのものと誤認にん証しようしたシステム側は、すみやかに要求に応じる。

脳内視覚野のほぼすべてを使って処理できる限りのウィンドウを開き、上り車線を飛ぶすべてのS Vの警戒カメラから寄せ集められた画像情報を一気にブラウズする。

.....いた。呉んのジャガーと同じ下り車線、はるか後方を走るS Vの屋根に、死神の如き黒い影かげ。

正気の沙さ汰たとは思えなかった。降下途中のシトロエンから飛び降りた孔コンは、呉ンと同じ下り車線を行くS Vの屋根へと着地したのだ。

その影が、ふいにまた画像から消え失せたかと思うと、代わって別のカメラアイが、死鳥の翼つばさのように翻ひるがえるコートの裾を見み咎とがめる。

「.....な.....馬鹿な.....」

ただ立っているだけでは厭あきたらず、それはS Vの屋根から屋根へと飛び移りながら、車両の流れを駆け下りてくるのだ。

上空を行く併走車両に次から次へと跳ちよう躍やくして高度を稼か

せいでから、スリップストリームが来るのを見定めて滑かつ空くうし、はるか下方に行く先行車両の屋根へと着地する。その繰り返しでじりじりと前へ進みながら、ときに左右を抜ぬけていく追い越し車両があれば目め敏ざとく見定めて飛び移る。

上下左右に交こう錯さくして併走する無数のＳＶの群をことごとく足場として活用しながら、孔コンは着実に呉ンのジャガーとの距きよ離りを詰めてくる。

内家武芸の軽功術……呉ンとて見知らぬものではない。だがそれを、高度一〇〇メートルあまりを高速疾しつ走そうするＳＶの上で駆く使しできるものと問われれば、一笑に伏ふしただろう。今この悪夢のような光景を目まのあたりにしていなければ……

真の恐きよう怖ふとは、危機を理解することではない。理解を超こえた危機に直面したとき、人はその意味を知ることになる。

「ペトルーシュカッ!!」

悲鳴に近い叱しつ咤たで、呉ンは異形の戦せん闘とう体型のままトランクルームに待機していた戦闘ガイノイドをけしかける。

下げ知ちを与あたえられたペトルーシュカは、開け放たれたジャガーの尾び部ぶから躍り出るや否いなや、無数の節足とドレスの襞ひだを広げて気流に乗り、迫せまり来る敵を迎げい撃げきすべく車両の流れを溯さかのぼっていく。

その後ろ姿を見送る呉ンの脳のう裏りには、数多あまたの算段が入り乱れていた。

不安定な足場でこそ本領を発揮する多た脚きやく機動ドローン。その形態を模したペトルーシュカなら、今度こそあの男に引導を渡わたすかもしれない。そうでなくても、今こうして管理局のシステムに割り込みをかけたままなら、このジャガーのオートドライブを解除して全速力で飛び去ることもできる。

だが今夜この場を逃にげ延びて、それですべてが終わるのか？

虚こ空くうに身を投じてまで追いすがってきた黒衣の姿。その恐怖が冷え冷えと呉ンの胸を凍いてつかせる。

あれはもはや人ではない。常じよう軌きを逸いつした何か.....狙ねらった獲え物ものを仕留めるためだけの狩しゆ獵りよう者しやだ。

そうだ。ただ勝算を読んで賭かけるだけの勝負に.....命まで預けておけるのか？

戦いの帰き趨すうを何かに任せて、それで安あん穩のんとしていられる局面はとっくの昔に終わったのだ。もう、逃げるだけでは足りない。

“殺す.....奴やつはこの手で殺す!!”

忘れていた獐どう猛もうな衝しよう動どうが胸に湧わき上がる。いつしか呉ンは幫会ほんかいの香こう主しゆでも、大だい企き業ぎようの社長でもない、稀き代たいの電腦犯罪者『網もう絡らく蠱こ毒どく』の呉ン・榮ウイン成シンに戻もどっている自分に気がついた。

管制局のシステムに居座ったまま、呉ンは彼と同様にログオンしている全オペレーターのIDを検けん索さくし、同時に秘中の秘とも言うべきコードをネット上で検索する。

目指すプログラムはすぐに見つかった。かつて若き日の呉ンが組み上げ、ネット上へと解き放ったAIプログラム。それは誰だれに気付かれることもなくネットワークを回遊しながら、数多のウィルスやワクチンを喰くい貪むさぼり、さながら壺つぼの中で共食いを繰り返した毒虫のように、今も成長を続けていた。

人呼んで“網絡蠱毒”。。のちに呉ンの二つ名ともなったこの自律型ワーム・プログラムは、ネット上に公表されたあらゆるデータ攻こう撃げき・防ぼう御ぎよ手段をリアルタイムで解かい析せきし、無効化するルーチンを常に編み出していくのだ。

既き存そんの手段で駆く逐ちくすることは事実上不可能であり、製作者である呉ンの暗証コードにのみ応答して、指定されたシステムを徹てつ底ていつ的に破は壊かいし尽つくす。

“さぁ、久々の出番だぜ。俺の可愛かわいい使い魔までも.....”

永らく味わっていなかった興奮に身を任せながら、呉ンは秘蔵のインテリジェント・ワームに攻撃対象を指示する。.....呉ンを除く、誘

ゆう導どう軌き道どう管制システムにログオン中の全ユーザー。

実行.....同時にシステム内の回線に、次々と声なき絶ぜつ叫きようが轟とどろき渡った。ダイレクト結線を介かいしてジャックイン中のオペレーターが、サイバー化した神経系を直接攻撃に晒さらされて、一人また一人と殺人ワームの餌え食じきとなっていく。

その悲鳴は音として聞こえなくても、錯さく乱らんしたパルスと化して消えていく入力信号、連発されるエラーコードと警告の大混乱が、断末魔の苦痛を物語る。

呉ンは未いまだ己おのれ自身の手で殺人を犯おかしたことはない。が、こうしてネット回線を駆けめぐる阿あ鼻び叫きよう喚かんの残ざん響きようには、幾いく度ど、陶とう然ぜんと聞き入ったことか知れない。

役目を終えた殺人ワームには、引き続いて新規ログオン者への無差別攻撃を指令する。これでもう誰の邪じや魔まも入らない。呉ンは悠ゆう々ゆうとシステムのクラッキングに着手した。

片手間に監かん視しモニタに意識を向ければ、すでに孔コンとペトルーシュカは交戦に入っている。コートの裾すそを翻ひるがえして軽功術で跳とび渡る人ひと影かげは、さながら怪かい鳥ちようの舞まい飛ぶが如ごとく。それと錯さく綜そうする蜘蛛くも型の異形は、鎌かまと機き銃じゆうと金きん髪ぱつの美び貌ぼうを振り回して追いつがる。

多脚機動モードで稼か働どう中のペトルーシュカにとって、この足場の不安定な戦場はまさに独どく壇だん場じようだった。無数の節足を空力的に操作して滑空中にも軌道を変え、しかも飛び移った先のS Vでは、屋根どころか側面や底面にまでしがみついて足場とする。対する孔コンとは運動手段の自由度が格段に違ちがう。

思いきった反撃に移れない孔コンは、明らかに分が悪い。逃げの一手に徹てつする標的を追つい跡せきしながら、執しつ拗ように機銃の弾だん丸がんを浴びせるペトルーシュカ。

流れ弾だまは容よう赦しやなく周囲のS Vの車体を抉えぐって破壊

していく。次々と制御を失い、あるいは空中で爆ばく散さんしながら脱だつ落らくしていく罪もない—いつ般ばん車両。

連発する救難信号と、泡あわを食った警察担当者からの問い合わせが殺さつ到とうするものの、もはや管制センター内には生きてそれに応答できるスタッフなどいない。呉ンは鼻で嗤わらって通信を遮しや断だんし、回線速度を確保する。

“.....よし、”

さしたる手間もなくクラッキングは完かん了りようした。下り車線の誘導軌道における全S Vのオートドライブを統とう轄かつするシステムが、今や丸裸で呉んの前に晒されている。

“お楽しみは.....これからだぜエ、”

歪んだ遊び心にとらわれた呉んは、まず各S Vの車外に設しつらえられた警報スピーカーに干かん渉しようした。

戦いの中濤タオ羅ローは、沸ふつ々ふつと胸に湧わく焦あせりを懸けん命めいに押さえ込んでいた。

これだけ不利な状じよう況きよう下かで戦せん闘とうガイノイドと相対しては、ただ防戦一方にならざるを得ない。呉んのジャガーとは一向に距きよ離りを詰つめられず、戦況は膠こう着ちやく.....いやむしろ、長引けば長引くほど濤タオ羅ローに不利だ。

いま彼は吉ジリリ製S Vバンの側面に左手一本でぶら下がり、相手の機銃の照準から身を隠かくしている。ペトルーシュカは車体を挟はさんだ反対側を並へい走そうするS Vのいずれかに乗って、濤タオ羅ローの熱源反応を探さぐっているのだろう。それとも、あの昆こん虫ちゆうめいた機動力でこちら側に回り込んでくるか—

相手の出方を判じかねているところで、突とつ如じよ、バン側面にあるスピーカーホーンが嘲あざけるような哄こう笑しように放ち始めた。.....驚くほど鮮明な呉ン・榮ウイン成シンの音声で。

『さあて皆みなさんお立ち会い！ これより御覧らんに入れますのは、『紫し電でん掌しよう』こと孔コン濤・タオ羅ローが演じます一世一代の空中大サーカス!! さあさとくと御覧ろうじろ!!』

「な……」

奇き態たいな声に身構えた直後、掴まっていた吉ジ利リが突如、狂くるったようなバレルロールを開始する。

「!?」

あわや振り落とされかかった所で跳ちよう躍やくし、隣のＳＶへと飛び移る濤タオ羅ロー。そこへ今度は並走するトラック型ＳＶが急旋せん回かいをかけて突つつ込んでくる。

再び飛び退のいた眼下で、激げき突とつして爆ばく発はつ炎えん上じようする二台のＳＶ。

“呉ンかッ!!”

敏びん腕わんハッカーの本分に立ち戻もどった『網もう絡らく壘こ毒どく』が、その特技ならではの手段で牙きばを剥むいてきたらしい。誘ゆう導どう軌き道どうに乗っているＳＶのオートドライブそのものに干渉し、濤タオ羅ローを墜つい落らくさせる腹だ。

着地する先々のＳＶが、ことごとく乗り手を拒む荒馬のように濤タオ羅ローを振り落としにかかり、あるいはもろともに自じ滅めつしようとする。もはや彼は一いつ瞬しゆんたりとも留まることなくＳＶからＳＶへと跳び渡わたるしか他ほかになかった。

呉ン自身の処理能力では同時操作できるＳＶの数に限りがあるのと、彼に濤タオ羅ローが飛び移る先のＳＶを予期できるだけの戦闘センスがないことが、せめてもの幸いだった。もし着地点にあるＳＶの機動を妨ぼう害がいされていたら、濤タオ羅ローはひとたまりもなく一〇〇メートル下の地表へと転落していただろう。

“これ以上は、保もたない……”

決断のときだった。呉ンを仕留めるその前に、まずは呉ンを守るペトルーシュカをどうにかしなければ。

高く弧こを描えがいて跳躍しながら、濤タオ羅ローは周囲に視線を

めぐらせる。すぐさま視野に捉とらえたペトルーシュカは、眼下を行くＳＶの屋根にいた。次の一跳とびに渾こん身しんで臨のぞめば……届く。

着地先のＳＶで歇歩シエブに構え、数分の一秒間だけ練気。車体が呉ンによって回転を始める直前に、一気にペトルーシュカの頭上めがけて躍おどりかかる。

「撥はっつ！」

ここに至っては、やるしかない。余計な痛みを与あたえるのは忍しのびないが、せめて一ひと太た刀ちのもとに頸くびだけを落とせば……

だが滑空中の濤タオ羅ローが薙なぎ払はらおうとしたその刃やいばの前に、よりによってペトルーシュカは、泣き叫さけぶ頭頂部を盾たてのようにして突き出してきた。

“く……ッ!!”

これでは頸くびを刎はねるところが頭部そのものを両断してしまう——その躊躇ためらいに刃じん速そくの鈍にぶった倭わ刀とうを、まんとペトルーシュカの鎌かまが弾はじき返す。

有機メモリを納めた頭部は、濤タオ羅ローには決して攻こう撃げきできない場所である。そこを最大の防ぼう御ぎよ手段として活用しよう、戦闘ＡＩはプログラムされていた。

ペトルーシュカと同じ車両の屋根に、背中合わせに着地する濤タオ羅ロー。すかさず追い打ちをかけようと振り向き人形に背を向けたまま、濤タオ羅ローはさらに並走する車両の屋根へと跳躍した。

その背中を逃のがすまじと機き銃じゆうの銃口が追つい尾びする。だが濤タオ羅ローは足場を蹴けると同時に、電磁発はつ勁けいの『轟ごう雷らい功こう』を放っていた。放射されたＥＭＰはペトルーシュカのシールドされた神経回路を焼くほどの出力はなかったが、その足場にしているＳＶを制御不能に陥おちいらせるには充じゆう分ぶんだった。

足元のＳＶが不意にバランスを失ったせいで、ペトルーシュカは照

準を狂わされ火線から濤タオローを逃す。

即そく座ざに人形もまた跳躍し、墜落するＳＶと運命を共にすることは逃れたものの、新たに飛び移ったのははるかに下層を走る車両だった。先んじて無事に跳んだ濤タオローとは、いまや大おお幅はばに高度差が開いている。再び肉にく薄はくしてくるには、幾許いくばくかの余よ裕ゆうがあるだろう。

なお幸いなことに、続いて濤タオローが着地したアストンマーチンのＳＶクーペは、風防が割れて口を開けていた。

おそらくペトルーシュカの撒まき散らした流れ弾だまによるものだろう。中のドライバーも絶命している。車内で異常の発生したＳＶは緊きん急きゆう着陸させられるのが普ふ通つうだが、どうやら管制システムが呉ンに乗っ取られたせいで安全装置が働かないらしい。

“こいつだ！”

濤タオローは即そく断だんし、割れた風防の下に滑すべり込んでシートにしがみついた。

ここに至って、何を思ったか一台のＳＶに乗り込む孔コンの様は、むしろ呉ンの監かん視し下にあった。

“何だぁ？ 手て前めエの棺かん桶おけを選んだのかい？”

誘導軌道を行くすべてのＳＶが呉ンの意のままになっている今、敢あえてその一台に乗り込むなど自殺行こう為いも同然である。中に入れば振り落とされることはないにしろ、ならばビルの壁へき面めんにも叩たたきつけてやればいい。

だが、孔コンが乗ったＳＶのコントロールを乗っ取ろうとしたところで、件くだんのクーペは監視システムからの割り込み信号を拒きよ絶ぜつする。

“？ ははぁん”

この期ごに及んで何かと思えば.....孔コンは乗り込んだＳＶの操縦

系にプロテクトを入力していた。

それも管制局の誘導電波そのものを遮断する割りインター込みセプトキャンセラーではなく、自車と管制センターの間に防ぼう壁へきを巡めぐらせただけ。子供騙だましも同然の対処といえた。

ならば何のことはない。防壁を破って再び操縦権を奪だつ取しゆするだけのことである。その道に通じた呉んにしてみれば、憐れん憫びんをもよおすほど愚おろかで痛々しい抵てい抗こうだった。

『いけないなあ孔コンくん。交通ルールは守ってもらわないと』

悠ゆう々ゆうとプロテクト破りのルーチンを探さぐる片手間に、呉ンは車内スピーカーに干渉して車内の孔コンに嘲あざけりを浴びせる。

「ずいぶんと愉たのしんだ様子じゃないか。呉ン」

マニュアル操作に戻った機内で操縦桿を握った孔コンは、己おのれの命運を知ってか知らずか、泰たい然ぜんと返事を返す。

「やはり貴様には社長の椅子すなんかより、テロリストの方が似合ってる」

『ハハハ、違ちげえねえ。お前の死出の手た向むけによ、このS Vも何処どこか素す敵てきなところに突つつ込ませてやろうじゃないか。発電所とか病院とかな』

「……破れるのか？ この防壁が」

『お茶の子さいさいってなもんよ。……ほれ、この通り』

濤タオ羅ローの握にぎる操そう縦じゆう桿かんが不意に手て応ごたえを失い、入力に反応しなくなる。車体は再び、呉ンが統すべる管制センターのコントロール下に戻もどったのだ。

『さ、言い残すことはあるか？ 紫し電でん掌しようよお』

「最後に通信してくれたことを感謝する。呉ン・榮ウイン成シン」

死に行くものには不似合いな不敵さで、濤タオ羅ローは冷然と嗤わらった。

「貴様の死に様は見届けられないが、これで悲鳴だけは聞いておけそうだ」

『……あ？』

孔コンの言葉を判じかねた呉ンは、そこでようやく異変に気がついた。

システム全体に拡張した意識を、まるで氷の触しよく手しゆのような冷気が包み込んでいく。

“な……まさか……”

擬ぎ装そう防壁。なぜ気がつかなかったのか。呉んが食い破ったはずのプロテクトコードが、いま呉んの側のシステムで再構築され別の形に化けている。あまりにも馴な染じみ深いその構造体は――他ほかならぬ、彼の編み出した“網もう絡らく蠱こ毒どく”のそれだった。

“ふ、ふざけるなッ！”

呉んだけが知る暗証コードでワームの停止を試みる……が、許きよ諾だくされない。このプログラムは呉んのオリジナルではなかった。誰だれか第三者が手を加えている。

“な……な……そんな!!”

まさか我が身で味わうとは思ひもしなかった、スマートワーム“網絡蠱毒”による神経攻こう撃げき。

即座に呉んはログアウトし、ジャガーのコンソールに繋つないだケーブルを引き抜ぬこうとした。が、腕うでが凍こおりついたように動かない。すでに殺人ワームの触手は呉んの神経網の奥深くにまで食い込んでいた。

「冗じよう談だんじゃ……」

茫ぼう然ぜんと呟つぶやきかけたそのとき、想像を絶する激痛が呉んの脳のう髄ずいを焼きはじめた。

もはや何の危険もないオートドライブで巡じゆん航こうするアストンマーチンの車内で、濤タオ羅ローは眉まゆ一つ動かさず、スピーカーからほとばしる悲鳴に耳を傾かたむけていた。三人目の仇かた

き……この手で直々に殺してやれたわけではないが、末路としては順当だ。

呉ンとの対決に備えて、万一のこともあろうかと梁リヤンから仕入れておいた対電腦戦の備えが、まさか最後の決め手になろうとは。

かつてない形の戦いに疲弊した濤タオローは、思わずクーペのシートに深く身を預けて吐と息いきをつく。ともすれば嘔むせ返りそうになる胸の苦しさは、二度にわたって駆く使しした『轟ごう雷らい功こう』の影えい響きようだろう。今夜もまた、随ずい分ぶんと寿じゆ命みようを縮めたようだ……

軽い衝しよう撃げきが、クーペの車体を不ふ吉きつに揺ゆする。まるで車体の底面に何かは衝しよう突とつしたような。

“……!!”

咄嗟に濤タオローが飛び退のいた操縦席のシートを真下から突き破り、鋭するどい鎌かまがその切っ先を覗のぞかせた。

ほんのいつときだけ意識から外れていた戦せん闘とうガイノイド、ペトルーシュカ。だが彼女に組み込まれた戦闘ＡＩは、依い然ぜん、濤タオローをターゲットとして認にん識しきしたまま追つい跡せきを続けていたのだ。

シートを貫いた不意打ちから辛からくも逃れた濤タオローだが、狭せまいクーペの車内には行き場のあろう筈はずもない。必定、割れたキャノピーの開口部から転がり出る形となった彼タオローは、そのまま車体から落下しそうになる。

もはや手て掛がかりを掴つかむ暇ひまもない。そう即断した濤タオローは、咄とつ嗟さの反射運動でアストンマーチンの側面を蹴けり、何はともあれ真横へと跳とんだ。

完全に運任せの跳ちよう躍やくの果てに……虚こ空くうを泳ぐ浮ふ遊ゆう感かんの絶望と恐きよう怖ふに包まれながら、濤タオローは全神経を動員して足がかりと着地先を探り求める。

さし伸のばした左手が、すぐ上を追い抜いていくＳＶの裏面に引っかった。その途と端たん、横に跳んだ身体からだに新たな角度のべ

クトルが加わり、濤タオローは駒こまのように回転しながら車体の進行方向へと投げ飛ばされる。

その落下先の軌き道どうに別のS V。着地は無理でも蹴ることはできる。

もはや後のない濤タオローは、下方に新たな跳び先を探しつつ、起死回生の軽功術で次のS Vのリアフェンダーを蹴り、狙ねらい定めた着地地点へと体たい軀くを跳ばした。

咄嗟に見定めた逃とう避ひ先.....それはひときわ大型のコンテナトラック型S Vだった。広いカーゴ部分の屋根に肩から激突するような姿勢で落下した濤タオローは、受け身らしい受け身も取れずコンテナの尾び部ぶへと転がっていく。

そのまま転落しそうになるところを、すんでのところ左で左手が突起物を掴み、濤タオローはコンテナの縁へりすれすれの場所で身を支えた。

九死に一生を得たものの、もとより人体の構造は、おのれの膂りよ力りよく、瞬しゆん発ぱつ力りよくの完全発揮に耐たえうる強度を備えていない。それでもなお内家拳けん士しが極限の運動力を発揮するのは、内力によって臓ぞう腑ふを守り、血流を律する調息の功が成ってのことだ。もし氣息が乱れ、内力の散じたまま限界の体技に頼たよれば.....

膝立ちになろうとした濤タオローの視野が、やおら帳とばりに覆おおわれたように暗くなる。

“.....迂う闊かつ！”

ブラックアウト。連続した高Gに晒さらされる戦闘機パイロットを見舞う症しよう状じようである。急加速により血流が足へと偏かたよって引き起こされる脳貧ひん血けつ。極限の状況下で濤タオローが駆使した軽功は、じつにジェット機の超ちよう音速機動に匹ひつ敵てきする肉体的負担をかけていたのだ。

闇やみに閉とざされた世界の中で、吹ふき抜ける風の冷たさだけが、濤タオローに我が身の位置を認識させる。高度一〇〇メートル

を疾しつ駆くする、断だん崖がいの突とつ端たんにも似たS V車両の縁。逃にげ場などあろう筈もない。

コンテナの屋根に震しん動どうが伝わる。濤タオ羅ローの反対、車体の正面側にもう一体、招かれざる便乗者が飛び乗ったのだ。

むろん問うまでもなくペトルーシカ……死し闘とうの果てに、ついに訪おとずれた勝機を必殺のものとするべく、戦闘A Iが選定した無む謬びゆうの攻撃ポジション。最後は、避よける暇とてない近きん距きよ離りからの機き銃じゆう射撃で決着をつけようというのだろう。

大型S Vの先頭と後こう尾びで、両者は長いコンテナを間に挟はさんで向かい合う。絶体絶命の窮きゆう地ちにあって、だが濤タオ羅ローの胸中は凧ないだ湖面のように静かだった。

この恐怖、この緊きん張ちよう。かくもまざまざと感じ取れるのは、今この身を晒した危機を知るが故ゆえだろう。

目を閉じてなお知りうるのは……それを告げるのが目ばかりではないからだ。

前まえ髪がみをなぶる風の音。未いまだ放さぬ右手の倭わ刀とうを翳かざしてみれば……ほんの微かすかな差とはいえ、その風さえもが音色を変える。

そう……空気の流れに心を致いたせば、正面に立ちはだかるガイノイド、その背中に遮さえぎられた気流の乱れを感じ取れる。

漆黒の濤タオ羅ローの視野に、いま鮮せん明めいに敵の位置が浮かび上がった。放熱ジャケットにまわりつく熱気、焼鉄と硝しよう煙えんの匂におい……機銃の照準は、今まぎれもなく濤タオ羅ローの眉み間けんに据すえられている。

もとより視力で捉とらえうる弾だん道どうではない。ならば視界を失ったところで、何の不都合があろうか。

眼めの色境に“在らず”とも、まぎれもなく敵はそこに“在る”。耳の声境に。鼻の香境に。舌の味境と身の触境に……そして意の法境に。世界は、森しん羅ら万ばん象しようは平素と変わらぬ姿でそこに

“在る、” のだから。

流れを取り戻もどした内息が、丹たん田でんに充じゆう溢いつする。濤タオ羅ローは静かに膝ひざを上げ、肩かたの力を抜ぬいて倭刀を構える。

ガイノイドの下か肢しを支える無数の節足が、僅わずかに……ほんの僅かにだけ固くコンテナの屋根を噛かむ。その音が、震動が、あますところなく濤タオ羅ローに告げた。機銃の反動に備えた、射撃のための予備動作。

極限まで高まる氣き。一いつ刹せつ那なよりも僅かな六徳の間、よりなお細い虚きよの瞬間—それよりも—虚よりなお空—空よりなお清—清よりその果ての浄じょうの境地—

濤タオ羅ローは踏ふみ込んだ。大きく前へと。

すでに視力も明暗を判じる程度には戻ったと見えて、閃せん光こうの気配だけは確かにあった。その仄ほの光ひかる光源へ向けて突とつ進しんしながら、超音速で迫せまり来た殺気の礫つぶてを、倭刀の切っ先で払はらいのける。

大きな動作は必要ない。二つ、三つ、四つと続いて、殺気の礫は連続する。

その悉ことごとくを打ち払いながら、ようやく濤タオ羅ローは銃じゆう声せいを聞いた。ここまでの四手、どうやら音速より速かったらしい……そんなことを漫まん然ぜんと意識しながら、なおも濤タオ羅ローは、引き続き迫る礫を落とす手を休めない。

世界を象かたどる六境のすべてを、余さず濤タオ羅ローは捉えていた。いつしか視野が元通りに像を結んでいたことにすら、すぐには気付かなかったほどに。

“成った、か—”

戴たい天てん剣けん法ぼうが秘ひ奥おう技ぎ、『六りく塵じん散さん魂こん無む縫ほう剣けん』。今ここに……絶技、開眼。

秒間数十発の回転速度で撒まき散らした銃じゆう弾だんが、ただ一発の例外もなく倭刀の刀身に弾はじかれたという事態を、ペトルー

シュカの戦闘 A I はどう判じたのか。いずれにせよ、突進する濤タオ羅ローに内うち懷ぶところまで踏み込まれた彼女に、続く拳動ではどう対処する術すべもなかった。

白はく刃じん一いつ閃せん、刎はね飛ばされた人形の首が高々と宙に跳とぶ。流星の尾おのように靡なびくそのブルネットの頭とう髪はつを、濤タオ羅ローは返す刀の峰みねで絡からめ取る。

引き戻す倭刀と入れ違ちがいに、左から繰くり出す掌しよう底ていの一撃。

とどめに打ち込まれた『紫し電でん掌しよう』は、ペトルーシュカのボディとそれを統すべる戦闘 A I を完全破は壊かいし—だが、そんな苦痛の源とすでに分たれていた頭部は、悲痛な絶ぜつ叫きようを放つこともなかった。

弾き飛ばされたペトルーシュカの残ざん骸がい、眼下の地表へと落下していく様を、濤タオ羅ローは取り戻した頭部を抱かかえたまま見守る。しばし失っていた視力は、もう焦しよう点てんや距離感まで回復していた。

右手には、いつもと変わらぬ倭刀。この一刀が今しがた、長年追求めた悲願の秘剣をものにしたとは.....悪い冗じよう談だんとは思えない。

悶もだえ苦しみ、絶望に哭なくほどに鋭するどく研とがれる功の冴さえ。師の薫くん陶とうとはあまりにかけ離はなれた現実、濤タオ羅ローは我知らず失しつ笑しようを漏もらした。

“これが剣の理ことわりというのなら.....かつての修しゆ業ぎようは何だったのか?..”

師し匠しようならきっと邪じや法ほうと罵ののしるだろう。憎ぞう炎えんの剣、執しゆう念ねんの剣、いずれは己おのれ自身をも食くらいつくす鬼き道どうの技わざと。

だが、それでいい。剣は人を斬きり、命を絶つ利器。やがて、それを執とる者もまた滅ほろびるのは.....むしろ道理ではないか。

歪ゆがんだ笑えみを顔に貼はりつかせたまま、濤タオ羅ローは眼下

を飛び過ぎる街の灯ひを眺ながめていた。

舞まい散る桃ももの花の下で、また瑞ルイ麗リーは琴ことを弾ひいていた。

嬬じよう々じようと琴が奏かなでる旋せん律りつは、まるで終わりのゆく桃の季節を嘆なげいているかのように儚はかなく哀かなしく……なのに普ふ段だんの清せい澄ちような風ふう雅ががない。

どこか危あやうい、心騒さわがされるものを孕はらんだ演奏は、弾き手が心乱れる胸中を律しきれていないからだろう。まるで思いの丈たけを弦げんにぶつけるかのように、秘ひめてなお激しい感情が、ひしひしと聴きく者に伝わってくる。

身につまされる思いでその演奏を聴きながら、濤タオ羅ローは遠く離れた四阿あずまやから妹の姿を見守っていた。客人を取り次ぐ家僕の声にも、ただ生返事を返すばかりだ。

「浮うかない顔だな」

ほどなく通された来客は、開口一番、無ぶ遠えん慮りよにそう指し摘てきする。幼い頃ころから互たがいを知り合う兄弟弟で子しの間あいだ柄がらだけに、物言いに遠慮がない。

「瑞ルイ麗リーがな。また口を利きいてくれなくなった」

辟へき易えきと呟く濤タオ羅ローもまた、彼の前では取り繕つくろうことをしなかった。深く嘆たん息そくしながら、困こん憊ばいしきった面おも持ちちで豪ホー軍ジュンに向き直る。

「外地での務めとなると、決まってこれだ。明日の朝には出発だっていうのに、まったく……どうしてこう聞き分けがないんだか」

「お前、どうせまた藪やぶから棒に切り出したんだろう？ もっと事前に話しておけばいいものを」

濤タオ羅ローの困憊を余所よ所に、豪ホー軍ジュンの声はあくまで朗ほがらかだ。この兄妹きようだいの諍いさかいはもう飽あきがくるほどに見慣れている。

「仕方なかったんだ。あいつ、いつも俺の仕事の話になるとすぐ話題をそらすから」

「もう素す直なおに謝っておけよ。蟠わだかまりを残したまま発たつ

つもりか？」

「ああ、もう構わん。たまには良い薬になるかもしれん」

慄ぶ然ぜんとして嘯うそぶいて、かぶりを振る濤タオロー。

「あいつはどうも、兄の俺に甘えすぎているきらいがある……先行きが心配だ」

「そうは言っても、満まん更さらでもないんだろうが。お前だって」

「俺はともかく、あまり機き嫌げんを取ってばかりじゃ、あいつを娶めとる男が泣きを見る」

「それは大変だ」

「……おいこら、他人事ひとごとじゃないだろうが」

気安く相あい槌づちをうつ豪ホー軍ジユンを、濤タオローは真顔に戻もどって諫いさめる。

「これからあいつを支えていくのは、俺じゃない。委細あんに引き受けてもらわなきゃならないんだ」

「心得てるさ。兄者」

豪ホー軍ジユンは底意地の悪い笑えみを浮かべて、恭うやうやく叩こう頭とうする。

「やめてくれ……」

「なぜいかん？ 俺の妻になる女性の兄君なんだ。拝はい跪きするのが当然だろうが」

「馬ば鹿かを言うなよ。戴たい天てん流門下じゃ俺はあんたの……」

「それはもう言わない約束だろうが」

話がここに至ると決まってそうするように、豪ホー軍ジユンは頂うなじに移植した接続プラグへと、これ見よがしに指をやる。

「こいつひとつを埋うめ込むだけで、動けい穴けつが四つも麻ま痺ひしたよ。俺の内功はもう以前の三割にも満たない」

「……」

高度情報化の爛らん熟じゆくとも言えるネットワーク・ソリューションの進行により、今や社会のあらゆる局面において、一線で活かつ躍やくする人材には必ひつ須すとなったダイレクト結線インター

フェイス。

事情は黒社会においても変わらない。武芸だけでなく、その類たぐい希まれな将器を買われて香こう主しゆに抜ばつ擢てきされた劉リユウ豪・ホー軍ジユンだったが、それは同時に、サイバネティクスという時代の潮流に身を任せることをも意味していた。

「近ちか頃ごろは、外家の連中からも誘さそいを受けててな。いずれは義ぎ肢しの類にも手を出すかもしれん。そうなれば俺は勤けい絡らくそのものを失って、氣きを巡めぐらすことすら叶かなわなくなる」

「豪ホー軍ジユン……」

「お前と磨みがいた内家の拳けんに、未練がないと言えは噓うそになるが……そもそも武門に身を投じたのは、親兄弟と青チン雲ワン幫パンに尽つくすためだ。

その幫ほう会かいが、俺に武でなく知ち謀ぼうを求めるのなら是ぜ非ひもない。剣けんの道は諦あきらめるさ」

事も無げに語る豪ホー軍ジユンを前にして、濤タオ羅ローは内心、忸じく忸じたる思いを禁じ得ない。

「幸い、俺なんぞいなくても、戴天流はお前という後こう継けい者しやに恵めぐまれた」

「それは……」

濤タオ羅ローの口を衝ついて出かかる言葉はしかし、今となってはあまりに詮せん無い。

“本当なら……免めん許きよ皆かい伝でんはあんたが授さずかるべきだった。あんたこそ真の功夫だった。俺なんて及およびもつかないのに……”

「寿ことほいでくれよ濤タオ羅ロー。俺は、これでいい」

かつての弟弟子が胸に秘める葛かつ藤とうを、豪ホー軍ジユンもまた察していたのだろうか。その笑顔は秋空のように濁にごりなく涼すずしかった。

「立身出世も悪くない。とりわけ妻を持つ身ともなれば、な。

ひとつ覇は道どうを進んでみるさ。時代錯さく誤ごの剣客なんぞよ

り、瑞ルイ麗リーには余よ程ほどいい暮らしをさせてやれるだろう」
「……」

これでいい……そう言って豪ホー軍ジユンが笑うなら、それは何一つ間ま違ちがいのないことなのかもしれない。

はたと気付けば胸の蟠わだかまりを解かれていた自分に、濤タオ羅ローは苦く笑しようする。そんな風に語らう相手の心をいなししてしまう包容力が、昔からこの男にはあった。

劉リユウ豪・ホー軍ジユンという男の不思議な眼まな差ざし。見る者によってその眼光は、あるときは涼やかな秋風に、またあるときは氷結した刃やいばに変わる。

彼を畏おそれる一部の手合いが『鬼き眼がん麗れい人じん』などと渾名あだなしているのも、解わからない話ではない。敵に廻まわせばこれほど脅きよう威いとなる男もいないだろう。

「ともかく明日になる前に、瑞ルイ麗リーには一言詫わびておけ。俺だってあの子の笑顔を見ていたい。お前の留守中、ずっと沈しずんだ顔でいられては敵かなわん」

「そうだな……」

この男を朋ともとする我が身の幸。そして、やがてこの男へと嫁とつぐ瑞ルイ麗リーの幸。不ふ祥しようの剣を振ふる凶きよう手しゆの身にありながら、これほど幸多き世界に生きて……濤タオ羅ローは罪の意識さえ懐なついてしまう。

長く残ざん酷こくな時を隔へだてた未来で、濤タオ羅ローは目を覚めました。

朽くち果てた関かん帝てい廟びようの中、一刀を抱だいたまま床とこに伏ふせて、どれほど眠ねむりを貪むさばっていたのだろうか。外からは重くのしかかるような雨音が、廟内の空気を押し包んでいる。

現世は夢と誰だれかが言った。ならば今濤タオ羅ローが直面する現

実も、或あるいは遠き日の彼が桃とう花かの下で魔うなされている悪夢なのだろうか。

だとしても、今の濤タオ羅ローに救いはない。すでに復ふく讐しゅうの剣けん鬼きとなり果てた彼は、とうに悪夢の一部分である。このまま残りの悪夢を演じ続けながら、夢の終わりまで戦い続けるしか他ほかにない。

“.....馬ば鹿か馬ば鹿かしい„

濤タオ羅ローはそう己おのれを一いつ喝かつして戒いませしめる。

仮か眠みんのつもりが、感傷を夢に見るほど深く寝ね入いってしまうなど、度し難がたい怠たい慢まんである。不覚を取って奇き襲しゅうを許せば命取りになっていただろう。

“.....疲つかれが溜たまったか？„

連日、休みなく死闘に臨のぞんできた濤タオ羅ローだが、わけても昨夜の戦いはかつてなく熾し烈れつで.....とりわけ犠ぎ牲せいも多すぎた。

スチュグレフたちに生いけ贅にえの形で差し出した上海義肢公司には、深夜シフトの従業員も大勢いただろう。さらにこの誘ゆう導どう軌き道どうで巻き添ぞえを食った一いつ般ばん車。その殆どが呉ンの辺り構わぬクラッキング攻こう撃げきによるものだったが、濤タオ羅ロー自身もまた『轟ごう雷らい功こう』の放射で一台のS Vを墜おとしている。

それに、梁リヤン.....この手で殺した。最後まで騙だましきったまま。

意にも介かいさぬ、そう思っていた。現に、その手に剣けん柄ぺいを執とっていた間は、何の呵責かしやくも感じなかった。

だが.....今こうして惨さん劇げきの場を離はなれた後には、むしろ目に焼き付いた地じ獄ごくが生々しい。残る斌ピンと劉リユウを倒たおす頃ころには、どれほど屍しかばねの山が積み上がっていることが。

“.....考えるな。己は化け生しよう。己は修しゆ羅ら。そう思い定め

ていた筈はずだろうが.....」

沈む思いを振り払はらおうと意識を外に向け、そこでようやく濤タオ羅ローは、思いのほか静かな廟内の空気に気がついた。ここ最近の瑞ルイ麗リーが居ながらにして振りまいていた活気が、今朝はない。

慌あわてて首を巡めぐらせば、彼女は昨夜持ち帰ったペトルーシュカの首を、漫然と弄もてあそんでいる。

黙もく然ねんと想おもいに耽ふけるその横顔は、今の幼い姿をした瑞ルイ麗リーには似合わず、むしろ遠い日のままの彼女の物もの憂うげな横顔を思わせて.....濤タオ羅ローの息を詰つまらせる。

瑞ルイ麗リーは兄の視線に気付くと、静かに微笑ほほえんだ。

「めがさめた？」

舌足らずな口調はそのままに、だが情じよう緒ちよを程々に慎つつしんだ仕し種ぐさには、毒気を抜ぬかれるほどの大人びた風情ふぜいがある。

昨夜この廟に戻もどってすぐに、ペトルーシュカからの魂こん魄ぱくデータを彼女へと転写した。結果は.....たしかに覲てき面めんといえよう。瑞ルイ麗リーはまた明らかに変わった。だがそれは、言葉を発するようになったり、兄の顔を認にん識しきしたりといった、目に見えて解りやすい変化ではない。

瑞ルイ麗リーは無む邪じや気きにはしゃぐようなことをしなくなった。強しいて言うなら、彼女は一思し慮りよとでも言うべきものを取り戻したのだろうか。

「あにさまのねがお、しあわせそうだった。.....たのしいゆめを、みたの？」

「.....いや.....」

嘘うそではない。いかに優やさしい夢であろうと、醒さめてみれば極きわめつけの悪夢だ。今日の日繋つながら過去に、あんな情景があったなど.....思い出すだけでも腑はらわたが煮にえくり返る。

憎にくしみの在処ありかを求めるときは必ずそうしてきたように、濤タオ羅ローはシャツの布地越ごしに胸の傷きず跡あとを探さぐる。

胸むな板いたを斜ななめに横切る一文字の刀傷。袈け袈さ掛がけの一ひと太た刀ちを浴びて濤タオ羅ローは船から落ちた。あのときの豪ホー軍ジュンも……笑っていた。何の邪気もなく朗ほがらかに。

「わたしもね、きのう、ゆめをみたの。あにさまのいない、ひとりぼっちのとき……ゆめのなかで、ホオジュンとあったよ」

見えざる鎚つちの一撃が、濤タオ羅ローの心を打ちのめす。

「……思い出したのか？ あいつを」

「うん。あにさまがだいすきだったホオジュン。とっても、かわいそうなひと」

邪気のない瑞ルイ麗リーの一言一言が、まるで足元に奈な落らくの口をこじ開けていくかのようだった。

「……何があったんだ!？」

掠かすれた声で質ただしながら、濤タオ羅ローは瑞ルイ麗リーの小さな肩かたを掴つかむ。

「なぜ豪ホー軍ジュンはお前をこんな風にした？ どうして……教えてくれ、瑞ルイ麗リー!!」

「あにさま……いたい……」

抗こう議ぎの声に、慌てて手を放す濤タオ羅ロー。

そんな狼ろう狽ばいした兄の様を、なにか不思議なものでも眺ながめるかのように、瑞ルイ麗リーはすぐに表情を和やわらげてクスリと笑う。

「あにさま、すごくこわいかお。ホオジュンのこと、おこってるの？」

「……」

己を陵りよう辱じよくして殺した男について、こうも無邪気に問いかけることなどできはしないだろう。だとすると瑞ルイ麗リーは、まだ豪ホー軍ジュンについて全すべてを思い出したわけではない……ということか。

マカオで負わされた傷を癒いやすために身を潜ひそめ、秘ひそかに上海に戻る算段をつけるうち、一年の歳月は飛ぶように過ぎた。その

間、常に濤タオ羅ローを苛さいなみ続けた疑問はただひとつ。……何なに故ゆえ、豪ホー軍ジユンは彼を斬きったのか？

いったいどんな由ゆ縁えんでこんな仕打ちを受けたのか、濤タオ羅ローには皆かい目もく見当もつかない。まして、既に豪ホー軍ジユンの妻となっていた瑞ルイ麗リーにまで累るいが及およぼうなど、想像できるはずもなかった。

そうと解わかっているならば、こんな傷など構わずに上海へ戻るべきだったのだ。何もかもが遅おそすぎた。

左さ道どう鉗かん子しの口から瑞ルイ麗リーの末路を聞き出した濤タオ羅ローは、それきり事の次し第だいを問うことを止やめた。

後に残ったのは、冷たく結けつ晶しようした殺意のみ。

もはや理由など問題ではない。どんな訳があれ、ああも残酷な手段で妹の命を奪った豪ホー軍ジユンとその一派……断じて許すつもりはなかった。

「いい。もう奴やつの話はやめよう」

「へんなあにさま」

言葉を濁す濤タオ羅ローに、瑞ルイ麗リーはまるで子こ猫ねこをからかうような悪びれない笑顔で追い討うちをかける。

「ホオジユンとけんかしたの？ あんなに、なかよしだったのに」

「……」

昔から瑞ルイ麗リーは、その悪戯いたずら心を発揮して幾度となく兄を弄もてあそんできた。こんな風に、こそばゆい困こん惑わくへと追い込まれていく感覚こそ、記憶にあるがままの瑞ルイ麗リーとの会話ではないか。

小悪魔的な笑顔には嫣然えんぜんとしたものさえ感じさせる。まるで話の内容よりも、それに戸惑う濤タオ羅ローの様子を見て笑っているかのような……そう、この笑い方。まぎれもなく遠い日のままの瑞ルイ麗リーだ。

なら懐なつかしさに涙なみだぐんでもいい程ほどなのに。なのに——この、そこはかとな不安は何だろうか。

「……」

謎めいた瑞ルイ麗リーの態度に心惑まどわされるうちに、それまで意識すらしなかった疑問が、タオローの中に湧き上がる。

“……果たして俺が、瑞ルイ麗リーの何を知っているというのか？”

彼女を元に戻もどす……そう心に誓った。死を賭とするとも厭いとわれない、それが濤タオ羅ローにとって今生最後の執しゆう念なんだった。

だがその肝かん心じんの“元の瑞ルイ麗リー”について、果たして自分はどの程度のことを知っているのだろうか？

雅が楽がくを愛し、いささか兄想おもいが過ぎて甘えがちで、着き飾かざるときは白緞どん子す、それも旗チヤイナ袍ドレスより胡こ服ふくの着物が好きな……

だがその程度のことだ瑞ルイ麗リーのすべてなのかと問われれば、無論そんな筈はずはない。

そう、いつも瑞ルイ麗リーは謎なぞだった。ひょんなことから怒おこったり、笑ったり……その目まぐるしい変化を愛めでるばかりで、ただ振り回されていただけの濤タオ羅ローには、彼女の心の動きを先読みできたことなど一度としてありはなかった。

あらためて最悪の危き惧ぐが……かつて『左道鉗子』の診しん療りよう所じよで懐いだいたのと同じ、決して直視したくなかった疑念が再来する。

もし五体のガイノイドからすべての魂こん魄ぱくを回収しても、それで甦った瑞ルイ麗リーが元のままの彼女だと……そう確かめる術すべがあるのか？

「瑞ルイ麗リー、お前は……」

柔やわらかく滑なめらかな頬ほおに掌てのひらを這はわせながら、だが濤タオ羅ローはそこで言葉に詰まる。

“本当に孔コン瑞・ルイ麗リーなのか？”

“この俺の妹なのか？”

問えはしない。問えるはずもない。

それを疑ってしまったら、今日まで化け生しように身を糞やつて剣を執ってきた濤タオ羅ローの、磨すり減っていく生命と引き換えに戦い抜ぬいてきた意味の、そのすべてが瓦が解かいしてしまう。

「お前は……」

聞せめぎ合う心の軋あつ轢れきに耐えきれなくなった濤タオ羅ローを、そのとき、剣けん士しとしての感覚が救済した。

左手に掴つかんだ鞘さやの中から、刀身の冷気がじわじわと沁しみ出し、濤タオ羅ローの五体に浸しん透とうしていく。

刀気と同じ温度に冷えた意識の中で、感じ取る一幾いく重えにも束ねた殺意の気配。

廟びようの外に誰だれかいる。警報機の仕し掛かけは作動していない。が、だからといって鍛きたえ上げた武人の感覚に疑いの余地はない。

入り口の外で空気が動いた。何かサッカーボール大の球形のものが、歪いびつに跳はねながら廟内へと転がり込んでくる。投げ込んだ者の所作に殺気はなかった。取り敢あえず脅きよう威いの対象ではない。が……

足元まで転がってきたそれを、濤タオ羅ローは爪つま先さきで押さえて止める。見覚えのある男の双そう眸ぼうが、死相となって濤タオ羅ローを下から睨にらみ上げていた。

昨夜ともに上海義肢公司を襲おそった、ミハイル・スチュグレフ。今や生首と成り果てたそれは、むろん外にいる連中が刈かり取ってきたものだろう。永らく上海に根を張ったロシアン・マフィアの狗いぬも、ここにきて命運が尽つきたらしい。

「……」

こんなものを転がす代わりにガスかグレネードでも投げ込めば事足りようものを、あまつさえ外に居並ぶ殺気の群は、その存在を隠かくそうともしない。

彼らにとっては安易で着実な処しよ刑けいより、まずは廟内に立て籠こもる濤タオ羅ローを畏い怖ふせしめることこそ肝かん要ようなの

だろう。それだけの憎にくしみ、それだけの怒り……そうするだけの理由を持ち合わせた者たち。

「瑞ルイ麗リー、俺につかまれ」

兄の硬かたい語調に、遊びではないことを悟さとったのだろう。瑞ルイ麗リーは蕭しよう々しように従った。片膝をついて屈かがんだ濤タオ羅ローの首に両りよう腕うでを巻き付け、体重を預ける。

空いた右手に鞘込めの倭わ刀とうを携たずさえて、濤タオ羅ローは瑞ルイ麗リーを抱だいたまま、ゆっくりと廟の入り口から外に出た。

降りしきる酸性雨の帳とばりの中、殺意の群れは人型を取って佇たずんでいた。

見み渡わたした限りで二〇人はいようか。いずれも毒素の雨に躊躇ためらいもなく晒さらした総身には、そこかしこに鋼鉄の輝かがやきがある。

いずれ劣おとらぬサイバネ外家拳の使い手たち。当然ながら銃じゅう器きを手にした者はない。その手に携え持つのは朴ぼく刀とう、狼ろう牙が棒、鉄てつ扇せん、鶏けい爪そう鉞えつ……半生を賭けた研けん鑽さんの果てに、ついにはその得物の操作に特化させて我が身そのものまで改造した、身器一体の戦せん鬼きたち。

「……久しいな。『紫し電でん掌しよう』」

最初に口を開いたのは、雲をつく巨きよ軀くをレザーの長ちよう袍ほうに包んだ重サイボーグ……『怒ど濤とう戟げき刀とう』の黄ウオン景・チン東トンだった。異名の元となった総重量八〇kgの方天戟を、いとも軽々と肩かたに担かついでいる。

「『羅ら刹せつ太たい后こう』を屠ほふったという噂うわさの電磁発はつ動けい、ぜひ一つご指南賜たまわりたく、我ら推参した次し第だい」

勿もつ体たいをつけた黄ウオンの口上に、居並ぶ拳士たちが失しつ

笑しように漏もらす。これより始まる戦いが一方的な殺さつ戮りくに終わることは誰の目にも明らかだった。“ご指南”が聞いて呆あきれる。

さしもの濤タオ羅ローですら絶望せざるを得ない、それは壮そう々そうたる面子メンツの揃そろい踏ぶみだった。『四悪趣しゆ坊ぼう』古クー・鐘チヨン萍ピン、『烈れつ士し呉ご鉤こう』小シヤオ澤・ツウ如ルー、『鮫こう歯し童どう子じ』舒スー・宏ホン偉ウエイ……かつては濤タオ羅ローともども青チン雲ワン幫パンに名を連ねた俠きよう客かくたち。

いささか遅おそきに失したものの、ついに幫ほう会かいが直々に濤タオ羅ロー抹まつ殺さつに動いたらしい。

「……あにさま？」

身を押しつけた濤タオ羅ローの心しん拍ぱくと体温を感じ取り、その胸中を余さず読みとったのだろう。物問いたげに兄の顔を窺うかがう瑞ルイ麗リーの面おも持もちは神しん妙みようだった。

濤タオ羅ローは、彼自身にも意外なほど落ち着き払はらったまま微笑する。

「しっかり掴つかまってるんだ。何も……心配はいらない」

今ここを死に場所にするわけにはいかない。

まだ斌ピンと劉リユウが生きている。瑞ルイ麗リーの魂たましいはあと二つの断だん片ぺんを残している。ここで終わらせるわけにはいかない。これが悪夢であろうとも……

「絶対に離はなせずに……目を閉じたままにいる。そうすれば、すぐに済む」

そして何より、今この腕うでの中にまだ、護まもらねばならないものがある。

敵はいずれも達人揃い。しかも鏢つば競ぜり合ったところで何ら得るところはない。ここは逃にげの一手に尽きる。

決め手となる紫し電でん掌しようも、今度に限っては当てにはならない。氣きを込めた掌しよう打だを繰くり出そうにも、激しい体たい

捌さばきに及およんでは、左手は瑞ルイ麗リーの腰こしを抱き支えているだけで塞ふさがれる。右手は.....防ぼう御ぎよに徹てつするとなればなおのこと、倭刀を手放すわけにはいかない。

だがこの窮きゆう地ちにあってなお、濤タオ羅ローの心は軽かった。否いな、窮地なればこそ、と言うべきか。

倭刀の下げ緒おを口に銜くわえて、右手一本で鞘さやから抜ぬき払う。雨に晒された刀身から立ち上る剣気が、頬ほおに冷え冷えと心地こちよい。

ひとたび剣を手にとれば、つい先刻まで苛さいなまれていた葛かつ藤とうの、その記き憶おくさえ意中にない。

剣けん鬼きたれ。ただ瑞ルイ麗リーのためだけの剣鬼たれ。それで我が身は救われる。何もかもから解放される。

そう胸の内で高らかに唱うたいながら、濤タオ羅ローは首を振ふって鞘を傍かたわらに放ほうり捨てると、居並ぶ群ぐん狼ろうの包囲の中に、静かに一步を踏ふみ出した。

「黄ウオンたちが濤タオ羅ローとの交戦に入った模様です」

「.....そうか」

S V リムジンの後部座席で身をくつろがせながら、斌ビン偉・ワイ信ソンは運転手からの報告に頷うなずいた。

「その場に集まったのは何人だ？」

「『怒濤戟刀』、『鮫歯』の舒スーほか一八名。さらに元氏双そう俠きようと鍾しよう馗き団の面々も現在向かっています」

「うむ.....」

青チン雲ワン幫パンが擁ようするサイバネ拳けん法ぼう家のうち、一流どころと目される使い手はほぼ全員が出揃った。

劉リユウの支配体制に不満を懐く古参の幫ほん会かい員いんたちの中には、むしろ孔コンに与くみする感情を抱いだく者も少なくなかつ

たが、それも昨夜までの話である。

孔コンの手引きによる上海義肢公司の襲しゅう撃げき、加えてつい
に公開された李レイ寨さい主しゅ殺害の証しよう拠こ映像によって、
俠客たちの足並みは揃った。今や孔コン濤・タオ羅ローに同情を寄せ
る者は一人もいない。

最初からこうしていれば……それを思うたび、あの男によってもた
らされた損失の大きさが悔くやまれる。

正直なところ、あそこまでの真似まねを孔コンがしてのけるとは斌
ビンも予想しなかった。たかが凶きよう手しゅくずれの一匹びきと侮
あなどっていたのは否めない。

その結果がこれだった。上海義肢公司は再起不能。もはや青チン雲
ワン幫パンは裏サイバネティクス市場からの撤てつ退たいを余よ儀ぎ
なくされた。この機に乗じてロシアンマフィアはシェアを独どく占せ
んすることだろう。失地回復の望みはない。

孔コンへの怒いかりもさることながら、今日までその暗あん躍やく
を許してきた副寨主に対する不ふ審しんの声も、当然ながら上がって
いる。劉リユウにはもう、かつてのように人心を掌しよう握あくして
権けん威いを振るうことは望めまい。

このまま幫ほう会かいの中ちゅう枢すうに居座り、パワーゲームの
棋き士しであり続けようとするならば……もうこれ以上、劉リユウを
担かついでいても甲斐はいはない。いやむしろ、彼を副寨主の座から
追い立てるぐらいの腹づもりでいた方がいい。

李レイ寨主の死を公表し、外家拳士たちを動かしたのも、劉リユウ
の了りよう解かいを取り付けた上ではない。すべては斌ビンの独断
だ。

“これで充じゅう分ぶん、と、思いたいが……”

決め手とするには弱すぎる。今の孔コンは理り屈くつでは推おし量
はかれない。有り得ないと思えた死地でさえ、まんまと切り抜けての
ける男である。……もはや魔ま性しようの眷けん属ぞくと思ってか
かった方がいい。

“やはり次善の策がいる。確実に奴やつを葬ほうむるために……”

いま斌ピンが胸に秘ひめた策に、劉リユウは間ま違ちがいなく難色を示すだろう。だがそれを敢あえて押し通す。そうできて初めて、今日までの二人の力関係を覆くつがえす端たん緒しよが纏めるのだ。

武者震いに胸高鳴らす斌ピンを乗せて、リムジン是一路、劉リユウ豪・ホー軍ジユンの私し邸ていへと馳はせた。

腕に抱いた人形によって必殺の掌打を縛られた濤タオ羅ローは、右手の倭わ刀とう一本で渡わたり合うしか他ほかにない。

だが装そう甲こうされたボディは尋じん常じょうの斬ざん撃げきなど受け付けず、よしんば内ない勁けいを込めた一刀といえど、それが致ち命めい打になる保証もない。生身の人間と違って決まり切った弱点がなく、痛覚も持ち合わせないサイボーグが相手では、迂う闊かつに必殺を狙ねらったところで逆に痛つう恨こんのカウンターを返されかねない。

唯ゆいーいつ、明確な急所は脳。だが双そう方ほうがそれと心得ているだけに、頭部を狙った攻こう撃げきはいち早く見み抜ぬかれてしまう。

必定、攻せめあぐねて防戦一方に徹つする羽目になる。勝てる道理など有り得ない。

にも、拘わらず……その頃斌ピンが車中であって危き惧ぐしていた通り、まさに孔コン濤・タオ羅ローの奮ふん迅じんは魔性の域まで至っていた。

四方から打ちかかる敵の間を駆かけ抜けながら、その攻撃をことごとく躲かわし、欺あざむき、受け流し、数を嵩かさにかけて攻めかかる外家拳士たちを旋風つむじかぜの如ごとき体たい捌さばきで翻ほん弄ろうし続ける。

逃にげに徹するのみならず、隙すきあらば倭刀の斬撃はサイボーグ

たちの頭ず蓋がいを襲おそう。むざむざ斬きられる彼らではないが、上段のガードを誘さそったその一刀は、一転して足元を狙う周しゅう到とうな騙だまし討うちへと変化する。

一人、また一人と脚きやく部ぶを斬り落とされる者が続出し、戦場が刻一刻と位置を変えるうちに包囲の輪が綻ほころびていく。

だがそれでも、形勢は変わらない。遅れて駆けつけた幫ほう会かいの拳士たちが続々と追いすがり、脱だつ落らく者しやに取って代わっていく。

雨の中、いつ果てるとも知れぬ死し闘とうを続ける濤タオ羅ローの形相は、まさに修しゆ羅らのそれだった。浅く掠かすめ過ぎる刃やいばや棘とげに幾いく多たとも知れぬ傷を負い、その背に降り飛沫しぶく雨を薄うす紅べに色いろに染めながら、なお竜たつ巻まきの如き腿たい力りよくも、振ふりかざす刃じん速そくも衰おとろえない。

そんな光景を、劉リユウは自室でくつろぎながらスクリーン越しに眺ながめていた。

「見えるか？ 瑞ルイ麗リー。お前の兄の戦いぶりが」

「……」

その画像の意味するところを解しているのか否か、劉リユウの膝ひざの上のガイノイドは、ただ漫まん然ぜんと気け怠だるげな眼まな差ざしをスクリーンに注いでいる。

画像は戦場を遥はるか七〇〇メートルの彼方かなたから見守る偵てい察さつドローンから送られてくる。死闘を演じる誰だれ一人として、その覗のぞき見に気付く者はない。

『このままでは、孔コン濤・タオ羅ローは包囲を突とつ破ぱしてしまいますが』

「その様子だな」

ドローンの操作要員が無線でよこす報告に、劉リユウは鷹おう揚よ

うに相あい槌づちを打つ。

『.....宜よろしいのですか？ 我々から掩えん護ごもできますが』

「それには及およばん。濤タオ羅ローが離り脱だつし次し第だい、帰投しろ。誰だれにも気付かれんようにな」

すげない指令を下して無線を切ると、再び劉リユウは人形の肩かたを抱だき寄せ、その耳元に囁ささやきかける。

「しっかりと目に焼き付けておけ。あの奮闘も、すべてお前一人を求めてのことだ」

「.....」

「今はまだ遠い画えだけしかないが.....いずれはすぐ間近から見せてやれる。そのときは、奴やつの叫さけびを聞いてやれ。涙なみだの味を舐なめてやれ。

奴の流す血の一滴一滴までが.....瑞ルイ麗リー、すべてお前のものなんだ」

『四悪趣しゆ坊ぼう』が振り下ろす狼ろう牙が棒の下をかいぐり懷ふところへと飛び込んだところで、濤タオ羅ローは一いつ刹せつ那なだけ、首に廻された瑞ルイ麗リーの腕うでに注意を向ける。

細い腕は彼の首を固く搔かき抱いだいたまま緩ゆるんでいない。今このタイミングでならば振り落としてしまう気き遣づかいはない。

そう確信するや否いなや、濤タオ羅ローは彼女の体重を支えていた左腕を解き、乾けん坤こん一いつ擲てきの氣を乗せて紫し電でん掌しようの一撃を放っていた。

「グワガァァッ!!」

予期しなかった致命打に総身を強こわ張ばらせ、足元を流れる汚お水すいの中へと飛沫しぶきを上げて倒たおれ込む四悪趣坊。濤タオ羅ローは再び瑞ルイ麗リーの腰こしを抱きとめるや、即そく座ざに倭わ刀とうを構え直して次なる相手に備え.....そこでようやく静せい寂じ

やくに気付く。

落らく雷らい直前の帯電のように、辺り一面に張り詰めていた殺気が、今はない。

倭刀を握にぎったまま右手の裾すそで、額から目に流れ込む血を拭ぬぐい取る。いざ普ふ段だんの視界を取り戻もどしてみると、さっきまでの暗く狭きよう窄さくな視野が噓うそのようだった。

豪雨によって嵩かさを増し、流れの速まった水路の底に、濤タオ羅ローは膝まで汚水に浸つかりながら立っていた。立ち回りに没ぼつ頭とうするあまり、どこをどう辿たどってこんな場所にまで到いたったのか、今となっては書き憶おくが判然とししない。時間の経けい緯いさえ見失うほどに、戦いは長く熾し烈れつを極きわめた。

ともあれ、今倒した敵を最後に、追撃者たちの姿は見当たらない。

“撒まいた……のか？”

数十人もの戦闘サイボーグを相手取り、その包囲から脱だつしたとは……まさに奇き跡せきに等しい僥ぎよう倖こうだった。

だが予断は許されない。すべての追っ手を斬り伏ふせながら逃げ延びてきたわけではない。大半は乱戦の最中さなかで濤タオ羅ローを見失ったというだけのことだ。

ぐずぐずしていれば、すぐにまた捕ほ捉そくされるだろう。今のうちに安全圏けんまで逃げ延びるしかない。

一歩踏ふみ出そうとしたところで……突とつ如じよ、肺はい腑ふを内から引き裂さくような激痛に見み舞まわれ、濤タオ羅ローはつんのめるようにして蹲うずくまる。

“く……”

かつてない程ほどの内傷の疼うずき……連日にわたって駆く使ししてきた電磁発はつ勁けいのダメージが、ついに濤タオ羅ローの命を脅おびやかすまでに累るい積せきしたらしい。

早すぎる……そう濤タオ羅ローは胸の内で歯は嚙がみする。

“あと二人……劉リユウと斌ビン……奴らを斬きらねば、死んでも死にきれん……”

水路の側そく壁へきに背中を預けて、膝の笑い出した両りよう脚あしを辛かろうじて支えながら、濤タオ羅ローは氣息を整えて内傷の痛みを封ふうじ込めようとする。

「くるしいの？ あにさま」

左腕に抱いた瑞ルイ麗リーが、か細い声で問うてくる。

「いや.....大だい丈じよう夫ぶ.....」

その不安げな声に己おのれの義務を思い出し、濤タオ羅ローは空元氣を振ふり絞しぼって氣丈を装よそおった。

「大丈夫だ.....もう少しで.....休きゆう憩けいできるから.....」

「くるしいのね、とっても」

憔悴にそげ落ちた濤タオ羅ローの頬ほおに、すべらかで柔やわらかい感かん触しよくが押しつけられる。瑞ルイ麗リーの頬だった。

「がまんしないで。いたいのも、くるしいのも、みんなルイリにちょうだい」

ぴったりと頬を寄せたまま、瑞ルイ麗リーは兄の耳元に囁ささやきかける。

「こうやって、すいにとってあげる。だからあにさま、ないていいよ。こわがっていいよ。ルイリがいっしょだから」

「瑞ルイ麗リー.....」

事情をまるで弁わきまえていない彼女だが、それでもその健けな氣げな言葉の真しん摯しさだけは本物だった。

“死んで.....たまるか.....”

苦痛とは異なる熱いものが、濤タオ羅ローの胸に込み上げる。

“俺はもう、独りじゃない.....もう決して瑞ルイ麗リーを独りにはしない.....生きて.....帰るんだ。二人で.....”

間近に迫せまった死期を前にして、あまりにも虚むなしい誓ちかい。だがそうでもしなければ、濤タオ羅ローは膝ひざを支えていられなかった。もうただの一步も踏み出せそうになかった。

水の流れに逆らって水路を溯さかのぼり、ようやく堤つつみの上にあがるタラップに辿り着く。倭刀の峰みねを口に咥くわえ、空いた右

手で一段目に掴つかまったところで、はたと濤タオ羅ローは動きを止めた。

「……あにさま？」

緊張を察した瑞ルイ麗リーもまた、わずかに声を固くする。

再び倭刀の柄つかを右手に掴み直して、濤タオ羅ローは肩かた越ごしに背後を窺うかがった。殺気の主は、後方頭上……水路対岸の堤の上に二つ並んだ、鏡写しのように類るい似じした立ち姿。

「往往生生際際がが悪悪いいぞぞ、紫電掌紫電掌」

二人同時に発する声が、まるで伽が藍らんに反はん響きようするように重なって耳に届く。

「我我ら元元兄弟弟にに背背中中をを見見せせなながらら、なおお生生ききてて逃逃れれるる所所存存かか？」

両者とも寸分たがわぬ仕様の重装サイボーグ。ともに両手に一いつ対ついの武器を携たずさえ、ただその得物だけが相そう違いする。

護ご手しゅ鉤こうを繰るのが兄の元ユン家・カー英イン、浮ふ萍へい拐かいを使うのが弟の元ユン尚・ソー英イン。濤タオ羅ローからしてみれば、今この場では誰だれよりも遭あいたくなかった二人であった。

「……先に行くんだ。瑞ルイ麗リー」

双そう俠きよの姿を油断なく視野の隅すみに捉とらえつつ、濤タオ羅ローは左手に抱えていた瑞ルイ麗リーをタラップに掴まらせる。

「ルイリ、あにさまといっしょにいたい……」

「駄だ目めだ」

今度ばかりは濤タオ羅ローも、妹に甘い顔を見せる余よ裕ゆうはなかった。あの双ふた子供の恐おそろしさは充じゆう分ぶん心得ている。瑞ルイ麗リーを庇かばいながら戦える相手ではない。

「この梯子はしごを登った先で待ってるんだ。俺もすぐに行くから」

「……」

切なく視線で訴えかける瑞ルイ麗リーだったが、兄の横顔から切せつ迫ぱくした気配を感じ取ったのか、最後には悄しよう然ぜんと頷う

なずいた。

「あにさま、これ……」

瑞ルイ麗リーはタラップに掴まりながら、帯に挟んでいた金属棒を引き抜いて濤タオ羅ローに手て渡わたす。呉ウー淞スン口の海岸で拾った廃はい品ひんのチューブ。彼女が雅楽遊びに使う桴ばちだった。

「おまもりなの。もってて」

「……わかった。ありがとう」

せめて彼女を安心させようと濤タオ羅ローは笑え顔がおを装って、受け取った金属チューブを腰こしの後ろのベルトに挟はさむ。

「さあ、早く行け」

「……うん」

植えられたタラップ間の距きよ離りは成人向けで、瑞ルイ麗リーの小さな背せ丈だけでは身体からだを精せいーいつ杯ぱいに伸のばさなければ次の段を掴めない。

それでもようよう上へと登っていく瑞ルイ麗リーを見届けてから、濤タオ羅ローは身体ごと対岸へと向き直った。

そんな濤タオ羅ローに応じるように、元氏双俠もまた軽い身ごなしで水路の中へと身を躍おどらせる。

汚お水すいの急流の中へと着地する二人だが、着水の水みず飛沫しぶきはごく僅わずかで慎つつましい。ただこれだけの動作でも卓たく越えつした体術の功が窺い知れる。

「貴様が本当の意味で、マカオから生きて帰ってくれたなら……我ら、心から喝かつ采さいできたのだがな」

上海義肢公司ビルでの惨さん劇げきを目まの当たりにして、すべての迷いを断ち切った元ユン尚・ソー英インの声こわ音ねは、抑よく揚ようもなく冷ややかだった。

「我らの知る孔コン濤・タオ羅ローは、やはり異境にて果てたらしい。貴様は、ただの抜ぬけ殻がらだ」

「……」

黙然と押し黙る濤タオ羅ローに向けて、さらに兄の元ユン家・カー英インが続ける。

「副寨さい主しゆやその一派との間に、どういう確かく執しつがあったのかは知らぬ。だが、いかな由ゆ縁えんがあったにせよ……幫パンへの忠義まで見失う理由があるのか」

「……フン」

濤タオ羅ローは鼻で嗤わらった。

忠義。こうして外道に墮おちた身で聞けば、なんと虚むなしい言葉だろうか。

瑞ルイ麗リーこそが全すべてだった。彼女だけが全てを癒いやしてくれた。その重さを、尊さを悟さとったのは、すべて失った後だった。

義ぎ俠きようが何だ。忠孝が何だ。そんなものに意味があったなら、なぜ瑞ルイ麗リーはあんな目にあった？

「揃そろいも揃って能書きばかりが達者だな。外家のお歴々は」

邪よこしまに口元を笑み歪ゆがめながら、濤タオ羅ローはかつての朋ほう友ゆうたちを憎にく々にくしく挑ちよう発はつする。

「つくづく、くだらん。そんなお題目に顕けん現げんがあるというのなら、ぜひともご教授願おうじゃないか」

「貴様は貴様は……」

怒ど気きに殺意を滲にじませて、双俠は身構えつつにじり寄る。

「義と忠孝は俠者の魂たましい。その魂を失った貴様は、もはや生ける亡もう者じやも同然」

低く嘯うそぶきながら、護ご手しゆ鉤こうの家カー英インは右へ。

「亡者は在るべき所へ還かえれ。いざ、我らが天てん誅ちゆうの前に倒たおれ伏ふすべし」

冷たく断じながら、浮ふ萍へい拐かいの尚ソー英インは左へ。

「……」

水上を滑すべるかのような二人の足運びを見み据すえながら、濤タオ羅ローは右へと流れた家カー英インよりもさらに右へと移動する。

三者は互たがいに渦うずを描えがくようにして、足元の汚水を踏ふみ散らしつつ動き始めた。

回り込み、回り込まれ、つねに三者のいずれか一人を焦しよう点てんに、残る二人が渦を描いて左右に馳はせる。堤つつみの上から見下ろせば、それは奇奇怪かいな組円えん舞ぶと見たかかもしれない。

“決して挟み込まれぬよう、つねに両者を同時に視界に収めるべし……”

濤タオ羅ローは彼らの戦術を知っていた。双そう挟きようとの戦いは、つねに間合いの読み合いである。一方が迫せまればそれは嘘きよ。むしろ残るもう一方を意識して、側面へ回り込まれるのを避さねばならない。

元氏双俠一

かつてこの兄弟は母ば胎たいにいる間に環かん境きよう汚お染せんの影えい響きようを受け、半身の繋つながった身体で産まれ落ちたという。内臓の大半を共有せざるを得ず、寿じゆ命みようを悲観されていた兄弟だったが、そんな幼い二人を救ったのは、当時ようやく普及きゆうの兆きざしを見せはじめたサイバネティクス技術であった。

生まれながらにして半身の機械化を運命づけられ、ともにサイバネ外家拳けん士しとしての人生を選んだ元兄弟。そんな彼らがその生しよう涯がいをついて会え得とくした外家の功とは、一糸乱れぬ絶ぜつ妙みようのコンビネーション殺法だったのである。

“もし挟きよう撃げきを許せば、即すなわちこちらの命運は尽つくる”

極度の緊きん張ちようを強しいられたままの、一いつ触しよく即そく発はつの死のステップ。ただ立っているだけでも目が眩くらむ有様の濤タオ羅ローにとっては、一步毎ごとに気力が足から漏もれ出ていくかのようだ。

“持久戦に勝機はない……”

そう断を下した濤タオ羅ローは、誘さそいかけるように寄ってきた相手から退くと見せかけて足を踏み換かえ、迅じん疾しつの剣けん刺

しを突つき入れた。

対するは兄の護ご手しゆ鉤こう使い、元ユン家・カー英イン。ぬかりなく右手の得物の湾わん曲きよくした鉤かぎ部分で倭わ刀とうの切っ先を掬すくいつつ、左の護手鉤の月げつ牙が部分で斬きり込んでくる。

攻防一体を旨むねとする護手鉤は、握にぎった拳面を覆おおうように配された月牙と拳輪側の棘とげで攻せめかかるかたわら、拳眼側に大きく突き出た鉤で相手の得物を搦からめ取り破は壊かいする機能も持つ。それを左右一いつ対ついで繰くれば効果は倍増だ。硬かたく細身の倭刀で立ち会うには、甚はなはだ与くみにくい相手である。

濤タオ羅ローは左右の鉤に倭刀を奪うばわれないよう機き敏びんに刀身を翻ひるがえしつつ、それでも間断なく攻めかかる。さらに眼法では打ち合う家カー英インのみならず、その向こうに控える弟・尚ソー英インも捉とらえて逃にがさない。兄と剣戟を散らす濤タオ羅ローの側面に、すかさず回り込もうとする尚ソー英インからは、常に反対側へと身を滑らせて逃のがれ続ける。

立て続けの刺突を浴びせて家カー英インを足止めしながら、その体軀を遮蔽物にして尚ソー英インから身を隠かくす……流水の中の円舞は、家カー英インを中心に濤タオ羅ローと尚ソー英インが巡めぐり廻めぐる形となった。

濤タオ羅ローが引いた倭刀の剣けん先さきを、なお捉えようと連続して鉤を振った家カー英インが、ともに空振って護手鉤を左右に開く。

絶好の反はん撃げきのチャンス。ここぞとばかり濤タオ羅ローは戴たい天てん流『貫かん光こう迅じん雷らい』の一ひと突つきで勝負をかける。

だがそれは誘いだった。まんまと濤タオ羅ローを釣った家カー英インは背転跳ちよう躍やくで大きく後ろへと身を翻し、入れ違ちがいにその下を潜もぐり込むようにして、背後に控えていた尚ソー英インが水面すれすれに身を屈かがめながらの旋風脚で濤タオ羅ローの膝ひざ

に襲おそいかかる。

慌てて飛び退のく濤タオ羅ローに、尚ソー英インは旋せん転てんの勢いを殺さず、そのまま独楽こまのように回りながら浮萍拐の連続攻こう撃げきを仕し掛かけてくる。苛か烈れつな勢いに押され、今度は濤タオ羅ローが防戦一方に立たされる形となった。

“拙まずい、これは……!!”

慄りつ然ぜんとなった時にはもう遅おそい。尚ソー英インと入れ違いに濤タオ羅ローの刃じん圈けんから逃れた家カー英インは、易やす々やすと濤タオ羅ローの背後に回り込んでいた。

進退、ここに窮きわまる。

拐かいの連打に撲ぼく殺さつされるか、或あるいは護ご手しゆ鉤こうの月牙で鱸なますに刻まれるか。いずれにせよ二人の間に挟はさまれた獲え物ものを待ち受けるのは、逃れようのない死あるのみ。これぞ兄弟の連れん携けいがその神しん髓ずいを見せる必殺奥おう義ぎ『阿あ吽うん覆ふく滅めつ陣じん』……左右から一いつ斉せいに襲いかかる双鉤、双そう拐かいの同時連続攻撃である。四つの凶きよう器きから繰り出される怒ど濤とうの連撃は、ただの一刀で凌しのぎされるものではない。

死線に晒された濤タオ羅ローが、そのとき咄嗟に手を伸ばしたのは一瑞ルイ麗リーから渡わたされていた“お守り”の桴ばち。彼女が肌はだ身み離はなさず持ち歩いていた金属チューブだった。

ベルトから引き抜いたそれを鉄鞭代わりに尚ソー英インの浮ふ萍へい拐かいを防ぎ、右手の倭刀では家カー英インの鉤に応じる。俄にわか仕立ての二刀流で、濤タオ羅ローは双俠の覆ふく滅めつ陣じんを迎むかえ撃った。

「見事なり、紫し電でん掌しよう」

切れ目ない剣けん戟げき音の向こうから、双俠の擲や掬ゆする声が届く。

「だがその奮ふん迅じん、いつまで保もつかな……」

右の倭刀は.....無む銘めいとはいえそれなりの業わざ物もの。濤タオ羅ローの手練でだれにも積み重ねてきた功がある。だが左は馴な染じみの薄うすい硬こう鞭べん術、それも特に鍛たん造ぞうされたわけでもない廃はい物ぶつのチューブが得物とあっては、達人の技わざと渡り合うには荷が勝ちすぎる。

ただでさえ刀とう剣けんとは間合いの勝手が違ちがうというのに、そのうえ鉄製の管には次し第だいに罅ひびが走り、破壊の兆きざしを見せている。必定、濤タオ羅ローは鉤の家カー英インの攻めをせき止めながらも、拐の尚ソー英インにはじわじわと肉にく薄はくされつつあった。

“凌ぎきれるか.....”

息が上がりはじめた濤タオ羅ローは、一か八か、攻めかかる尚ソー英インの眼前でコート裾すそを振り払はらう。突如目の前で翻った布地に尚ソー英インが怯ひるんだ隙すきをついて、起死回生の足技『臥が龍りよう尾び』。

踵かかとは相手の顔面を捉えたが、踏ふみ込みの浅い足技は勁けい力りよくが足りず充じゆう分ぶんな威い力りよくに至らない。だがそれでも不意打ちの一撃は尚ソー英インの動きを遮さえぎり、覆滅陣の連れん環かんに綻ほころびを作った。

ここぞとばかり濤タオ羅ローは汚お水すいの中に身を転がして、すかさず双そう俠きようの狭はざ間まから逃れ出る。

仕切り直すにも、まずは距きよ離り.....再び包囲されないだけの間合いを稼かせぐのが先決だった。濤タオ羅ローは軽功の脚あし捌さばきで迷わずバックステップに移る。

縦列のまま突とつ進しんして追いすがる双俠。もろともに一方向へ馳はせるばかりなら左右の挟きよう撃げきには持ち込めまい。

.....そう安堵しかかった濤タオ羅ローの予断を、双俠はまたも連携の体技で裏切った。

後続の尚ソー英インが大きく地を蹴けって、先行して駆ける家カー英インの肩かたへと飛び乗り、そこを足場にさらに高々と宙に身を躍

おどらせる。―退さがる濤タオ羅ローの頭上を飛び越えて。

挟撃は、なにも左右から仕掛けるばかりではない。

“.....!!”

濤タオ羅ローは次手に詰つまった。今さら左右に逃のがれようにも下か肢しの運びが間に合わない。

退けばそこは尚ソー英インの落下点。正面と頭上からの同時攻撃に晒さらされる。かといって動かず家カー英インを迎え撃てば、背後に着地した尚ソー英インによって再び挟み込まれる形になる。

対処の術を即断したのは濤タオ羅ローの意識でなく、右の一刀と左の鉄鞭..... “一刀如によ意い” の境地に至った手中の得物そのものだった。

まずは斜め後方頭上の尚ソー英イン。先に見て取った跳ちよう躍やくの勢いだけで落下軌き道どうを読みとりながら、そこを目掛けて左手の金属チューブを擲なげうつ。さらに、そのまま半身になりながら右手一本で倭刀とうの刀身を水平に寝ねかせ、打ちかかる家カー英インの双鉤を同時に受け止める。

凝ギッと背筋を逆さか撫なでるような騒そう音おんを響ひびかせて、倭刀と噛かみ合う二本の鉤こう。だが濤タオ羅ローが耳を向けるのは、後方.....飛来したチューブを打ち払う尚ソー英インの拐の音。

“かかった.....”

敵の得物を捉えた家カー英インの鉤は、その本来の用よう途とのままに、倭刀の薄い刀身を砕くだき折るべく勁力を注ぎ込まれ.....だがそこで、逆に倭刀に曳ひかれる形で突進方向へと吊つり上げられた。

「む!?」

濤タオ羅ローは敢あえて下肢を崩くずし、突進してきた家カー英インの上体を真上へと逃にがしたのである。仰向けのまま水中に倒れた濤タオ羅ローは、倭刀の柄つかを放すや否いなや、つんのめる姿勢で大きく泳いだ家カー英インの胸むな板いたを腿たい力りよくの限りに蹴り上げる。

まんまと巴ともえ投げの要領で投げ飛ばされた家カー英インの先に

は、今まさに着水寸前の尚ソー英インの身体からだがあった。既にフェイントで投げられた金属チューブに応じてしまった尚ソー英インには、咄とつ嗟さに対応しようにも間に合わない。

空中で衝しよう突とつした双俠は、もつれ合うようにして水面に落下し派手な水みず飛沫しぶきを上げた。

「おおおッ!!」

間髪入れず跳ね起きた濤タオ羅ローは、鬼き面めんの相で雄お叫たけびを上げながら、家カー英インと尚ソー英インが起きあがるのに先んじて躍りかかる。今や左右ともに空となった諸もろ手てはともに掌打……もはや气息の限りを託して放つ双撃紫し電でん掌しようの構え。

二本の護手鉤を引っかけたまま宙高く飛んでいた倭刀が、猛もうスピードで旋せん回かいしながら落下して水面を貫つらぬき、底のヘドロに突つき刺ささる。

絡からみ合った三つの刃は物ものが錆しよう然ぜんとさんざめき……そして死し闘とうは幕を閉じた。

屍し肉にくと鉄てつ屑くずと相半ばの軀からだが二つ、逆巻く流れに運び去られながら沈しずんでいく。独り生き残った濤タオ羅ローには、だが友を手にかけた感傷に浸ひたる余よ裕ゆうもなかった。頹くずおれかかる膝ひざを震ふるわせながら、ただ气息の導引だけに意識を向ける。

いま气息を乱したら、終わりだ。衰すい弱じやくの極きわみにあった身体に鞭むち打って、なおも電磁発勁の大技を駆く使ししたのである。ほんの僅わずかでも気を緩ゆるめたら、たちどころに肺はい腑ふの血管が裂さけ破れよう。

“まだだ……まだ……”

薄はく氷ひようを踏ふむように慎しん重ちように、内傷を癒いやす径絡の順路へ气息を巡めぐらせつつ、濤タオ羅ローは家カー英インの護ご手しゆ鉤こうを払はらい落として倭刀を引き抜ぬき、ゆっくりと流れを渡わたって側そく壁へきに辿たどり着く。

タラップにかけた手は、己おのれの体重さえ支えられるか危あやういほどに震えていた。だがこの梯子はしごを登り切れれば、そこに瑞ルイ麗リーが待っている。早く顔を見たい。無事な姿を見せてやりたい。

指が痺しびれる。目が霞かすむ。タラップを登る四肢に力が入らない。あと何段登れば堤つつみの上なのか、それさえも解わからない。

次の一段で、きっと着く。また瑞ルイ麗リーと再会できる。そう祈いのりつつ、己に言い聞かせつつ、無限に思える反復運動を繰り返す。

あの子をちゃんと安心させたら、ほんの少しだけ一いつ緒しよに休もう。次の、その次の死闘の前に。

“俺は……死なない、”

“瑞ルイ麗リーが俺を支えてくれる。復ふく讐しゆうの誓ちかいはまだ胸にある。まだ……”

降りかかる雨の勢いが、ずっしりと背中にのしかかる。その重さに耐たえて、酸性雨に蝕むしばまれ変色したコンクリートの表面を見つめながら……気がつけば濤タオ羅ローは堤の上で四つん這ばいになり、荒あらい息を吐はいていた。

登とう攀はんは、すでに終わったのだ。

「あにさま？」

呼ばわる声に顔を上げれば、瑞ルイ麗リーはすぐ目の前に。万ばん感かん極まった濤タオ羅ローの意識が、つい導引のリズムから逸それる。

その途と端たん、喉のどから夥おびただしい吐と血けつがほとばしった。

壊え死しした肺はい胞ほうの組織もろとも吐き出された鮮せん血けつが、コンクリートの上で毒々しい飛沫の花弁をまき散らす。昏こん倒とうしかかるのを必死に堪こらえ、濤タオ羅ローは絶え間ない喀かつ血けつをひたすらに耐え抜いた。

このまま意識を失えば、もう二度と目覚めることはない……それは

本能的に察しがついた。

自分自身の血に溺おぼれ嘔むせ返り、息を吸うことさえ叶かなわ無い。そんな、いつ終わるとも知れぬ責め苦が続く。

ようやく、わずかながらも浅い吸気を取り戻した頃には.....濤タオ羅ローは堤の上に仰ぎよう臥がしたきり、起きあがる気力さえ失うせていた。

手足が重い。感覚が遠い。まるで我が身のものとは思えない。

それでも、まだ生きてはいる。取り敢あえず今回のところは、死神の誘さそいを退けたらしい。

頭を押しつける硬かたいコンクリートの感かん触しよくが、ふいにふわりと離はなれた。

瑞ルイ麗リーだ。細い腕で難儀しながらも濤タオ羅ローの頭を抱かかえ上げ、間近に顔を寄せている。健けな気げな腕わん力りよくでの抱ほう擁ようはいかにも危うく弱々しいが、それでも濤タオ羅ローは雲の上に乗ったような安らぎを覚えていた。

「いたいね。あにさま、くるしいよね。でももう、だいじょうぶだからね.....」

「瑞ルイ麗リー.....」

少しでも多くの酸素を求めて薄うすく開いた口に、柔やわらかく芳かんばしい感触が押しつけられる。

瑞ルイ麗リーの唇くちびる。その優やさしい感触に陶然としかかって.....えもいわれぬ違和感が濤タオ羅ローの意識を急激に醒さめさせた。折しもそんな彼の歯の隙すき間まから、やおら蠢こ惑わく的に蠢うごめく小さな舌が滑すべり込み、口こう腔こうをゆるりと一いち巡じゅんしていく。

身み悶もだえして抵てい抗こうしようにも、今の彼には瑞ルイ麗リーの腕うでを振りほどく力さえ残っていない。

「あにさまの、あじがする」

艶然と笑う瑞ルイ麗リーの唇も、その奥でちらりと覗のぞく舌先も、濤タオ羅ローの血の色に染まり濡ぬれ光っていた。まるで色いろ

鮮あざやかな口紅を差したかのように。

「瑞ルイ麗リー、何を……」

「おもいだしたの。いろんなこと。—ルイリはもう、しってるの。ど
ういうことすると、らくになれるか」

解らない。こんな笑い方をする瑞ルイ麗リーは知らない。濤タオ羅
ローの知る妹は……こんな顔で笑ったりしない。

慈いつくしむように濤タオ羅ローの顔を覗き込みながら、瑞ルイ麗
リーは下か肢しだけで腰こしの上によじ登り、馬乗りの姿勢になる。

「ルイリはね、いろんなひとのオモチャだったの。みんな、いつもお
こってたり、こわがってたり……でもそのひとたちは、ルイリのこと、
いじめたり、こわしたりして、そうするのがきもちよくて、しあ
わせになれたの。すこしだけ」

「……おまえ……」

“思い出した”と、彼女は言った。そう……有り得ない話ではない。
樟ジャンの処ところにあったのも、朱チユウの処にいたのも、ここにい
る瑞ルイ麗リーなのだから。

「だから、あにさまもルイリをたべればいいの。そしたらきもちよく
て、らくになるの」

シャツの裾すそから忍しのび込んだ指先と掌てのひらが、妖あやし
く濤タオ羅ローの腹を胸むな板いたを這い上る。そんな風に触さわる
ことによって牡おすの身体からだからどんな反応が返るのか、委細承
知しているかのように。

蕭しよう……と、彼女の腕輪の鈴すずが鳴る。甘く妖しく囁ささや
くように。

「……やめ、ろ……」

そんなことは求めていない。決して許されはしない。

“俺は……お前をそんな目に遭あわせた奴やつらが許せなくて、俺
は……”

「だってね、だってね、ルイリはいつもいろんなひとにたべられなが
ら、あにさまのこと、おもってたんだよ。

あにさまも、こんなふうにはたててくれたなら、しあわせにしてあげられたのかなって」

妹の指先に胸板を弄さられる、おぞましいほどに過か敏びんな感触。囁きかける瑞ルイ麗リーの、もう一方の手は下へ……濤タオローのベルトのバックルへと伸のびる。

「だからね？ あにさま」

「……ッ！」

右腕は……動ける。言うことを聞く。

そう気付くや否いなや、濤タオローは覆おい被かぶさる瑞ルイ麗リーの頂うなじに手を回し、盆ぼんの窪くぼにある感圧スイッチを強く押し込んでいた。

拍ひよう子し抜ぬけするほど呆あつ気けなく、瑞ルイ麗リーはくたりと脱だつかりよくしたきり動かなくなった。

「……あ……」

張りの失せた関節がぐらりと傾かしぎ、彼女の矮わい軀くはまるで壊こわれた玩具おもちゃのように無造作に、仰臥する濤タオローの上から転げ落ちる。見開かれた瞳ひとみからは、さっきまでの輝かがやきが嘘うそのように消え失せ、今はガラス玉のように虚うつろな光こう沢たくが残るだけ。

いざ動力が切れてしまえば、彼女はあくまで人形だった。懐なつかしい笑え顔がおを見せて、懐かしい口調で語らうというだけの、生命なきからくり細工。

もう一度スイッチを押せば、彼女はすみやかに再起動するだろう。幾いく分ぶんも損そこなわれることなく、その有機メモリの内容物がまた再生される。それは生前の瑞ルイ麗リーの、まぎれもない魂たましいの一部の筈はず……

“……そうなのか？、”

再び人形の項に指先を置き、あと数ミリ指を押し込むだけのところで、濤タオローは動けなくなる。

濤タオローはこの子に、身も心も差し出すと誓ちかった。たとえ

書き憶おくが欠けていても、言葉遣づかいが危あやうくても、それでも濤タオ羅ローは確信していた。共に育った兄妹きようだいだからこそ解わかる本質的な部分で、彼女はまぎれもなく妹の瑞ルイ麗リーだった。それを疑わせる兆きざしなど何一つなかった。

だが、さっきのあれは何だったのか？

あんなにも妖しく濤タオ羅ローを誘ゆう惑わくし、堕おとそうとした少女。あんな媚び態たいは、断じて瑞ルイ麗リーのものではない。濤タオ羅ローの知る妹は、もっと優しく貞てい淑しゆくで、穢けがれを知らない乙女おとめだった筈だ。

いったい何処どこで……何がどう間ま違ちがったのか？

この人形に宿っているのは、本当に瑞ルイ麗リーなのか？ それとも彼女のふりをしている何か別のものなのか？

そうだ。魂が不ふ滅めつだなどと――一体どこの誰だれが保証してくれたのか？

思えばあの左さ道どう鉗かん子しでさえ、最後まで言明はしなかった。

『判わからんよ。言っただろう？ 実験だと。結論はこれから出る』

そう……あの男はただ単に、結果に対して無責任な予測を示したに過ぎない。

雨よりなお冷たい認にん識しきが、音もなく濤タオ羅ローの脳のう裏りに染しみ渡わたっていく。

自分は今日の今日まで、ひどく虚むなしい奇き跡せきを信じ続けてきただけではないのか？

たとえば屠と殺さつされ、目方を量って切り分けられた牛の肉を、ふたたび一頭分かき集めたとする。それで牛が生き返るかといえは……もちろん否いな、だ。それはただの屍し肉にくの山でしかない。

たしかに量子化された情報は、時とともに腐くされたり欠損したりするものではない。回収したそれは情報量としての帳ちよう尻じりは合うだろう。

だが魂とは、もっと神聖で未知なるものではないのか？ ただのコードの羅ら列れつと同次元に扱あつかえるものなのか？

ルイリーの魂は、生まれ持った肉体から無理矢理に引き剥はがされて量子化され、分断されたまま一年ものあいだ放置されてきた。

その過程で何の変質もなかったとなぜ言えようか？ 今になって無事に繋つながって再生するなどと、何を根こん抛きよにそんな望みを懐いただけなのか？

今日までの戦いが、まさか何の意味も持ち合わせない徒労だとしたら.....

「違う.....」

とめどなく脳裏を過よぎっては去る絶望を、濤タオ羅ローは声の限りに否定する。

「違う！ 断じて違うッ!!」

彼女は濤タオ羅ローの名を呼んでくれた。笑顔を投げかけ、途と切れ途切れの思い出を語ってくれた。

いま縋すがれるのはその記憶だけ。ほんの刹那だけ味わった、慰なぐさめの感かん触しよくだけ。

「瑞ルイ麗リー.....」

力なく呻うめきながら、濤タオ羅ローは人形の無反応な頬ほおを掌てのひらで包み込む。

彼女はさらに変わっていく。残る二体のガイノイドから魂こん魄ぱくを回収していけば.....その都度、瑞ルイ麗リーは新たな側面を取り戻もどし、身につけていくことだろう。それはかつて、彼女の一部分であった筈のものなのだから。

だがすべての変化を遂とげて完全なる魂となった後、彼女は.....彼の愛した妹で居続けてくれるのか？

「お願いだ.....お願いだから、瑞ルイ麗リー.....」

天意も神仏も見放した彼が、今さら何に縋り、乞こい願えばいいのか。それすらも判らず、濤タオ羅ローはただ鳴お咽えつに声を震ふるわせるしかなかった。

「……戻ってくれ。元のお前に……俺の知ってる瑞ルイ麗リーに……」

土ど砂しや降りの雨の中、誰に聞き届けられることもなく、濤タオ羅ローはただ泣き続けた。

「ようこそ盟証」

劉リユウは席を立ちもせず、いつも通り人形の瑞ルイ麗リーに酌しやくさせた玉ぎよく杯はいを呷あおりながら、斌ピンを自室に迎むかえ入れた。口上がどうあれ、その歓かん待たいが口先だけなのは、漫そぞろな声こわ音ねを聴きけば敢あえて察するまでもない。

「……折り入って相談がある」

「ふむ？」

ようやく劉リユウは顔を上げ……だがその視線は斌ピンを素す通どおりし、彼の傍かたわらに侍はべるガイノイドへと注がれる。孔コン瑞・ルイ麗リーより魂魄転写され斌ピンへと贈おくられた一体……

『ラースヤ』である。

「お前が人形どう伴はんとはな。珍めずらしいこともあったものだ」

人もなげな劉リユウの態度にも苛いら立たちを表に出さず、斌ピンは平静を装よそおって切り出した。

「濤タオ羅ローの始末に秘策がある」

「ほほう。俺に断りもなく幫ほう会かいの外家拳けん士したちを死地に追いやっておきながら、ここにきて秘策ときたか。……宜よろしい。伺うかがおうじゃないか」

そこまで早く情報を把は握あくしている劉リユウに対し、斌ピンは畏い怖ふより先に疑念を懐いだいたが、今ここで拘こだわることでもない。まずは本題が先決だ。

「この『ラースヤ』を使う。昨夜も呉ンが試ためした手だ。このガイ

ノイド自体を武装させ、奴やつにぶつける」

「……俺からの贈り物を、随ずい分ぶんと粗そ略りやくに扱ってくれるな」

案の定、咎めるような劉リユウの声音。だがそれも予測の内である。劉リユウがその秘蔵のガイノイドに寄せる執しゆう着ちやくを知らればこそ、斌ピンはこんな提案を持ち出したのだ。

相手には気取られぬよう、斌ピンは左眼がん窩かに埋うめ込んだ多機能義眼を録画モードに切り替かえ、別室に控ひかえている付き人へ画像と音声を送信し始めた。

手て筈はずは万ばん事じ、申し合わせている。これから斌ピンと劉リユウが交かわす会話の内容は、余さず幫ほう会かい内のネットワークへと配信されるのだ。

「孔コンの目当てはこいつらのメモリの中身だ。真っ向から壊こわすこともできず、それだけで剣けんが鈍にぶる。結果として呉ンの人形は敗れたが、策そのものは悪くない」

これを卑劣な手段と嘲あざける者が幫ほう会かい内に現れよう筈はずがない。すでに腕に覚えのある者は総出で孔コンに挑いどみかかった後である。

「今度は自じ爆ばくを前提にして、対人地じ雷らいも積ませよう。さらに二体を同時にけしかければ……確実に濤タオ羅ローを殺やれる」

「二体、だと？」

「そうだ。あんたの人形も借り受けたい。単体で戦わせても呉ンのときの二の舞まいになりかねん。ここは大事を期して臨のぞみたい」

「……」

怒おこっているのか、呆あきれているのか……一いつ切さいの反応を見せぬまま、劉リユウはまた瑞ルイ麗リーに玉杯を差し出して汾ぶん酒しゆを注がせる。

“さぁ、どう出る？ 鬼き眼がん麗れい人じん、”

劉リユウにとってはかけがえのない恋こい人びとを模したガイノイド。だが副寨さい主しゆの自覚があるのなら、この提案は決して断れ

まい。躊ちゆう躇ちよする一分一秒が、劉リユウ豪・ホー軍ジユンを
幫ほう会かいの笑い者へと変えていく。

「解わかるだろう豪ホー軍ジユン。玩具おもちゃひとつに拘ってる場
合じゃないんだ」

真しん摯しな語調を装って畳たたみかけつつ、斌ピンは胸の内で嗤
わらう。せいぜい醜しゆう態たいをさらすがいい。皆みなが見てい
る。これで誰が幫パンのトップに相応ふさわしいか知れ渡わたろうと
いうものだ。

「断る」

劉リユウの返答は短く、そして速すみやかだった。あまりのことに
斌ピンが怒ど声せいを放つタイミングさえ逸いつしているうちに、眼
まな差ざし涼すずやかな美び丈じよう夫ふはさらに飄ひよう々ひよう
と言葉を重ねた。

「みすみす壊すと解っていれば、その人形もお前には預けておけん
な。偉ワイ信ソン。その『ラースヤ』も返してもらおう。置いて行
け」

「あんたは……」

もはや演出でも何でもない、本物の怒りに眩暈めまいさえ覚えなが
ら、斌ピンは言葉を搾しぼり出す。

「あんたは幫パンと人形と、一体どっちが大事なんだ!？」

「どっちも俺の玩具だ。どちらを壊すのも俺の勝手だ。貴様の口出し
は許さん」

傲然と言い放つ劉リユウの声には、何の邪じや気きも気負いもな
かった。

「……狂くるったか？ 豪ホー軍ジユン」

「今日まで俺が正気だとでも思っていたのか？ 俺は新にい妻づまを
貴様らに輪りん姦かんさせた上、五つに引き裂さいて配った男だぞ。
そんな奴が正気だとでも？」

「……ッ!!」

あらゆる表情を欠落させてわななく斌ピンに、劉リユウはさらに笑

いかける。

「どうした偉ワイ信ソン？　あまり心騒さわがすと、得意の暗器が冴さえをなくすぞ」

「.....ここで冴えなければ、どうだというんだ？」

「俺の頸くびを落とせん」

「ほざくな.....」

劉リユウの、この場に於においては異常と言える朗ほがらかな微び笑しようを前にして、斌ビンもまた引きつった笑えみを浮うかべる。

「貴様のその貧ひん弱じやくなボディを潰つぶす程度、本気の五分も必要はない」

「ほう？」

「虚きよ勢せいはやめろ。貴様のポテンシャルは承知している。

死んだ呉ンのパーソナルデータを回収した。そこに、あんたのボディの仕様書もあったよ。.....笑わせる。貴様の義体スペックは生身より幾いく分ぶんマシというだけの、屑くず同然の性能しかない」

「.....」

豪ホー軍ジユンは無言のまま答えない。依い然ぜん、泰たい然ぜんと落ち着き払はらって玉ぎよく杯はいを傾かたむけている彼だが、今の斌ビンの告発は秘中の秘であった筈である。

斌ビン自身、スペックデータを参照しても俄にわかには信じがたかった。

脳と脊せき椎つい以外は総交換したと言われている豪ホー軍ジユンの義体は、たしかにパーツの一点に至るまでがオーダーメイドの特注品ではあったが、その剛ごう性せいや耐たい久きゆう度は軍用兵装レベルとは程ほど遠とおい、医い療りよう用パーツのそれと大差ない代しる物ものばかりだったのだ。

しかも全身のパーツ構成からは、一切の電子デバイス、金属部品が徹てつ底ていして廃はいされている。運動神経の鋼ハード化ワイヤードもしていなければ機械駆く動どうの関節もない。強化セラミックの骨格とバイオマテリアルの筋肉織せん維い、あとは申し訳程度の耐た

いショック構造を備えた内臓器官……ここまで貧弱な内容では、お世辞にも戦せん闘とう用サイボーグとは言えない。

「そのボディの構成、貴様自身の設計だそうだが……さては孔コンの電磁発はつ動けいを恐おそれてのことか？」

「何のことだ？」

「とぼけるな。結局貴様は、ことの始まりから孔コンとの対決を見み越こしていたんだろうが。あんたがマカオで孔コンにとどめを刺さしたというのは……あれは、嘘うそだな？」

「まあ、な。一もとより、あの程度のことで死ぬ奴やつとは思っていない」

懐かしむように視線を泳がせる劉リユウ。その平静さを末まつ期ごの観念と見なした斌ピンは、侮ぶ蔑べつもあらわにせせら笑う。

「哀あわれな奴よ……奴を殺し損そこなったばかりに、復ふく讐しゆうを畏おそれて、敢あえてEMPの影えい響きようを受けないパーツだけでボディを組み上げたわけだ。……だがその結果はどうだ？ その肌はだで刃やいばを弾はじけるか？ 拳こぶしで鋼鉄を砕くだけるか？ 亜あ音速で機動できるような足あし腰こしか？」

「やれやれ……」

勝ち誇った斌ピンの言いぐさに、劉リユウは頬ほお杖づえをつきながら、逆に呆あきれ果てたと言わんばかりに苦笑を返した。

「二言目には速さだの硬かたさだの……貴様ら外家の連中は、どうしてそう単たん細さい胞ぼうなんだ？ 肉体機能だけが全すべてなら、この星には恐きよう竜りゆうしか生き残らなかつただろうに」

不敵極きわまるそんな余よ裕ゆうも、斌ピンの眼めにはもはや空から威い張ばりとしか映らなかった。今こうしている刹せつ那なにも、両腕に内蔵したレーザー誘導袖ちゆう箭せんは一瞬で劉リユウを矢や衾ぶすまに仕留めるだろう。

即そく座ざにそうしてのけないのは、斌ピンもまた劉リユウという男に対してなけなしの恩情を残していたからだ。何を契けい機きにここまで錯さく乱らんしたのかは知れないが、かつては幫ほう会かいの

権けん威いを手にするべく共に知ち謀ぼうを巡めぐらせた仲である。

「これが最後だ、豪ホー軍ジユン……その人形をよこせ。それで貴様
は死なずに済む」

押し殺した斌ビンの言葉に、だが劉リユウは出来の悪い冗じよう談
だんでも聞いたような白け顔で苦笑した。

「余程、俺を殺すのは気が引けるらしいな」

億おつ劫くうそうに玉杯を置くと、椅子子すから立って長ちよう杉
さんを脱ぬぐ。

義体の意匠しようは、完全に人体のそれを模したものだ。金属製
の強化は一いつ切さいない。バレエダンサーを思わせる、細身の体た
い軀くに最適量の筋肉だけを纏まとったプロポーション。一見しただ
けでは薄うす手でのボディスーツに身を包んだだけの、生身の人間と
しか思えない。

「よし、じゃあこうしよう。この勝負に次期寨さい主しゆの座を賭か
けようじゃないか」

「痴しれ言を抜ぬかすなッ!!」

「痴れ言なものか。お前は前寨主の仇あだ討うちを果たすんだ。皆み
なだって納なつ得とくするさ」

「……何……だと？」

言葉の意味を図りかねた斌ビンに、劉リユウは屈くつ託たくなく笑
いかけた。

「李レイ寨主を殺したのは俺だ」

「な……!？」

たしかに劉リユウは、それができる立場にあった。だが斌ピンは幫
ほう会かいの状じよう況きようを知り、劉リユウという男の狡こう猾
かつさを知るだけに、そこまで馬ば鹿かげた可能性など想像だにしな
かった。

老いた寨主は死に瀕ひんし、ただ座して待つだけでその座は手に入
る。事を急せいて暗殺などというリスクーな手段に訴うつたえるなど
愚ぐの骨こつ頂ちようでしかない。

「貴様は……」

有り得ない……そう否定していたのは、劉リユウの理性を疑っていなかった頃の斌ビンだ。今こうして彼の錯乱ぶりを目まの当たりにした後で、何を信じろというのか？

「……この場の会話は、余さず外部に配信している。皆が聞いたぞ。豪ホー軍ジユン。今の貴様の言葉をな」

「何とまた厄やつ介かいなことを」

かぶりを振る劉リユウの嘆たん息そくは、この期ごに及およんでも我が身を嘆なげくものとは程ほど遠とおい。むしろまるで斌ビンの身を哀れむかのようだった。

「それじゃお前、今この場で俺を殺さんと幫パンに示しがつかんじゃないか」

「ああ、その通り……」

言われるまでもない。いま斌ビンが相対しているのは、幫ほう会かいを蔑ないがしろにし、寨主殺しまで自白した許し難がたい奸かん賊ぞくである。ここでこの男を誅ちゆうせずして何の香こう主しゆか。何の俠きよう客かくか。

「いったい何を血迷って、こうも奇き態たいな死を望んだか……いや、知りたいとも思わん。

さらばだ、朋ほう友ゆう。せめて死出の花道は飾かざってやろう」
「そいつは粋いきな計らいだ」

飄ひよう然ぜんと肩を竦める劉リユウを目め掛がけて、斌ビンが懐せい愴そうの笑みとともに袍ほう服ふくの袖そでから抜き払はらった両手は、何人であれ視し認にんできなかつたろう。そう自負にかけて言える神速の、のみならず周しゆう到とうな暗器攻こう撃げき。

投げ放たれた八本の擲てき箭せんは、佇ちよ立りつする劉リユウの現在位置のみならず、予想しうる回かい避ひ先の未来位置まで残らず標的に捉とらえている。その弾だん道どうは義眼から照射されるレーザーサイトに導かれ、損じることが万に一つも有り得ない。

はたして劉リユウは動かなかった。案山子かかしのように棒立ちの

まま、擲箭の雨に身を晒さらず。

結果、八のうち四の切っ先が眉み間けん、咽のど、心臓と肺動脈を同時に挟みぐる一過あやまたずそうなる筈はずの擲箭が、寸前の虚こ空くうでかき消すようにして消しよう滅めつする。

ただひとり斌ビンだけが、その四本の行方ゆくえを見届けた。

なぜか待ち受けてでもいたかのように、擲箭の照準点に差し上げられた劉リユウの両手……必殺必中の四本はその手の中に、文字通り吸い込まれるようにして収まってしまったのだ。

肩かたから先の動作を除けば、劉リユウは微み塵じんも動かなかった。身を退ひくことも屈かがめることもなく、当然、回避の体たい捌さばきを見越していた残る四本の擲箭は、壁かべや床ゆかへと空むなしく突つき立っただけに終わった。

掴み取った擲箭を手の中で弄もてあそびながら、劉リユウは冷れい笑しようとともに斌ビンを眇すがめ見る。

「さっそくお得意の『影かげ縫ぬい八はつ卦け』か。なるほど大道芸としては見事なものだ。だが、殺しの技わざとしてはどうなんだ？ 一人相手に八本も投げまくるというのは」

斌ビンは挑ちよう発はつに耳を貸すこともなければ、追撃を迷いもしなかった。不測の事態が勝負の趨すう勢せいを乱しても、そこで惑まどわされれば即すなわち出で遅おくれる。他ほかならぬ暗器使いの斌ビン自身が心得る鉄則である。

圧あつ倒とう的優位を疑わぬまま、斌ビンは続けて暗器の応おう酬しゆうを放つ。初速を三段階に変えながら六個の棗そう核かく箭せんを投げ、さらにその弾道の合間を縫うように湾曲した軌道で三枚の鉞ばちを飛ばす。

互たがいを追い抜ぬき、交こう錯さくしつ、絡からみ合うようにして襲おそい掛かかる一群の投擲暗器。虚きよ実じつ入り乱れたその弾道は見切ろうと注視するほどに、逆に幻げん惑わくされて回避を見誤る。

これぞ『百ひやく綜そう手しゆ』必殺の『幻げん影えい錯さく綜そ

う刺し』。躲かわすはおろか見切れもすまい……

その確信が、立て続けに九度鳴り響ひびく剣けん戟げき音で木っ端ば微み塵じんに砕くだかれる。劉リユウは両手の中にあった擲箭を振り払い、全すべての暗器をただの一つも見み逃のがさず打ち落としたのである。

「な……」

一度ならず二度までも奥おう義ぎを封ふうじられ、さしもの斌ビンも我が目を疑わざるを得なくなった。

“有り得ない……何だ？ 今の動きは!?”

断じて言える。斌ビンの投じた暗器の中に一つとして尋じん常じょうなものはない。増幅センサーの類たぐいをいっさい実装していない劉リユウが、ただ動体視力だけで捉えられるはずがない。よしんば捕ほ捉そくできたとしても、未配線の運動神経では反応が追いつくまい。

まるで斌ビンの投げ放つ暗器の数々を、向きやスピードから種類に至るまで、すべて予あらかじめ見み越こしていたかのような。

“まさか……”

それを可能とするのは、唯一……斌ビンの修めた外家拳けん法ぼうとは本質的に思想の異なる、もうひとつの武術体系。

「俺の義体の仕様書を見た、と言ったな」

手の中に残った擲箭をあっさりと背後に投げ捨てながら、劉リユウの口調はまるで茶飲み話に興じるかのように綽しやく々しやくとしている。

「なら、疑問に感じなかったのか？ このボディの開発費も知っているはずだ。鋼化神経も機械化もなし。そんな義体の一体どこに、あれだけの費用がかかったのか」

「……」

斌ビンの脳のう裏りを過よぎるのは、李レイ寨さい主しゆの侍じ医いによって提出された検死報告の内容だった。

“僅わずかな外傷にも拘かかわらず、内臓には壊かい滅めつ的な破

損。死因は内家拳法の氣功術によるものと推定される……」

孔コンの寨主殺しが濡ぬれ衣ぎぬで、実際の下手人が劉リユウであつたなら、あの検死報告もまた捏ねつ造ぞうされたものだろう。現に監かん視しカメラの映像証しよう拠こはまんまと改かい竄ざんされていた。

が、あの侍医の人物については斌ビンも知っている。じつに度量も胆たん力りよくもない小物だ。幫ほう会かい纂さん奪だつなどという大それた陰い謀ぼうに巻き込まれて、平然と噓うそを吐つき通せるほどの器うつわとは考えにくい。

もしも、あの侍医の言に噓偽いつわりがなかったとしたら？ 劉リユウの手にかかった寨主の死因が、本当に内傷によるものだとしたら……

「馬ば鹿かな……」

有り得ない。氣功術による殺しなど、サイボーグには不可能だ。だがそれ以外にこの怪かい事じは説明がつかない。

「貴様……内功を繰くっているのか!？」

「その通り。このボディ、貴様ら外家のブリキ人形とはいささか構造が違ちがってな」

驚きよう愕がくは、だがこの場に相応ふさわしい感情ではない。そんな理由で状況を見失うほど斌ビンは愚おろかではなかった。

寨主の仇あだ。のみならず内家拳士。それは即すなわち、断じて負けられない理由が二つに増えたというだけの——いま死し闘とうの直中にあるこの場においては、それ以上の意味はない。

もはや一いつ切さいの遠えん慮りよは無用。ただ奥義の限りを尽つくして当たるのみ。

斌ビンは左右の義ぎ腕わんから最後の武器ふたつを解放する。飛び爪そうと飛び鑢によろ……かたや鋼鉄の鉤かぎ爪づめ、かたや鋭えい利りに研といた半月形の刃やいばである。いずれも義腕のリールから繰り出される単分子ナノワイヤーで連結され、振り回せば圏けん内ないのすべてを八やつ裂ざきに切り刻む。

「飛び散って果てる、劉リユウ豪・ホー軍ジユンッ!!」

猛もう然ぜんと大気を鳴らし、巻き起こされる凶きよう刃じんの竜たつ巻まき。その渦か中ちゆうに、劉リユウはあくまで従しよう容ようと足を踏ふみ入れる。まるで春の日の花園をそぞろ歩くが如ごとく。

その動きを喩たとえるなら、さながら立ち上る狼煙のろしの一条。飛び交かう刃の巻き起こす旋風つむじかぜに、ただ煽あおられる煙けむりのように悠ゆう揚ようと身を捻ひねり体を流し……

たったそれだけの体たい捌さばきによって、唸うなりを上げる刃の旋風は、ことごとく彼の身に触ふれることも許されなかった。

「な……」

絶句する斌ビンの両りよう肩かたに、劉リユウの両手が乗せられる。労をねぎらうようなその体勢が、勝負の決着を告げていた。飛爪も飛鏢も、こんな密着した間合いで繰り出せる武器ではない。別の得物に持ち替かえる……そんな暇ひまなど与あたえられないのは火を見るより明らかだ。

「何を驚おどろいているんだ？ 斌ビン。そんなに意外か？ この俺に負けたのが」

「……ッ!!」

すべてが理解を超こえていた。一体どこで手を誤って敗北に至ったのか、それすらも理解できない。だがそんな斌ビンとても、疑いの余地なく解わかる。——この立合を百度繰り返しても、百度とも同じ結果に終わることだろう。

ただ慄然と立ち竦む斌ビンを、劉リユウは柔やわらかく抱だき寄せて、歓かん待たいするように背中を叩たたく。

「冥めい土どの土産みやげだ。ひとつ味わってみるがいい。これが戴たい天てん流気功術・裏奥義……」

その先は秘ひめ事を耳打ちするように、唇くちびるを寄せて囁ささやいた。

“……紫し電でん掌しよう、だよ„

気功を操あやつるサイボーグ。その存在が理解できないのと同様に、斌ピンは総身を焼く苦痛の程ほども予期しようがなかった。

騒さわぎの収まる頃ころ合あいを見計らって、隣室に控えていた謝ツエ逸・イー達ターは劉リユウの私室を訪おとずれた。

いつものように椅子すに身をくつろがせた副寨主は、まるで何事もなかったかのように玉ぎよく杯はいの汾ふん酒しゆを呷あおっている。

「他ほかには誰だれも来ないのか？」

そう謝ツエに問う語調にも、修しゆ羅ら場ばを踏んだ余よ韻いんはない。

「この部屋のことは全部、外に伝わっていたんだろ？」

「命がけで青チン雲ワン幫パンに尽くそうという連中は、みな孔コン濤・タオ羅ローを追って出で払はらっている。残った連中に、君に楯たて突つこうという奴やつはおらんよ。……特に、あんな戦いを見せられた後ではな」

「フン……」

謝ツエは部屋を横切って、片かた隅すみで震ふるえているガイノイドに歩み寄る。斌ピン偉・ワイ信ソンが伴ともなって連れてきた彼私有のガイノイド、ラースヤは、主あるじの末路を目まの当たりにして恐きよう慌こうの直中にあった。

そんな彼女を憐あわれみもせず、謝ツエは専門家ならではの無情な的確さで手を伸のばすと、あっさり動力を落として沈ちん黙もくさせる。

「この屋や敷しきにはもう誰もいない。君と私だけだ」

「幫ほう会かいの屋台骨を折った奴と、寨主を殺した奴が共に野放しか。……大義と志があれば人の輪は幾いく度どでも甦よみがえる。が、青チン雲ワン幫パンはもう終わりだな」

まるで他人事ひとつとであるかのように、嘆息を漏らす劉リユウ。そんな劉リユウの態度に呆あきれたように鼻を鳴らすと、謝ツエはラースヤの肢し体たいをソファに横たえ、懷ふところから取り出したPDAを接続してチェックを開始した。

「それだけのことをした甲斐かいはあったかね？」

「充じゆう分ぶんに。……まだ仕上がってはいないがね」

耳と口は劉リユウとの会話に向けたまま、謝ツエは目と指先だけの確に作業を進めていく。

「なぜ、一年も待ったのだ？」

「一年で済んだと言うべきだ。五年だろうと十年だろうと、俺はあいつの帰りを待っていた」

遠く虚うつろな眼まな差さして語る鬼き眼がん麗れい人じんの声には、何かが致ち命めいのてきに欠け落ちたかのような、どこかうそ寒くなるような響ひびきがあった。

「奴の役目だった。彼女のために狂くるうのも、血を流すのも、すべて奴の義務だった。俺じゃなかったんだ」

「ずいぶん大勢を巻き込んだな」

「構いはせんさ。すべて瑞ルイ麗リーへの捧ささげ物だ」

「……」

作業を終えて立ち上がった謝ツエは、一言言いたげな面おも持もちで義足になった左足を見下ろす。そんな仕し種ぐさが劉リユウの失しつ笑しようを買った。

「その脚あしも、俺が詫わびる筋合いじゃなかろう？ 左さ道どう鉗かん子し、あんたもまた俺と同じ当事者の一人だろうが」

「筋書きを書き直したのは君だ。こうも血ち腥なまぐさい趣しゆ向こうにリライトされては、私なんぞに出番はない」

ラースヤのチェックに引き続き、謝ツエは劉リユウのガイノイドについても点検を始めた。こちらは動力を落とさない。白い旗チヤイナ袍ドレスの人形もまた、大人しく蕭しよう々しようと謝ツエの作業に身を任せている。

「いいじゃないか。どうであれ、あんたの実験は成じよう就じゆする。その足は自じ慢まんの研究のために捧げたものと思っておけばいい」

「.....好き放題言いおって」

慥ぶ然ぜんとそう呟つぶやきながらも、謝ツエはP D Aの表示を見届けて満足げに頷うなずいた。

「.....問題ない。君の人形の転写プログラムも生きている。別ドライブと接続し、同種の情報構造体を認にん識しきしたら、自動的に転写を始めるだろう」

「結構」

孔コン瑞・ルイ麗リーという魂たましいを五つに汲くみ分け、改めてそれをひとつの瓶かめに集める.....当初、その“瓶”の役割を果たすのは、この劉リユウのガイノイドの筈はずだった。

だが劉リユウはそれを拒こばみ、もう一つ別のシナリオを謝ツエに示した。そもそも舞台を提供したのは劉リユウである。謝ツエとしては従うしか他になかった。

「.....相当に変わるのか？ この子は」

「断だん片ぺん二つ分の孔コン瑞・ルイ麗リーとは、もう会っているだろう？」

「ああ。可愛かわいかったよ。.....俺のことは名前しか覚えていなかったが」

孔コン濤・タオ羅ローに渡わたした幼年型ガイノイドには、その居所を見失わないよう発信器が仕込んである。受信機は劉リユウが預かっていた。その気になれば彼はいつでも、もう一方の瑞ルイ麗リーの片割れに会いに行くことができた。

「再統合の結果として、一律に同じ変化を遂とげるとは限らない。今ここにある二体から部分再生した孔コン瑞・ルイ麗リーが思い出すのは、また違ちがった記き憶おくの断片だろう」

「そうか.....」

自じ嘲ちようとも寂せき寥りようともつかぬ乾かわいた色が、劉リ

ユウの双そう眸ぼうを掠かすめ過ぎる。

「真っ先に蘇よみがえるのは、俺を憎んでいた瑞ルイ麗リーかもしれないんだな」

「あり得んことではない。それが強い想おもいであったなら」

「……おいで。瑞ルイ麗リー」

劉リユウは傍かたわらのガイノイドを手招くと、優やさしく頬ほおに指先を這はわせながら、その顔を覗のぞき込んだ。まるで今生の別れを告げるかのように。

「俺は……お前と過ごせて、幸せだった。ほんの一欠片かけらしかないお前だったが、むしろそれで俺には充分だった。……お前は何かも忘れて、俺だけを見ていてくれた。ただ俺のことだけを」

「……」

劉リユウの視線を茫ぼう然ぜんと受け止める人形の面持ちには、もちろん主あるじの言葉を理解している気配など欠片もない。

かつて同じような虚むなしい一人語りに、孔コン濤・タオ羅ローが悲ひ嘆たんの涙なみだを落としたことを、劉リユウ豪・ホー軍ジユンは知らない。だがそんな濤タオ羅ローの苦く悶もんを見届けていたとしても、彼は鼻で嗤わらっていただろう。決して受け答えなど期待しない、こんな会話の真ま似ね事ごとを、劉リユウは一年にわたって繰り返し……そうやって心の慰なぐさめを得ていたのだから。

だが彼は不平など懷いだかなかった。ただ分け与あたえられたものだけで満足してきた。

「さようなら、俺の瑞ルイ麗リー。……まず一歩だけ、元のお前に還かえるがいい」

別れを告げて人形から手を放すと、劉リユウは謝ツエに向けて頷いた。

「……始めてくれ」

劉リユウ豪・ホー軍ジユン邸ていの敷地に侵入した濤タオ羅ローを出で迎むかえたのは、異様な静せい寂じやくだった。

上海に戻もどった後も、嚴重すぎる警備のせいで決して近寄れなかった劉リユウの私邸。まず先行して上海義ぎ肢し公司を襲おそわざるを得なかった程ほどに、その警けい戒かいには隙すきがなかった。

だがそれでも、いまや濤タオ羅ローは我が身に残された時間の短さを知っている。もはや悠ゆう長ちように策を練っている暇ひまはない。せめて劉リユウだけは刺し違えてでも仕留めようと、無理を承知でここまで来てみれば.....

“.....何があった？”

無言で従う瑞ルイ麗リーの手を引き、右手には抜ぬき身の倭わ刀とうを構えたまま、裏庭の闇やみをすり抜ける。

主だった俠きよう客かくの面々が、今も濤タオ羅ローの姿を求めて上海中に散っているのだとしても、この手て薄うすさは説明がつかない。まるで邸内に誰だれ一人として居合わせないかのような沈ちん黙もくぶりである。

もしも畏わなだとするならば.....この先まで瑞ルイ麗リーを連れていくのは危あやうい。

「.....瑞ルイ麗リー、ここに隠かくれて待ってるんだ」

小さく囁ささやきかけてから放そうとした手を、瑞ルイ麗リーが握にぎり返す。

「ルイリ、あにさまといっしょにいたい」

「.....」

再び起動して以来、瑞ルイ麗リーはいっときたりとも濤タオ羅ローの手を放そうとしない。だが本来なら庭に忍しのび込む段で後に残しておくべきところを、乞こわれるままにこんな場所まで連れてきてしまったことさえ迂う闊かつなのだ。

邸内にまで踏ふみ込むとなれば、もう微み塵じんも油断は許されない。今の衰すい弱じやくした状態で、他ならぬあの劉リユウ豪・ホー軍ジユンと渡り合うやも知れぬのだ。そうなれば瑞ルイ麗リーを庇か

ばう余よ裕ゆうなどあろう筈はずもない。

どうあっても彼女を連れていくわけにはいかない……そう意を決した濤タオ羅ローの手が、我知らず瑞ルイ麗リーの肩かたに乗る。

ほんの少し指を巡めぐらせれば、頂うなじの主電源スイッチにはすぐ届く。……そんな発想がふと脳のう裏りを掠めたそのとき、急に瑞ルイ麗リーが片手を伸のばし、肩の上にある濤タオ羅ローの手を押さえた。

「ここでまっていればいいのね、あにさま」

頷く瑞ルイ麗リーの笑え顔がおは、いつも通り微塵の邪じや気きもない。だが彼女に手を押さえられたタイミングの気まずさが、濤タオ羅ローの心を騒さわがせる。

あの刹せつ那な、彼女に対し懐いだいた感情は……あるいは不義と見なされても仕方ないものだったかもしれない。急に態度を改めた瑞ルイ麗リーが――まさかとは思うが――まるでそんな彼の心中を見み透すかしていたかのようで、濤タオ羅ローは胸に得体の知れない不安を抱かかえ込む。

「……すぐに戻る」

そう短く呟つぶやいて、畏怖にも似た感覚を断たち切った濤タオ羅ローは、音もなく馳はせて邸内へと踏み込んだ。

邸内の奥深くにまで踏み込む頃ころには、濤タオ羅ローも確信を固めつつあった。

理由はどうあれ、まず間ま違ちがいなくこの館やかたは完全に無人だ。罨かどうかを訝いぶかるよりも、何か異常事態があったと考えるべきかもしれない。

油断なく刀を構えたまま、濤タオ羅ローは足音を忍ばせて邸内を巡り……やがて家主の私室とおぼしき場所に辿たどり着いた。

内装の趣しゆ味み趣向からして、おそらくは劉リユウの私室。ここ

にきてようやく、あきらかな異常の痕こん跡せきが見つかった。……見違えようもない乱らん闘とうの跡あと。

床ゆかに散り、あるいは壁かべや天てん井じように突つき刺さった投射武器の数々。擲てき箭せん、鉞ばち、棗そう核かく箭せん……いずれも暗器使いの斌ピン偉・ワイ信ソンが得手とするものばかり。

あの『百ひやく綜そう手しゆ』が、ここで戦いを演じたのだろうか。

“だが、誰と？”

広い室内を見渡わたし、まず最初に目に留まった物言わぬ先客は、人形。それは遣い骸がいというより残骸と呼ぶのが相応ふさわしかろう。

そのガイノイドは、濤タオ羅ローが追い求めていた一体。瑞ルイ麗リーの魂魄を封じ込め斌ピンの手に渡った筈のものだった。不自然に身を掬よじった姿勢でソファに横たわる様は、あきらかに動力を失っている。

その頭部の穴という穴から、粘ねん液えき質のものが零こぼれ出て床にまで落ちていた。いったん沸ふつ騰とうし液化した有機メモリが、漏もれ出たまま冷えて凝ぎよう固こしたものだ。

今日までに濤タオ羅ローが幾いく度どとなく目にしてきた、脱魂レイス燃焼バーンの残ざん滓し……この人形のメモリは、すでに吸い出された後だ。

「……」

さらに周囲に視線を巡らせた濤タオ羅ローは、なぜかデスクの肘ひじ掛け椅子すが、不自然にも壁向きに反転しているのに気がついた。

ゆっくり油断なく回り込み、その椅子に座る人物を検あらためる。

斌ピン偉・ワイ信ソンはそこにいた。浅く項垂うなだれた首は居い眠ねむりでもするかのように……だが見開かれた右の瞼まぶたからは、左の義眼よりも虚うつろに濁にごった眼球が虚こ空くうを見つめている。

見たところ外傷らしいものはない。だが.....ニューラル系の誤作動、生命維持システムの故障、いずれにせよ何らかの痕跡は残る。

重改造を受けたサイボーグを、ここまで何の外傷も残さず死に至らしめる方法といえば.....ただひとつしか思い当たらない。他ならぬ濤タオローが、誰よりも熟知する手段。

“電磁発はつ勁けい.....か？”

その戴たい天てん流の秘技を己おのれ以外に修めた人物といえば、濤タオローは一人しか心当たりがない。その男が内功を使うなど、今となっては有り得ない筈だ。

だが斌ピンを殺したのも、彼のガイノイドからメモリの内容物を抜ぬき取ったのも、おそらくは同じ人物の仕し業わざだろう。

そしてそれは、ここに居合わせる筈だったもう一人の男.....この部屋の主に他ならないと、そう考えるのがごく順当だ。

“劉リユウ.....なのか？”

疑念を胸に抱く濤タオローの目が、ふと奇き妙みようなものを捉とらえた。斌ピンの死相、その固く嚙つくぐんだ口元から、小さな薄うす桃もも色いろが覗のぞいている。

「.....」

濤タオローは差し伸ばした倭わ刀とうの切っ先を斌ピンの口にねじ込んで、慎しん重ちようにこじ開けた。はらりと一枚こぼれ落ちた薄はく片へんは、清らかな桃の花弁。それが乾ききった斌ピンの口こう腔こうに、ぎっしり一いつ杯ぱいに詰つめ込まれている。

「.....そうかい」

ただそれだけで濤タオローは、斌ピンの骸むくろをこの場に残した人物のメッセージを、余すところなく受け取った。

もうこの場所に用はない。

濤タオローは、その手で仇あだを討うち逃のがした苛いら立だちを紛まぎらわすかのように、ぞんざいに倭刀を一いつ閃せんさせる。

斌ピンの死し骸がいの上うわ顎あごから上が斬きり飛ばされ、喉の

どまで詰まっていた桃の花が一いつ斉せいに部屋に撒まき散らされた。おびたしい花弁が高々と舞まい上がり、羽う毛もうのように揚よう々ようと漂ただよい落ちるその様は、さながら満開の桃とう花かの下で望む景色を思わせた。

飛び散った花弁の最後のひとひらが、ついに床まで落ちる頃……すでに部屋は、ふたたび死者だけの空間になっていた。

死に絶えた景色の中を、渺びよう々びようと風が吹ふき渡わたる。

分厚く空を覆おおっていた雲も、孕はらんだ毒素を洗いざらい流して溜りゆう飲いんを下げたのか、嵐あらしの後の風に運ばれて彼方かなたへと去り、今は澄すまし顔の満月が煌こう々こうと夜を照らしている。

そんな楚そ々そたる月げつ華かの下もと、鬱うつ蒼そうと立ち並ぶ、ねじくれ黒ずんだ立ち枯がれの木々。

枝葉も全すべて抜け落ち、タール状の汚お染せん物をべったりとこびりつかせた梢こずえは、奇き病びようの苦く悶もんに宙を搔かきむしる指先を思わせる。まるで燦さん然ぜんと輝かがやく空の月に向けて、縋すがり付こうと手を伸のばす亡もう者じやの群のように……

その梢がかつては爛らん漫まんと白い桃花を咲さき誇ほこらせていたなどと、誰だれが知ろうか。誰が偲しのぼうか。

この荒こう廃はいを憂うれえるのは、過日この庭の雅みやびに心を和なごませた記き憶おくを持つ者だけの特権である。

そんな資格を正しく備えた一人が、いま傾かたむいた四阿あずまやに身をくつろがせ、変わり果てた死の庭園を、過ぎ去った日々そのままに慈いつくしむような眼まな差ざしで眺ながめている。

青チン雲ワン幫パン副ふく寨さい主しゆ、劉リユウ豪・ホー軍ジユン。否いな……今となっては、そんな肩かた書がきで彼を呼ばれる人物がいるのかどうか。

かつて忠義を誓ちかった組織と、彼に付き従ったすべての者を手ずから破は滅めつに導いておきながら、その眼差しに昏くらい翳かげりは微み塵じんもない。

鬼き眼がんと渾名あだなされる双そう眸ぼうが、いま穏おだやかに見守り続けるものは……林立する枯れ木の合間を、幽ゆう霊れいのように散さん漫まんとさまよう白い影かげ。冷たい月光を浴びる白緞どん子すの旗チヤイナ袍ドレスが、深しん淵えんを仄ほの光ひかりながら泳ぐ深海魚を思わせる。

彼が瑞ルイ麗リーと呼ぶガイノイド。かつて彼の愛した少女と、同

じ貌かお、同じ名を持つ機械人形。

言葉もなく、感情もなく、ただ呆ぼうと虚こ空くうを眺めるばかりだった彼女が.....今は澎ほう湃はいと涙なみだに暮れている。

「.....何処どこ？」

呻しん吟ぎんの合間に囁ささやく声が、吹きすさぶ夜風にかき消されて散る。

「兄様が.....兄様がいない.....ここは何処？ 兄様は何処？」

切々と、誰に問うともなく繰り返される虚むなしい泣きゆう訴そ。たとえ誰かが答えても、彼女はその言葉を解すまい。

いま人形の少女を責め苛さいなむのは、何の前まえ触ぶれもなく取り戻もどした、底そこ抜ぬけの寂せきり寥よう感。その故ゆえを解するだけの理性はまだ彼女にない。

今の彼女は、五つに裁さい断だんされた断だん片ぺんのうちの二片だけ。だがその涙は、悲ひ嘆たんの由ゆ縁えんは、かつて彼女が孔コン瑞・ルイ麗リーだった頃ころから持ち越こしたそのままの感情である。

「.....何もかもが昔のままだな。瑞ルイ麗リー」

夢見るように独り嘯うそぶく劉リユウ。その微び笑ししょうは少女の鳴お咽えつを嘲あざけるものか、あるいは歪ゆがんだ慈じ愛あいの形なのか.....あくまで余人の理解の域外にその心を置いたまま、鬼き眼がん麗れい人じんは追憶に浸ひたる。

「あの日も君は.....そうやって俺の前で泣いていた」

『なにもかもが、辛つらいの。あなたの愛も、あなたの慈しみも、すべて私には辛い。枷かせなの』

『誰もかもが私を愛して、いつだって私は幸福で.....だから私のいるこの場所が楽園だって、あの人は信じて疑わない』

『ならいっそ地じ獄ごくに墮おちたかった。この身を炎ほのおで焼かれたかった。そうやって私が泣いて助けを求めれば、あの人だって.....気付いてくれたかもしれないもの』

一遠い日の面おも影かげは、今もなお劉リユウの胸を軋きしませるほどに締めあげる。

「いつだって、俺が思い出すのは泣いている君ばかり.....当然かもな。あの頃から君の笑顔は、奴やつにだけ向けたものだったんだから」

劉リユウは四阿を出てそぞろに足を運び、気がつけば泣きはらす少女の傍かたわらに立っていた。すぐ目の前で震ふるえる肩までの、決して届かぬ隔へだたった距きよ離り。あのときもそうだった。その立ち位置の間かん隔かくまでも、劉リユウは無意識のうちに正しく再現していた。

「でも御ご覧らんよ。君が囚とらわれていた世界は、もう楽園でも何でもない。見ての通り、ほら.....ここは君が望んだ通りの地獄だろう？」

慈しむように、癒いやすように、劉リユウは穏やかな口調で語り続ける。

だがただ蕩とう々とうと涙する人形は、彼の言葉に応じること、その意を解することもない。

「.....兄様.....兄様.....」

決して届かない詮せん無い言葉を、敢あえて連ねる劉リユウ豪・ホー軍ジユン。反はん響きようすら返らぬ虚うつろな深淵に、募つるがままの想おもいをただ注ぎ込む.....それは静かな狂きよう気きの形だった。

「もう心配はいらない。君を焼いた業ごう火かの熱さ.....その苦痛も、絶望も、余さず奴に伝わった。もう待たされることはないよ。程ほどなく奴は駆かけつける。君を救うためだけに、何もかも擲なげうって」

ささやかな鞘さや鳴なりを立てて、劉リユウはそっと佩はい劔けんを抜ぬき払はらい、祈いのりを捧ささげるように起立させて掲かかけ持つ。西洋拵ごしらえのレイピアだが、刺し突とつを主とする片手劔

けんという点で、扱あつかいの要よう訣けつは変わらない。戴たい天てん流剣術を極きわめた劉リユウにとっては過不足ない得物である。「すべては、君の望むがままに。……首しゆ尾び良く結末に至った後は、瑞ルイ麗リー……この俺にも微笑ほほえんでくれるかい？」

月光を吸って冴え冴えと冷える刀身を、凝じっと眺める劉リユウの眼がん芒ぼうに……このとき、激しくも静かな炎が灯ともる。

「俺は君が求め欲ほつした通り、この世を地獄に変えてやった。だがな……君のためだけに終わらせたりはしない。君と同じ地獄に、奴もまた突つき落とす。骨の髄ずいまで焼きつくしてやる。君を焼いたのと同じ火で」

レイピアの刀身を濡ぬれ光らせる月光が、若わか鮎あゆのように跳はね上がる。

刹せつ那な、枯れ枝の一本が音もなく切り落とされて宙に浮うき……

続く剣光の閃ひらめきを浴びて、さらに形を失った。

虚空で木の枝を捉えた劉リユウの剣けん戟げきは、それを切り刻むのみならず、文字通りに霧む散さんさせていた。砕くだかれた破片はただの一片たりとも落下するだけの質量を留とどめず、すべて風に掠さらわれて飛び去ったのである。

かくも軽けい捷しような剣技の冴えは、むろん凡ぼん夫ぶの至るところではない。かつて稀き代たいの天才と謳うたわれた内家剣けん術じゆつ家かの、まさに入神の域にある功だった。

「早く来い、孔コン濤・タオ羅ロー。我らが姫ひめ君はお待ちかねだ。最後の供く物もつが供されるのを」

劉リユウの私し邸ていに残されていたＳＶの一台を借用し、雨上がりの夜空を馳はせること数十分。辿たどり着いた崑こん山ざん、陽よう澄ちよう湖こ畔の孔コン家邸宅は、思えば上海に戻もどって以来始

めて訪おとなう、一年ぶりの帰宅だった。

「……ルイリ、このおうち、しってるよ」

傍らの瑞ルイ麗リーが、濤タオ羅ローの服の裾すそを掴つかんで訴うつたえる。

「なんだかとても、なつかしい」

「……ああ、そうだな」

明かりの失うせて久しい邸内を見み渡わたして、濤タオ羅ローは呟つぶやく。

「懐なつかしいな。ここは」

わずか一年、主あるじの失せたまま放置されていただけで、邸宅は見る影かげもなく寂さびれ果てていた。家人が去り、物取りの類たぐいに物色された後も、棄き民みんやら何やらに蹂じゆう躪りんされ尽くしたのだろう。

汚お染せんされた風雨に抗こうする手入れが絶えた後は、かつての明めい媚びな中庭も無む惨ざんな有様だった。天てん蓋がいが破れ、降り注ぐ油ゆ煙えんと酸性雨を浴びるだけ浴びた桃とう林りんは、もう二度と花を結ぶことはあるまい。

だがそれでも目を眇すがめて眺ながめれば、心にまざまざと蘇よみがえる過ぎし日の景觀が、この廃はい景けいに重なって見える。あの頃ころ……たとえ外の世界は非情でも、ここだけは優やさしさと慈いつくしみに満ちていた。今となっては、遠すぎる日々。

劉リユウの残したメッセージに拠よるなら、この桃花の庭こそが決戦の舞ぶ台たい。すべての因果を閉とざすには、なるほど相応ふさわしい場所かもしれぬ。

中庭に踏ふみ込んですぐ、濤タオ羅ローは寂じやく々じやくと尾おを引く呻しん吟ぎんを聞きとがめた。

「な……」

漂ただよう霧きりのようにおぼつかない足取りで、立ち枯がれの木々の合間にゆらめく白い影。過日ここに遊んだ瑞ルイ麗リーの亡ぼう霊れいかと思うほど……それほどに少女は、胸に焼き付けた面おも

影かげと寸すん分ぶん違たがわぬ容姿をしていた。

「兄様.....何処どこ.....」

「瑞ルイ麗リー.....ッ!!」

叫さけべども少女は答えない。涙なみだを湛たたえた瞳ひとみは、だ何処いずこに焦しよう点てんを合わすこともなく虚うつろに宙を彷徨さまよい続ける。

「残念だったな」

濤タオ羅ローの背後、母屋おもやの柱の陰かげから歩み出た人影が、擲や掬ゆするように声をかける。胸の内の憎ぞう悪おがそのまま形を取ったかのような.....懐かしく、そして怨うらみ連なる立ち姿。

「俺の手元に残した瑞ルイ麗リーに、斌ビンに預けてあった断だん片ぺんを付け加えた。だがあの子が取り戻したのは、胸に秘ひめていた哀かなしみだけだ。

お前の集め損そこなった残りが、彼女だ。その小さな瑞ルイ麗リーと違ちがって、あの瑞ルイ麗リーには俺たちの顔の見分けがつかんらしい」

「貴様.....」

何を思って腹心の斌ビンを手にかけたのか、加えて左さ道どう鉗かん子しの秘技たるはずの瑞ルイ麗リーの再生法について、なぜこの男が知っているのか、糺ただすべき疑問はいくらもあった。

だが今濤タオ羅ローの胸に渦うず巻まくのは、今日この日まで積み重ねてきた絶望と怨えん嗟さの嵩かさばかり。

そんな、どす黒い激情で歪ゆがみきった鬼き相そうに、涼すずしげな歓かん待たいの笑え顔がおが応じる。

「よく戻ったな、濤タオ羅ロー。待ちかねたぞ。この日を」

「俺とて.....」

待ちかねた。今一度この男と対たい峙じするためだけに、濤タオ羅ローは死神から命を買い戻したのだ。義も忠もすべて質しち種ぐさにして。

「何ともはや、変わり果てたザマじゃあないか。妹一人のために、よ

くぞそこまで墮おちたものよ」

鬼き眼がん麗れい人じんの冷れい酷こくな憫びん笑しようが、生々しい既き視し感かんを伴ともなって過日の光景を呼び戻す。いつも涼やかな笑顔で濤タオ羅ローたち兄妹きようだいを見守っていた……あの頃と寸分変わらない劉リユウ豪・ホー軍ジユンの微び笑しよう。

「ああ、そうとも。俺は変わった。だが、貴様は……」

言いさして濤タオ羅ローは、あらためて中庭に佇たたずむ人形を凝ぎよう視しする。

引き裂かれた瑞ルイ麗リーを宿す人形のうち、豪ホー軍ジユンが手で許もとに残した最後の一体。その容姿は無論、持ち主が求め欲ほつする容かたちに整形したものだろう。彼女が生前の瑞ルイ麗リーに瓜うり二ふたつだという、その事実が物語るもの……

あの貌かおと黒くろ髪かみを、慈しんだのも、陵りよう辱じよくしたのも、つまりは等しく同じ劉リユウ豪・ホー軍ジユンなのだ。

“その笑顔で、涼やかな目のままで、貴様は……俺を斬きり、瑞ルイ麗リーを辱はずかしめたのか？ 豪ホー軍ジユン……ッ!!”

もしもこの男が、見る影もないほどに豹ひよう変へんしていたのなら、濤タオ羅ローはただ憎にくしみだけを胸に抱いだいたまま報ほう仇きゆうの剣けんを執とっていただろう。友の豹変を嘆なげき、彼をそんな翻ほん心しんに追いやった事情だけを悔くやめばそれで良かった。過ぎ去った日の回想は、ただ美しいまま心に秘めておけたのだ。

このあまりにも無情な現在は、過去と断絶したものと……そんな風に諦てい観かんできたなら、まだしも慰なくさめはあっただろう。

そんな夢はかない望みさえもが、劉リユウの微笑を前にして、音を立てて瓦が解かいしていく。

「劉リユウッ!!」

濤タオ羅ローはただ激情に駆かられるがまま、振ふりかざした長段平を力任せに叩たたき下ろす。

もはや呼吸も型もなく、剣けん技ぎですらない斬り込みとはいえ、戦意も緊張も窺うかがわせない弛し緩かんしきった佇たたずまいの劉

リユウにとって、それは致し命めいたき凶きよう刃じんとなるはずだった。……が、そんな倭刀とうをすげなく阻はばんだのは、待ち構えていたかのように閃ひらめいたレイピアの刀身だった。

「その無様な剣は何だ？ 濤タオロー。免めん許きよ皆かい伝でんの名が泣くぞ」

柔じゆうよく剛ごうを征せいするが要よう訣けつの内家剣術においては、こんな力任せの鏑つば競ぜりにもつれ込むなど悪手の極きわみである。しかもせせら笑う豪ホー軍ジユンの剣は、渾身で押し迫る濤タオローの刀を前にびくともしない。外見でそれと看破できないものの、その圧あつ倒とう的な臂りよ力りよくの落差は、まぎれもなく劉リユウの体たい軀くが機械化されていることの証あかしだった。

嘲あざけりも露あらわに揶揄されながら、だがそれでも濤タオローは、なおも怒りかりと憎しみを注いで、微び動どうだにしない刀身を圧おし込める。

「貴様を友と信じた俺が……度し難がたいほどに愚おろかだった。みすみす瑞ルイ麗リーを死なせてしまった。

その過あやまちを、今ここで濯そそぐ。劉リユウ豪・ホー軍ジユン、貴様の血でな!!」

言い放つや否いなや、濤タオローは柄つかに添そえていた左手を放し、狙いすました紫し電でん掌しようの一撃を豪ホー軍ジユンに見み舞まう。

右手一本の支えでは豪ホー軍ジユンの剣圧を支えきれず、倭刀は無様に撥はね退のけられたものの、それでも致命的なEMPの掌しよう撃げきは、たしかに豪ホー軍ジユンの胸むな板いたを捉とらえていた。

剣を弾かれた勢いで数歩後ろによろめき退さがる濤タオロー。その表情が驚きよう愕がくに強こわ張ばる。電磁発はつ勁けいの直撃を受けながら、豪ホー軍ジユンは何事もなかったかのように平然と立ちはだかったままだ。

「おいおい何だ？ 今の優しげな一ひと撫なでは」

“不発……ッ!?”

命を削けずのりと引き替かえに放った必殺の技わざが、どこをどう問ま違ちがって無む為いに終わったか……報むくわれぬ結果とは裏腹に、無理を押して放った気勁は内傷でずたずたになった臓ぞう腑ふをさらに激痛で締め上げる。

「く……」

目が眩くらむほどの痛みに襲おそわれながらも、いま濤タオ羅ローは豪ホー軍ジユンを屠ほふる一念だけに取り憑つかれ、肉体の苦痛など意中に割り込む隙すきもない。

壊こわれかかった肉体の限度も顧かえりみず、濤タオ羅ローは今度こそ戴たい天てん流の秘術を尽くした殺法で鬼き眼がん麗れい人じんに斬りかかる。『驟しゆう雨う電ひよう風ふう』『鳳ほう凰おう吼こう鳴めい』『貫かん光こう迅じん雷らい』の三手に目め眩くらましの虚手を交えた連れん環かん套とう路ろ。もはや一度ならず二度三度と急所を抉えぐり、骸むくろにしてなお重ねて殺さんとする塵おう殺さつの剣である。

それら全すべてを悠然と後手で受け捌さばく豪ホー軍ジユンのレイピア。流りゆう麗れいに舞まうが如ごとき剣筋は、熾し烈れつ極まる倭刀の脅きよう威いをまるで理解していないかのように安あん穩のんたる余よ裕ゆうを見せて一にも拘かかわらず、まるで示し合わせていたかのような的確さで濤タオ羅ローの刺し突とつのことごとくに応じてのけた。

囷おとり、誘さそいの手には目もくれず、殺意の刃やいばだけを的確に……跳はね上げられ、或あるいは打ち落とされて、倭刀の刃はすべて虚こ空くうに流される。

「な……」

かつて同じ戴天門下にいた兄弟で子しとの立合と思えば、これは至し極ご順当な応おう酬しゆうだった。幾いく度どとなく木ぼつ剣けんで交わした組み手、乱取り……ただの一度として濤タオ羅ローの攻せめが彼に届いたためしはない。

だが今や濤タオローの執しゆう念ねんは剣に鬼き神しんの冴さえを添え、もはや往年の豪ホー軍ジユンにとて勝まさるとも劣おとらない。いやそれ以前に、全身の義体化と引き換えに経絡を失った今の豪ホー軍ジユンには、かつての内家剣など揮ふるえようはずがないのだ。

だというのに――

「五手のうち三手までが殺し技か。まさに執念で磨みがいた鬼き剣けんだな。なかなか魅みせてくれる」

“な……馬ば鹿かなッ!!”

信じがたい事ではあった。が、いま見届けたばかりの現実には揺るがしがない。豪ホー軍ジユンが振るった剣は明らかに、濤タオローの太た刀ち筋すじを目で見て認にん識しきするより先んじていた。まるで剣そのものに意が宿ったかの如く……

「な、内勁……!？」

「ほほう、流石さすがに斌ビンよりはよほど察しがいいな」

さも感心げに眉まゆを上げて、皮肉めかした賞賛を送る豪ホー軍ジユン。その平易きわまる軽けい剽ひような拳きよ措そは、濤タオローの察した理解を絶する現象とはかけ離はなれて余りある。

「馬鹿な、貴様は戴天流を捨てたはず……」

「何故なぜそう思う？ 俺がサイボーグだからか？」

にこやかに両手を拡ひろげて、豪ホー軍ジユンはそのとりたてて奇き抜ばつなところもない細身の体軀を誇こ示じする。

「見ての通りこのボディには、過か剰じょうな強度やパワーなんてない。素材こそ人工物だが、構造そのものはあくまで人体を模も倣ほうしたものだ。

ただし模倣は徹てつ底ていしている。内臓も、循じゆん環かん系も、生身の肉体にある器官は残らず詰つめ込んだ。……ありとあらゆる器官をな」

「な……に？」

色を失う濤タオローの形相に、理解の兆きざしを見届けたのだろ

う。豪ホー軍ジユンは今度こそ微び笑しように圧倒的な不敵さを覗のぞかせた。

「.....そうだ。経けい絡らくもまた然しかり。手足に走る三陰いん三陽十二経.....全身六五七箇か所しよすべての経けい穴けつが、この義体には完全に備わっている。我ら内家の先達が培つちかってきた千古の知ち恵えだ。俺が決めた仕様に沿って、榮ウイン成シンに設計させた」

それは発想の転てん換かんだった。なにも自然の機運を逸いつ脱だつするものばかりが機械の真しん髓ずいではない。そもそもの始まりにおいて、機械メカトロ工学ニクスとは自然を模するところこそが起点だった。

だが設計者である劉リユウの意図を、開発に携たずさわった技術者たちは誰だれ一人ひとりとして理解し得なかつただろう。それは失われた神秘の知恵、かつて内家功夫の先達たちによって培われた、別体系の自然科学に根付くものだった。

「生身の貴様と同様に、この義体は丹たん田でんで氣きを練り、全身に巡めぐらせて、森しん羅ら万ばん象しようの氣運の流れに身を委ゆだねることができる。今や俺は人造器官の強度とパワーで、内家氣功夫を駆く使しできるのさ。内傷を患わずらうことも、肉体限界に縛しばれることもない。まさに究極の功夫だ」

「.....ッ!!」

濤タオ羅ローは絶句する。

考えるだにおぞましかった。大地の氣脈と内経を照応せしめ、無為自然の天道と一体となる.....それは肉体の機械化などという安易な方法では決して至れぬ聖域ではなかったのか？

「一度は薰くん陶とうを受けた戴天流を、諦あきらめるならまだしも.....そうまでして辱はずかしめるか、豪ホー軍ジユン！」

兄弟子たる豪ホー軍ジユンの達した結論は、濤タオ羅ローにとって、拳けん士しとして奉ほうじ信じてきた理想をもっとも醜しゆう悪あくな形に歪ゆがめたものだったと言っている。

「ふざけるんじゃない！ 機械の身体からだに身を堕おとした貴様に、語らせるような内家の功夫があるかッ!!」

「やれやれ、貴様も外家の石頭どもと変わらん」

濤タオ羅ローの激げきに痛つう痒ようすら感じていないのか、豪ホー軍ジユンはさも幻げん滅めつしたかのように嘲あざけり笑う。

「二言目には誇りだの意地だの……そんなものに煩わずらわされて、その身に修めた武の形ひとつしか認められん。

だがな、この義体を手に入れた俺の前には、もはや外家も内家もない。そんな括くりに囚とらわれた流派など過去の遺物だ。問題にもならんよ。史上初の内ない勁けい駆く動どう型サイボーグ。現存する唯ゆいーいつの試作品……どうだ、武林の頂点に立つに相応ふさわしい姿だとは思わんか？」

「黙だまれ……」

倭わ刀とうの切っ先を青眼に据すえ、いまいちど必殺を期した『峨が眉び万ばん雷らい』の構えで、濤タオ羅ローは摺すり足に間合いを詰めていく。

「それ以上の狂くるった世迷い言は……まず俺の戴たい天てん流を破ってからほざけ」

「フフ……死に損ぞこないがよく言った」

レイピアの切っ先がゆるやかに半月を描えがき、その剣けん柄べいが撓たわめた胸きよう梁りようの向こうでぴたりと静止する。総身を弓ゆ弦づるに、さながら矢を引き絞しぼるが如ごとく剣柄を引いた構えは、同じく戴天流、『竜りゆう牙が徹てつ穿せん』の型。

両者とも刃じん圈けんに入るや否いなや、六四套とう路ろすべての剣戟を一いつ気き呵か成せいに紡つむぎ出す、決め技前提の必殺剣である。

ともに氣息を巡らし導引の呼吸に入る二人。同じ内家剣の激げき突とつとなれば、その趨すう勢せいは丹田の氣の充じゆう溢いつぶりで決すると言っていい。

「断っておくが、先の通り、俺に電磁発勁は通用せんからな」

—いつ触しよく即そく発はつの状じよう況きよう下か、なお嘯うそぶくだけの余よ裕ゆうを見せて、豪ホー軍ジユンは見せつけるように首筋をさらす。

「俺を紫し電でん掌しようで仕留めたくば……ここ、だ。直じかに頭を狙ねらうしかない」

人工経絡に干かん涉しようせぬよう、気穴を避さけて埋まい設せつされたダイレクト接続端たん子し。徹底して電子デバイスを省いた豪ホー軍ジユンの義体において、そこだけが唯一、電磁誘ゆう導どうを引き起こしうる弱点だった。

「ただし問題なのは、果たして次に勝機が訪おとずれるまで、貴様の身体が保もつのかどうか……」

そう言葉尻を浮うかせたまま、豪ホー軍ジユンは無造作に一步詰つめ寄った。何の気負いもないその一步で、両者の間合いが致ち命めいのてきなほどに深々と交こう錯さくする。

この瞬しゆん間かん、この刹那を待ち受けていた濤タオ羅ローの倭刀が、どうして見過ごそうものか。白はく刃じんは堰せきを切ったかの如く、剣光の網あみ目めを編んでほとばしる。

迎え撃つ豪ホー軍ジユンのレイピアは、あくまで先の緒しよ戦せんの再演で、危なげなく受け流す。

—内家剣術家どうしの立ち会いは、つまるところ先の読み合いに終始する。

受け手の剣は、攻せめ手の剣けんに重さが乗るのに先んじてその軌き道どうを封ふうじにかかる。それに搦からめ取られまいと、即そく座ざに攻め手もまた型を変え……こうして両者の刃やいばは技の出始めで切っ先を交え、すぐさま次手へと移るため、軽く鋼はがねの触ふれ合うばかりの剣戟が猛もうスピードで連れん環かんする形になる。

その応おう酬しゆうが軽快なばかりで迫はく力りよくに欠けるかといえ、まったく逆だ。もしその場に居合わせて見届ける者がいたならば、両者の間で闘せめぎ合う気き迫はくの熾し烈れつさに総毛立ったことだろう。

ともに秒間十数手に及およぶ刺し突とつのうち、どれか一手でも応じ損そこなえば、それが必殺の決め技へと化ける。まさに一いつ髪ばつ千せん鈎きんを引く集中力の競きそい合いが、間断なく繰り返されるのだ。その緊きん張ちようの密度は尋じん常じようではない。

舞まい飛ぶ剣先が風を生み、ぶつかり合ううちに颯つむじかぜと化して、枯かれ木を鳴らし夜気をさざめかす。かつて遠く及ばなかった兄弟子豪ホー軍ジユンの絶技を前に、濤タオ羅ローはさながら獲え物ものに喰くらいつく餓が狼ろうの執しつ拗ようさで、一步も譲ゆずらず食い下がる。

それは剣士として潰ついえゆく濤タオ羅ローの生命の、最後の燃ねん焼しようだったのだろう。殺意も闘とう志しも一刀に託たくし、彼は忘ぼう我がの境地にあった。過か剰じよう供給のアドレナリンに軋きしみを立てる筋肉も、臨界を超過えて駆く使しされる心臓と肺の悲鳴も、一いつ切さい耳に届かない。

「フフ……見事なものだ」

怒濤の攻めに応じる豪ホー軍ジユンの呟つぶやきには、掛かけ値なしの賞賛が込められていた。

「よくぞそこまで戴天流を仕上げてのけた。俺に代わって流派を嗣ついただけのことはある」

「……ッ!!」

だが豪ホー軍ジユンの賛辞が意味するところは、言葉とは裏腹だった。

この極限下の応酬において、なお戯ざれ言ごとを弄ろうするだけの余裕……それが何よりも歴然と、両者の圧あつ倒とう的な力量の差を物語っている。

“せめて……せめて一ひと太た刀ち……!!”

焦あせりに駆られた濤タオ羅ローは、捨て身の一手を繰り出した。刺し違ちがえるのも辞さぬ覚かく悟ごでひときわ深く踏ふみ込むや、『放ほう手しゆ奪だつ魂こん』の斬ざん撃げきを袈け裟さ懸がけに振り下ろす。

相あい討うち覚悟の一刀を前に、だが劉リユウは身を退ひくどころか逆に前へと踏み込んで応じた。白刃の下に身を滑すべり込ませ、間一髪のきわどさでくぐり抜ぬけて躲かわす。

すれ違う両者の間に、刹せつ那な、割り込む繭けん紬ちゆうの布地。豪ホー軍ジユンが翻した長ちよう衫さんの裾すそである。その布に目線を阻まれた濤タオ羅ローは、戦せん慄りつに背筋を凍こおらせた。

“臥が龍りよう尾!?”

咄とつ嗟さに左ひだり腕うでに内力を込め、側頭部を防御する濤タオ羅ロー。はたして長衫の裾を目眩ましに繰り出されていた豪ホー軍ジユンの後ろ回し蹴げりは、ブロックした腕に炸さく裂れつした。

衝しよう撃げきを受け流すにも脚あし捌さばきだけでは応じきれず、濤タオ羅ローは大きく跳とび退いて転てん倒とうを免まぬがれる。両者は互たがいの間合いから脱だつし、再び距きよ離りを置いて対たい峙じする形になった。

ここに至るまで交かわされたのは二〇〇手余り。大たい概がいの勝負であればとうに決着がついている。だがこの戦いは、共に手の内を知り尽つくした同門対決。力量が伯はく仲ちゆうするほどに展開は膠こう着ちやくする。

一否いな、帰き趨すうだけで語るなら、既すでに勝敗は決したも同然だった。

いまだ悠然とレイピアの切っ先を揺らして誘いをかける豪ホー軍ジユンに対し、濤タオ羅ローは陸に打ち上げられた魚のように呼吸を荒あらげ、固く嚙かみしめた口元からは血の泡あわが覗のぞいている。

はじめに豪ホー軍ジユンが言げん及きゆうした通り、既に濤タオ羅ローの身体からだは秒読みの段階にあった。肺はい腑ふで破れ拡ひろがった内傷からは、もう止めようがない程ほどに流れ出した淤お血けつが気道を遡さかのぼってこみ上げてくる。

かたや最さい先せん端たん技術の結けつ晶しようである人工ゴディ。かたや酷こく使しに酷使を重ねて擦すり切れた生身。やはり雌

し雄ゆうは競うまでもなかった。

だがそんな自明の理でさえ、未いまだ揺るぎない闘志を秘ひめた濤タオ羅ローの眼光は、頑がんとして認めていない。剣けんを執とる手と、地を踏む足が一ひと揃そろいある限り、決着は有り得ぬと……殺意の執しゆう念ねんに彩いろどられた双そう眸ぼうがそう語っている。

そんな濤タオ羅ローの気き概がいを見て取ってか、豪ホー軍ジュン
は嘆たん息そくして哀あわれみの眼まな差ざしを向ける。

「なるほど。決着まではまだ遠いと……あくまでそう言いたいわけか」

豪ホー軍ジュンは構えを解き、無防備に剣先を下ろす。

「ここまではただの内家の技比べ。これでまだ足りんというのなら……良かろう。今度は内家外家の区別を超えた境地を見せてやる」

言葉とは裏腹に、無造作にレイピアを掲げたまま佇ちよ立りつするその体勢は、いかなる技を繰くり出す型にもなっていない。その謎なぞめいた態度がなお一層、濤タオ羅ローの警けい戒かい心を掻かき立てる。

「たとえば……」

決して油断はしていなかった。むしろ意識は研とぎ澄すましていた。にも拘わらず濤タオ羅ローは、続いて起こった現象の数々を順序立てて把は握あくすることができなかった。

爆ばく音おん。巻き上がる砂すな埃ぼこり。震しん撼かんした朽くち木きの列がーいつ斉せいに梢こずえを落とす。

そして立ちこめる粉ふん塵じんの中、濤タオ羅ローは確かに……前後左右から襲いかかる四人の豪ホー軍ジュンを見て取った。

「な……」

息を呑のむ間もあらばこそ、かくも奇き怪かいな現象に応じ得るわけがない。

濤タオ羅ローは為なす術すべもなく、四方から閃ひらめいたレイピアの剣光に目を奪うばわれたまま……気がつけば両手両りよう脚あし

の筋肉を深々と抉えぐられていた。

「ぐぁっ……ッ!？」

思わず苦く悶もんの声を漏もらしながら、四肢から一斉に血ち飛沫しぶきを撒き散らす濤タオ羅ロー。その姿を豪ホー軍ジユンは、まるで一步も動いていないかのように元の立ち位置に佇たらずんだまま、冷れい笑しようにを込めて一いち瞥べつする。

「……と、まあこんな塩あん梅ばいだ。機械の義体で内家の輕功術を使うところなる」

はたして不意の爆音と衝しよう撃げき波はは、豪ホー軍ジユンの体術が音速の壁かべを破った結果であった。彼は濤タオ羅ローの周囲をぐるりと一いち巡じゆんしながら、立て続けに四度の刺し突とつを送ったに過ぎない。

だがその速度が人間の動体視力を逸いつ脱だつして余りあっただけに、濤タオ羅ローの目にはただ剣を繰り出す残像だけしか映らなかったのだ。無理からぬ。各種センサーで知覚を拡張していた『百ひやく綜そう手しゆ』の斌ビンですら、捕ほ捉そくし得なかった体たい捌さばきである。

「内功の威い力りよくは深しん淵えん無辺。たとえ水準以下の性能しかない義体でも、こうして内ない勁けいで操あやつれば規格外のパワーを発揮する」

まるで先程の会話から一切の寸断もないかのように言葉を続けながら、豪ホー軍ジユンはわずかに残った長ちよう衫さんの残ざん骸がい肩部から払はらい落とす。裾長の上着は超ちよう音速の空気抵てい抗こうをもろに受け、大部分が破れちぎれて消し飛んでいった。

無論、彼が四手とも急所を狙ねらわなかったのは手心である。その気になれば四度が四度とも即そく死しに至らしめるに充じゆう分ぶんな突つきだった。結局、豪ホー軍ジユンにとってこの対決はどこまで行っても戯たわむれ合いに過ぎないのだ。

もはやどう足あ搔がいても濤タオ羅ローに勝機はない。臆けんまで断たたれていないとはいえ、四し肢しの傷は動作を奪うのに充分な深

手である。

なのに――

侮ぶ蔑べつさえ通り越こした憐れん憫びんが、嘆息となって豪ホー軍ジユンの口から漏れる。

「いっそ倒たおれ伏ふしてしまえば、楽になるものを」

「ふざ……けるな……」

濤タオ羅ローは頹くずおれなかった。手にした倭わ刀とうを放すこともなかった。

普ふ通つうなら腕うでを持ち上げることはおろか、自重を支えて立っているだけの脚力さえ残っていまい。それでもなお彼を立ちはだからせるのは、憎ぞう悪おと執念……その身の丈たけに収まらぬほどの嵩かさの憎にくしみが、張力となって傷ついた四肢を内側から支えているのだ。

「……貴様だけは許さない」

その一念が潰ついえぬ限り、己おのれは死してなお倒れはすまい。そう濤タオ羅ローは理解していた。

とうに骸むくろも同然の我が身を衝つき動かす、今となっては唯ゆい――いつの動力。その源を少しでも確かなものにするために、彼は浅い呼吸の限りを尽つくして、怨えん嗟さを口に昇のぼらせる。

「何もかも貴様が奪った。貴様のせいですべてが壊れた……瑞ルイ麗リーは、俺の全すべてだった……」

「瑞ルイ麗リーもまた同じだと、なぜ気付いてやらなかった？」

濤タオ羅ローの呪じゆ詛その狭はざ間まに、ふと豪ホー軍ジユンが、いつになく冷め切った呟つぶやきを差し挟はさむ。

「……何だと？」

ここに至るまでの死し闘とうの間、決して途絶えることのなかった豪ホー軍ジユンの薄うす笑わらいが、なぜか跡あと形かたもなく消えている。ただそれだけの変化でありながら、だが二人を取り巻く空気の質が一変していた。

「俺が瑞ルイ麗リーを幸せにできると、いつか貴様はそう言ったな。

馬ば鹿かも休み休み言え。俺にそんな資格があるものか。瑞ルイ麗リーにとっては俺なぞ、路ろ傍ぼうの石も同然だった……」

ときに冷たい酷くきに嘲あざけるように、ときに謎めかせて弄いらうように、絶えず豪ホー軍ジユンが口元に覗のぞかせていた静かな微び笑しよう。そんな、彼を彼たらしめていた超然たる笑えみが剥はぎ取られ、いま鬼き眼がん麗れい人じんは剥むき出しの素す顔がおを晒さらしていた。まるで石膏の死デス面マスクのような、一切の感情を欠いた……虚きよ無む。

その相そう貌ぼうの意味するところが、濤タオ羅ローにはまったく理解できない。

「今になって、何を言い出す……貴様こそが瑞ルイ麗リーの伴はん侶りよ……あの子と将来を誓ちかい合った男だろうが！」

「彼女がそれを望んだか？ 貴様の前で俺のことを語ったか？ 婚こん儀ぎの話題に笑顔を見せたか？」

返す言葉が見つからないことに、濤タオ羅ローは今いま更さらのよう

に気がついた。
そう。確かに……瑞ルイ麗リーが自分から新妻としての夢を語ったことはない。ただ照れているだけと察して気にも留めなかったが、それにしては極きよく端たんすぎたのではないか？

瑞ルイ麗リーはもとが闊かつ達たつな質たちの娘むすめだ。それが人生最大の祝い事を間近に控ひかえて、何故あかも寡か黙もくだったのか。

「少し考えれば、気付いたはずだ。貴様だけが気付いてやれたんだ」

濤タオ羅ローの当とう惑わくを嗤わらうかのように、豪ホー軍ジユンは乾かわききった声で続ける。

「彼女が恋こい焦こがれたのは、ただ一人、貴様だけだった」

「ば……」

どんな罵ば倒とうより嘲ちよう笑しようよりも、その一言は濤タオ羅ローの理性を叩たたきのめした。妹を持つ兄として、それは意味を解することすら憚はばかりられる忌いみ詞ことばだった。

「馬鹿な……俺たちは、兄妹……」

「だからこそ瑞ルイ麗リーは苦しんだのだ!! ただ兄としての優やさしさしか見せなかった貴様に、どれほど瑞ルイ麗リーが心苛さいなまれていたか……

貴様さえ気付いていれば……瑞ルイ麗リーの想おもいを汲くんでいてやれば……彼女は救われていたんだ！」

「そんな……」

濤タオ羅ローの脳の中を去来する数々の情景。

人一倍、兄を気遣う妹……人一倍、兄に頼たよりきりだった妹……

ただそれだけのことと思っていた。そこに道ならぬ情念があるなどと、どうして考えが巡めぐろうか。

「そんなこと、許されるわけが……」

「ほう、許されんか。貴様も徳に篤あつい君子だな。貴様を想い思わずらって追いつめられて、あの子が少しずつ壊こわれていったのも、相応の罰ばつというわけだ」

「そんな……」

「愛いといい男と結ばれぬまま、形だけの幸福を手に入れるより、瑞ルイ麗リーは掛かけ値なしの絶望を求めたのさ。

あの夜、生きながらに喰い貪られて……なのに瑞ルイ麗リーは笑っていたよ。貴様を想うのが苦く哀ちゆうなだけに、いっそどんな痛みも苦しみも、あの子にとっては悦よろこびだった……

瑞ルイ麗リーは自ら進んで朱チユウたちに身を差し出した。地じ獄ごくの責め苦を求めてな」

「……」

「あの子には……あの子こそ、貴様しかいなかったんだ！」

愕然と返す言葉もない濤タオ羅ローに向けて、いまや秘ひめ隠してきた狂おしいほどの怒りを剥き出しにした豪ホー軍ジユンが糾ただす。

「貴様だけが救えた！ 彼女の想いを、病んだ心を……貴様だけが癒

いやしてやれた！」

「そん……な……」

眩暈めまいが濤タオ羅ローの上体を揺ゆらす。踏ふみしめた大地そのものが硬かたさを失って解け崩くずれていくかのような、眩暈。

瑞ルイ麗リーの幸こそすべてだった。彼女の笑顔があったからこそ、かつての日々には生きる意味があった。

そのすべてが偽いつわりだったとしたら？

今日まで懐いだいてきた怒いかりと憎にくしみ―それは何処どこに振り向けべきなのか？ 生死を賭として揮ふるった剣けんは、奪うばってきた生命は何だったのか？

「……嘘うそだ……」

ただひとつ救いを期待しうるのは、否定と拒きよ絶ぜつ。だがそうやって力なく拒む濤タオ羅ローの声を、豪ホー軍ジユンは邪よこしまにせせら笑う。

「あの子の撒き散らされた腑はらわたを拾い集めながら、貴様は瑞ルイ麗リーの裸はだかの心に触ふれてきた。貴様はその手で瑞ルイ麗リーを組み立て直して、彼女の内側を覗のぞいたはずだ。貴様を偽ることもしない、おのれの心を秘め隠かくすこともできない、そんな剥き出しの瑞ルイ麗リーをな」

『だってね、だってね、ルイリはいつもいろんなひとにたべられながら、あにさまのこと、おもってたんだよ』

『あにさまも、こんなふうにルイリをたべてくれたなら、しあわせにしてあげられたのかなって』

あのとき、濤タオ羅ローは畏おそれて泣いた。彼を怯おびえさせたのは、ふたつの可能性……果たして魂魄転写された瑞ルイ麗リーの魂たましいが、変質し歪ゆがんでしまったのか、或あるいはあの再生の姿こそ、正しく元のままの瑞ルイ麗リーなのか。

もし後者なのだとすれば、そのときは濤タオ羅ローが胸に懐いだい

てきた瑞ルイ麗リーの像、それこそが変質し歪んだものだったということになる。

そんな胸の内の葛かつ藤とうを見み透すかしたかのよう、豪ホー軍ジユンは口元を邪笑にねじ曲げる。

「愛してやったか？ 抱だいてやったか？ 貴様にはそうする務めがあったんだぞ。一彼女が貴様の全てだったという、その言葉に嘘がないならな！」

「黙だまれ……」

もはや濤タオ羅ローは聞くに堪たえなかった。これ以上、語らせてはならない。あの口を嚙つぐませねばならない。

言葉で封ふうじられないのなら、残る手段はただひとつ。

「黙れえエッ!!」

狂くるおしく一いつ喝かつするや、濤タオ羅ローは倭わ刀とうを振りかざして豪ホー軍ジユンに躍おどりかかった。さっきまで憎しみだけで支えられていた四し肢しが、今は絶望と恐きよう怖ふという、なおいっそう強く禍まが々まがしい感情を糧かてに、躍やく動どうするだけの力を取り戻もどしていた。

だがそんな勢いだけの一ひと太た刀ちが通用する相手ではない。濤タオ羅ローの狂態に豪ホー軍ジユンは眉まゆ一つ動かさず、億おつ劫くうそうに振り払はらったレイピアですげなく倭刀を打ち返す。

「権けん威いを極きわめ、武を極め……俺は手に入れたすべてを瑞ルイ麗リーに捧ささげるつもりだった。あの子のためならば世界も獲とる。柄がらにもなく意気込んだ頃ころもあったよ」

枯かれた声で笑った後、豪ホー軍ジユンの眼がん芒ぼうに常じよう軌きを逸いつしたものが滲にじむ。

「だが彼女は何も望まなかった。彼女が求めたのは、ただ一人、貴様だけだった。俺が手に入れてやれるものにはどれも、屑くずほどの価値さえなかったのさ」

そして彼は笑った。声高らかに。世界の全てを嘲あざけり、唾だ棄きするかのように。

「ならば良し。花は彼女のためだけに咲きせばいい。鳥は彼女のためだけに鳴けばいい。瑞ルイ麗リーの望まざる世界、彼女に幸のない世界に……遺のこすべきものなど何がある？」

鬼き眼がん麗れい人じん、劉リユウ豪・ホー軍ジユン。その手に掴つかんだ権勢で、すべてを滅ほろびへと追いやった狂きよう気きの暴君……誰だれが知ろうか。その心の虚きよ無むを。

それは絶望という名の死病だった。すべての真相を知った日から、豪ホー軍ジユンという男は死につつあったのだ。誰に気付かれることもなく、じわじわと心を蝕むしばまれながら。

「この桃園こそ世界の容かたちだ。何もかも……こうして枯れて滅びればいい！」

哄こう笑しようとともにレイピアの切っ先が風巻く唸うなりを上げ、濤タオ羅ローの総身を斬きり刻む。逆上した濤タオ羅ローの剣が冴さえを失う一方で、豪ホー軍ジユンの剣は依い然ぜんその神速を損そこなわない。

それでいて、刃やいばが抉えぐるのは急所を外れた血と肉ばかり。豪ホー軍ジユンは徹てつ頭とう徹てつ尾び、獲物を生殺しのままに弄もてあそぶ腹づもりだった。

「……嘘……だ……」

濤タオ羅ローもまた、もはやその身にいくつ刃を受けようと意中はない。豪ホー軍ジユンに一いつ矢し報むくいる……その一念の前に苦痛も疲ひ労ろうも忘れ、ただ獣けものの如ごとく猛たけり狂って襲おそいかかるばかりである。

「貴様こそが、濤タオ羅ロー……最初で最後の価値ある供く物もつだ」

あくまで冷然と、的確に、外科医の手並みで寸刻みに濤タオ羅ローを削けずっていきながら、血霧の飛沫しぶきに魅み入いられたように陶とう然ぜんと、豪ホー軍ジユンは微び笑しようする。

「俺は貴様を生いけ贅にえの祭さい壇だんに載のせる。この世のすべてを薪まきにして、瑞ルイ麗リーの元に届けてやる！」

四阿あずまの陰かげに蹲うずくまり、白い旗チヤイナ袍ドレスの少女はその死し闘とうを見守っていた。

人として未いまだ不完全な彼女の思考では、あの鏢つば競ぜり合う二人の男たちが誰なのか、自分とどういう関かわりを持つ人物なのか、理解することは叶かなわない。

それなのに、何故なぜか……戦う二人の、うち一方の男の姿が、少女の注意を捕とらえて放さない。

黒衣の総身を血で彩いろどられ、しゃにむに白はく刃じんを振ふるうその姿は、猛たけ々だけしさとも凜りたりしさとも程ほど遠とおい。まるで手負いの猛もう獣じゆうが断だん末まつ魔まの苦痛に悶もだえ狂うかのような、痛ましく哀あわれを誘さそう様相だった。

だがそんな無む惨ざんな光景を前にして、それを眺ながめる少女の心は、不思議な安らぎに満たされていく。

そう……ほんのつい今しがたまで、彼女は何の由ゆ縁えんかも解わからない悲しみに苛さいなまれていた。

“兄、たる人が恋こいしいと——側そばにあるべきその人が居ないと、肝かん心じんの“兄、とは誰なのかさえ理解できぬ少女にとって、それは出口のない迷路のような無限の悲ひ嘆たんの責め苦だった。

なのに今、涙なみだは止まっている。血みどろになりながら死に果てんとしている黒衣の男を眺めるうちに、気がつけば少女は胸を締め上げる悲しみを忘れている。

もしや、涙に暮れて乞こい求めたその人とは……

「そうよ。あれが、あにさま」

いつの間にか傍かたわらにいた幼女が、姉妹のようないたわりを込めて彼女に囁ささやきかける。

「兄様……あれが……」

「そう」

小さな瑞ルイ麗リーは両手を巡めぐらせて、白い旗チヤイナ袍ドレスの分身を背中から包み込んだ。

「こうしてあにさまのこと、みてて.....ねえ、どんなきもち？」

「気持ち.....温かい.....ううん、なんだか.....熱い、くらい.....」

「でしょう？ わたしも、そう」

小さな手が旗袍のホックをはずし、ゆるやかに隆りゆう起きする胸を夜気に晒さらす。

「あ.....」

細い指先に胸の蕾つぼみを摘つままれて、旗袍の瑞ルイ麗リーは甘く湿しめった吐と息いきを漏もらす。

「ねえ、おぼえてる？ あにさまのだいじな、けん。ものすごくはやくて、じまんにしてた、けんのわざ。

それがほら。いまはもう、あんなにもおもく、にぶくなって.....」

「あ.....う.....」

あどけない容姿を真っ向から裏切って、小さな瑞ルイ麗リーの指ゆび遣づかいは淫いん猥わいなうえに容よう赦しやない。

「それでもまだ、あにさまはたたかっているの。ただルイリのためだけに」

言葉遣いの稚ち拙せつさとは裏腹に、悠ゆう然ぜんと勝ち誇ほこったその声こわ音ねは、略りやく奪だつ者しやの残ざん酷こくな喜びに熟うれている。

「だから、いまのあにさまは、ルイリのためだけのもの。なにもかも.....ルイリのために」

「何もかも.....何もかも.....」

熱に浮うかされたように反はん芻すうしながら、少女の妄もう想そうはとめどなく拡ひろがっていく。

あの力強く躍やく動どうする手も足も、激しく動どう悸きする胸むな板いたも、すべてが彼女のためのもの.....

その貌かおに浮かぶ苦く悶もんの相も、喉のどからほとばしる慟どう哭こくも、何もかもが愛いとおしい。その全すべてが、彼女た

ち…… “妹、孔コン瑞・ルイ麗リーに捧さされた犠牲せい。

「うれしいよね。しあわせだよ。あなたもルイリだから、わかるよね」

小さな手によって互たがいの間に紡つむぎ上げられていく官能に、あられもなく呼吸を乱す少女と童女。身体からだの器うつわは違えども、同じ面おも影かげを想おもい、同じ情欲に身を焦こがす、ふたつでひとつの魂たましい。

「あんなにもつよく、はげしく、あにさまはルイリのことをおもってくれる……なんてしあわせ……ね？ 瑞ルイ麗リー」

耳みみ朶たぶを銜くわえ、甘い囁きで煽あおりながら、小さな瑞ルイ麗リーもまた着衣を解ほどいていく。

二人、裸ら体たいを重ね合わす少女たち。だがその熱く潤うるんだ眼まな差ざしは、どちらも血闘の最中さなかにある濤タオ羅ローへと注がれている。

「ほら、みて。……あにさま、あんなにくるしそう」

「兄様……兄様の血……あんなに赤く……」

「すてきだよ。きれいだよ。あにさまの……ちまみれの、かお」

小さな瑞ルイ麗リーは舌先を伸のばし、下に組み敷いた瑞ルイ麗リーの唇を弄いらうように舐なめ上げる。

「ちのあじって、しってる？ なめてみたこと、あるんだよ。とってもとっても、あまかったよ。あにさまは……」

二人の瑞ルイ麗リーがともに全身全ぜん霊れいを傾かたむけて注視するのは、濤タオ羅ローの声、濤タオ羅ローの眼差し……

豪ホー軍ジユンが嗜し虐ぎやくの喜びも露あらわに振るうレイピアの切っ先に、全身を浅く鋭するどく切り刻まれ、そのたびに痛ましく苦悶を叫びながらも――なお濤タオ羅ローは半はん狂きよう乱らんのまま、見るも無惨に衰おとろえた鈍どん重じゆうな太刀たち筋で打ちかかる。

その絶望の叫さけびを、執しゆう念ねんを、少女たちは我が身を蹂じゆう躡りんする快楽の荒あら波なみに重ね合わせて味わった。その

破は滅めつ的なほどに飽あくなき情念が、我が身へと注ぎ込まれる様を夢想すれば.....総身を焼く快樂は際限なく昂たかぶっていく。

「兄様あ、兄様あ.....ッ!!」

「あにさまはもう.....わたしたちのもの。あなたと.....わたしと.....瑞ルイ麗リーのもの」

息つく間もない忘ぼう我がの境地で、少女たちは互いを貪むさぼり合う。上に被かぶさる小さな瑞ルイ麗リーは、相手を愛あい撫ぶする傍らで、その手にPDAと接続された転送ケーブルをたぐり寄せる。すでに一いつ端たんのコネクタは、彼女自身の後頭部のスロットに接続が済んでいる。

「あうう.....あ、兄様.....もっと、もっとお.....」

もう一方の瑞ルイ麗リーは、とめどなく膨ふくれ上がっていく喜き悦えつの嵩かさに意識を奪うばわれ、耳元へと忍しのび寄るケーブルに気付かない。

「さあ、いっしょに.....あにさまのところへいこう。もういちど、ほんとうのルイリになって.....あにさまの、そばに.....」

「ああっ、はああッ、あああッ!!」

相手が絶頂の頂へと投げ上げられたその瞬しゆん間かん、瑞ルイ麗リーはその接続スロットへコネクタを挿そう入にゆうした。堰せきを切ったように雪崩なだれれ込んでくる、もう一人の自分。二人ぶんの女体の絶頂感が、彼女の細く華きや奢しやな体たい軀くの中には収まりきらないほどの怒ど濤とうとなって押し寄せる。

「あああああッ.....ッ!!」

堪こらえきれずにらせた歓かん喜きの悲鳴が、夜の静寂しじまに響ひびき渡わたる。

男たちの戦いはすでに剣けん士しどうしの立ち合いではなく、一方的な私し刑けいの様相を呈ていしていた。

荒あらかましい呼吸に肩かたを震ふるわせ、踏み込むごとに足をもつれさせる濤タオローには、もはや軽捷流麗な戴天剣の套とう路ろなど見る影かげもない。総身に刻まれた刀傷はもう数える意味もないほどに夥おびただしく、失血の量を鑑かんがみれば、動くどころか立っていることさえ何かの間ま違いがいとしか思えない。

そんな彼を弄もてあそぶが如ごとく、豪ホー軍ジユンは哄こう笑しようも高らかに悠ゆう揚ようとレイピアを繰くり、生殺しの刺し突とつをじわじわと刻み込んでいく。

「ハハハ、まったくいいザマだな濤タオロー。剣の誇りも、明日に繋つなく命も、すべて瑞ルイ麗リーに捧げ尽つくしたか」

挑ちよう発はつの言葉も、濤タオローの耳には五割方届いていない。絶え間ない激痛に苛さいなまれるうち、もはや痛みは鮮せん烈れつさを失い、今では肉を裂さくレイピアの切っ先にも、固い感かん触しよくの冷氣しか感じない。

「それでいい。貴様は血も肉も骨も魂たましいも、残らずここで絞しぼり尽くして果てる。瑞ルイ麗リーの目の前でな」

かつて心血を注いで愛した女の名を、万ばん感かんの想おもいで呼ばれる豪ホー軍ジユンは、まるでその響きに陶とう然ぜんと酔ようかのようだった。

「貴様はもう人でなくていい。瑞ルイ麗リーの中にだけ生きればいい。それなら俺は一貴様を赦ゆるさんでもないぞ。濤タオロー」

「……っ……」

生きたまま鱈なますに刻まれながら、濤タオローの意識は虚きよ無むの中を泳いでいた。

“俺は……”

生しよう涯がい尽くして求めた剣の道。従しよう容ようと受け入れた俠客の運命さため。

この世界がどんなに過か酷こくで、非情であろうと、ただひとつ護まもり抜ぬけるものがあるならば、それでいいと……迷うことなく歩んできた人生。

それらすべてが、根底からまやかしかったとしたら？

過去の幸福も、慰なぐさめも、何もかも彼の設あつらえた虚きよ構
こうで……その陰かげで大切な人は、ずっと涙なみだに暮れていたの
だとしたら？

否いな、と……そう頑かたくなに拒きよ絶ぜつし続けるには、もう
彼はあまりにも疲つかれていた。今となっては信ずるものさえない。

朋ほう友ゆうを失い、希望を失い、人としての情と尊厳は自ら望ん
で捨て去った。このうえ瑞ルイ麗リーの真意まで見誤っていたのだと
したら、もう彼の中には何も残らない。

“瑞ルイ麗リー……お前は……”

ひとつ屋根の下に暮らした妹の心。なぜ解わかってやれなかったの
か。

理解できて当然だった。なのに気付きもしなかった。

あるいは、目を逸そらしていただけかもしれない。心の底で、理解
することを畏おそれて、拒こばんで—

彼女の想いを。

彼女への想いを。

—もしそうなら、運命とはかくも残ざん酷こくなものか。

“なぜ俺の妹に生まれた……なぜ俺を兄に持った……瑞ルイ麗
リーッ!!”

もう何もかも忘れてしまいたかった。悲ひ嘆たんに疲れ、煩はん悶
もんに疲れ、痛みにも絶望にも飽あいた。

逃にげ込む場所には……そう、ひとつだけ心当たりがある。

心頭滅めつ却きやく。今日まで内家の武術家として、たゆまず精進
してきたことではないか。痛みを忘れ、畏れを、懊おう悩のうを忘れ
て心を解き放つ秘ひ訣けつ。

剣をして、すでに意……おのが想念を滅却し、心しん魂こん万感そ
の一刀に託たくすべし……

かつて、幾いく多たの死し闘とうに臨のぞんでそうしてきたのと同
じように、濤タオ羅ローは動き止め、我と我が身の在りようを忘れて

—その手に携たずさえた倭刀とうへと、万事を委ゆだね、投げ渡す。

ここまで心掻かき乱されておきながら、いざ剣を縁よすがに脱だつ却きやくするとなれば、己おのれを律するのは思いのほか容易だった。つまるところ濤タオ羅ローも、その才と研けん鑽さんの深さにおいては、やはり非ひ凡ぼんな武人であった。

手の中の刀が重みを失い、切っ先が青眼の高さまでゆるゆると持ち上がる。

図らずもその型は正調、戴たい天てん流……『雲うん霞か渺びよう々びよう』の構えを成していた。

「フン……ようやく底が見えてきたようだな」

無形なること霞かすみの如く、柔じゆう靱じんなること柳やなぎの如し。静かな構えの中に無限の変化を秘ひめたカウンター狙ねらいの防ぼう御ぎよ型。微塵の隙もないその姿を見届けた豪ホー軍ジュンは、鼻を鳴らして目を眇すがめる。

「最後に何が残るかと思えば、よりによってその一刀か。つくづく天あつ晴ぱれな剣客ぶりだ。……やはり貴様は性しよう根ねから剣けん鬼き。人を愛するのも、誰だれかの愛に応こたえることも、なるほど出来ぬ相談だろうな」

濤タオ羅ローはもう答えない。反はん駁ばくの余地などない。

そう。我は剣鬼。ただ一ひと振ふりの剣としてここに在る。

ならば何を問うまでもない。この死闘の意味も、傷つき血を流す意義も、何一つ思い悩なやむことはない。

浮うき世よの苦く衷ちゆうから解放されて、いま彼の心はいつになく軽かった。

「貴様のその剣をへし折って仕上げ、というわけか。いいだろう。次の一いち撃げきで完かん膚ぶなく叩たたきのめしてやる」

豪ホー軍ジュンは漫そぞろに携えていたレイピアの柄つかを持ち直し、『貫かん光こう迅じん雷らい』の構えを取った。内うち懷ぶところまで肉にく薄はくした鍔つば競ぜり合いの最中さなか、刹せつ那な

の際すきを見み抜ぬいて必殺の一撃を見み舞まうこの技は、むろん間合いの外で構えてみたところで用を成さぬ。だが音速の壁すら破る豪ホー軍ジユンの踏ふみ込みがあれば、そもそも間合いなどという概がい念ねんが意味を持たない。彼が成し遂とげた外法異形の功夫であれば、ただの一步で獲え物ものをレイピアの刃は圈けんに捉とらえることだろう。

最後の最後に、豪ホー軍ジユンはこれ以上ないほどに濤タオ羅ローを圧あつ倒とうした上で決着とする腹なのだ。それが豪ホー軍ジユンの憎にくしみの形。孔コン濤・タオ羅ローという男の存在をすべて否定せんとする彼の意思だった。

百舌もずの早はや贅にえにあやかる戯ざれ事ごとはここまでだった。次はまたあの超ちよう音速の剣が来る。

そうと明らかに察していながら、もはや濤タオ羅ローに畏い怖ふはない。ただ寂せき寥りようが一いち陣じんの風のように、空くう漠ばくの心を吹ふき過ぎる。

こんな絶望で幕を引くべく、我が生しよう涯がいがかが在ったというのか。

こんな形で逃とう避ひするためだけに、今日までの精進があったというのか。

“豪ホー軍ジユン、俺は……”

叩きつけられるレイピアの剣気。疾しつ風ふうよりなお速く、雷らい鳴めいよりなお轟ごうごうと、すべてを超越した豪ホー軍ジユンの体たい軀くが再び奔はしる。

先刻同様、ついぞその影を濤タオ羅ローが見み咎とがめることはなかった。ただ手の中の刀だけが意識の埒らち外がいだ躍おどり上がった。

豪ホー軍ジユンは知らない。かつてその白はく刃じんもまた音速を征せいし、銃じゆう弾だんの雨さえ凌しのいでのけたという事実。修しゆ羅らの撒げき斗との直中に、孔コン濤・タオ羅ローの開眼した伝説の戴天流絶技。

思えば今の濤タオ羅ローには、活路を見み出いだす意味も、刃やいばを交える意味さえもない。だが彼の執とる倭刀は、そんなことに頓とん着ちやくしなかった。もとより剣に理由はない。刃圈に捉えれば、悉ことごとく斬きって棄すてるのみ。

あらゆる流派を過去の遺物と、そう放言してのけた豪ホー軍ジユンに前にして、今ふたたび『六りく塵じん散さん魂こん無む縫ほう剣けん』が夜気を裂さく。

激げき突とつする鋼はがねと鋼が、鏘しよう然ぜんと闇やみに鳴り響ひびく。鈍にぶくくぐもった残ざん響きようは、剣けん匠しようが魂たましいを込めた業物の断だん末まつ魔ま。いずれか一方の剣が折れ飛んだのは間ま違ちがいない。

衝しよう撃げき波はに巻き上げられた粉ふん塵じんが濛もう々もうと中庭に立ちこめ.....程ほどなく夜風に吹き散らされて消える。

再び静せい寂じやくを取り戻もどした景色の中、月明かりを浴びて影かげを落とすのは、ただ立ち並ぶ朽くち木きの群れだけだった。

死線を交こう錯さくさせた男たちの姿はそこになく、代わりに冴さえ冴ざえと煌きらめく刃の断片が、爆ばく心しん地ちの指標として大地に突つき立っている。天を刺さして屹きつ立りつするその金属片は一レイピアの刀身だった。

ぶつかり合った当人たちは、そこから十歩あまり離はなれた場所に折り重なって倒たおれていた。仰臥した濤タオ羅ローの上に、豪ホー軍ジユンが俯うつぶせに覆おおい被かぶさる形である。

神速のレイピアと秘ひ奥おうの倭刀。競り勝ったのは後者であった。

だが剣を折られてなお豪ホー軍ジユンは突とつ進しんを止めず、濤タオ羅ローもまた身を躲かわさなかった。結果、濤タオ羅ローは音の壁を破って突進する豪ホー軍ジユンの体当たりをもろに受け止めた形で、この位置まで吹き飛ばされたのだ。

刃を身に浴びるまでもなく、濤タオ羅ローの命運は尽つきていた。内ない臓ぞう破は裂れつは衝しよう突とつの直後。さらに地面に叩き

つけられた時点で背骨と腰よう椎ついても粉ふん砕さいされた。今度こそは致ち命めい傷しようである。即そく死ししなかっただけでも僥ぎよう倖こう.....そもそも内傷と失血だけでも、とうに瀕ひん死しの有様だったのだ。

「.....何故.....」

断末魔の吐と息いきの中、目の前にある豪ホー軍ジユンの顔を見上げながら、濤タオ羅ローは掠かすれた声を絞しぼり出す。

「.....一体どうして、俺たちがこんな仕打ちを受ける.....？」

そんな濤タオ羅ローを見下ろす豪ホー軍ジユンの貌かおは、一いつ切さいの表情を欠いた虚きよ無むである。彼は彼で、もう冷れい笑しようも怒いかりも見せつける必要はなくなっていた。

豪ホー軍ジユンの体当たりは、もとより意図してのものではない。両者が衝突した時には既すでに、彼もまた身体からだの制せい御ぎよを失っていたのだ。レイピアを叩き折った濤タオ羅ローの倭わ刀とうは、そのまま切っ先を転じて豪ホー軍ジユンの胸を貫き、人工心臓と脊せき椎ついを串くし刺ざしにしていた。

ついに仕留めた仇きゆう敵てきを前にして一だが復ふく讐しゆうの鬼おににまで身を冀やつしていたはずの男は、いま澎ほう湃はいと涙なみだに暮れていた。

「俺は.....俺はみな愛していた。お前も、瑞ルイ麗リーも.....」

「だとしても、貴様は愛し方を間違えた」

口元に血の泡あわを噴ふきながら、豪ホー軍ジユンが呟つぶやくように抑よく揚ようなく断じる。これまでのどんな擲や掄ゆや嘲ちよう笑しようよりも、その乾ききった静かな声は濤タオ羅ローの心を突き刺した。

「貴様に絶望した瑞ルイ麗リーが、この俺を狂くるわせた」

「やめろ.....」

涙声で懇こん願がんしながらも、濤タオ羅ローは力なく左手を掲かがけ、豪ホー軍ジユンの首筋に触ふれる。これ以上、ただの一言も聞きたくはなかった。いっそ己おのれの鼓こ膜まくを破りたかった。

そんな濤タオローを前にして、豪ホー軍ジユンは最後の嗜し虐ぎやく心を催もよおしたのだろうか。死相に彩いろどられた貌に、いま再び持ち前の冷ややかな微び笑しようが蘇よみがえる。

「何もかも……貴様が元げん凶きようだ。俺も、彼女も……濤タオロー、貴様に……」

「豪ホー軍ジユンっ!!」

慟どう哭こくの叫さけびとともに、濤タオローの左手を紫し電でんの気功が巡めぐる。その手に掴つかんだ接続プラグに、今生最後の電磁発はつ動けいが打ち込まれる。

鬼き眼がん麗れい人じんの微笑は、最後まで揺ゆらぎもしなかった。ただその双そう眸ぼうだけが静かに曇くもり濁にごっていき、最後に虚うつろな空くう漠ばくだけを残した。

「豪ホー、軍ジユン……」

身体の芯しんから滲にじみ拡ひろがる冷気が、蝕むしばむようにして全身を覆おおっていく。まるで身体の内外を隔へだてるものが消え失うせたかのように、体温が外気温と等しくなっていく。

夜の静寂の中、濤タオローは独りきりだった。今日まで孤剣のみを輩ともがらに戦ってきた彼ではあったが、これほどの孤こ独どく感には味わったことがない。

この世の生きとし生けるもの……いや、冷たい夜風も月も含ふくめた森しん羅ら万ばん象しようの全てから、拒きよ絶ぜつされていくような疎そ外がい感。あらゆる物との関かかわりが、断たたれていく。目にしたのもの、手に触れ、聞き留めたものも……すべてが彼の中から消えていく。

たまらなく心細かった。だが泣こうにも、涙るい腺せんが凍こおりついている。

冷たく乾かわいた臉まぶたを閉とざすことさえもできず、濤タオローは声にならない叫びを上げて、呼んだ。彼をこの世界に繋つなぎ止めてくれる者を。彼のことを忘れずにいてくれる者を。

すると一不意に、あたたかく柔やわらかい感かん触しよくが、優や

さしく頬ほおを包み込む。

「兄様、聞こえますか？」

吹雪ふぶきの中で出会った灯ともし火びのように、その声は消えゆく彼の魂たましいを芯から癒いやし、温めた。

「……瑞ルイ麗リー？」

紛まぎれもなく彼女だった。もう姿形さえ見届けられない濤タオローではあったが、彼を優しく搔かき抱いだく手つき、鈴すず振ふるような声の抑揚、いま耳元で囁ささやくのは間ま違ちがいなく、彼のただ一人の妹だった。

「瑞ルイ麗リー……本当に、瑞ルイ麗リー……なのか？」

「はい、兄様。……永らくお暇いとま致いたしました。こうしてもう一度逢あえると信じて、今日まで……本当に、長かった」

「ああ……」

長く、あまりにも長く待ちわびた安らぎと、癒し。

長かった。本当に。

瑞ルイ麗リーの魂を取り戻もどす。そのためなら死すら厭いとわぬと心に決めてここまで来た。果たして悲願の叶かなった今、滅ほろびゆく我が身に何の未練があるはずもない。

なのに……ここにきて痛いほどの悔かい恨こんが、濤タオローの胸を締め上げる。

彼女と語らい、その笑顔を見届ける……最後にただそれだけの一欠片かけらの命さえ、残しておけなかったとは。

また彼女の琴ことの音ねを聴ききたかった。もう一度、舞まい踊おどるあの姿を見たかった。なのにもう、叶わない。こうして今、瑞ルイ麗リーは目の前にいるというのに。

「こんな幕切れのために、俺は……」

その先は言葉にならない。ただ滂ぼう沱だと溢あふれる涙が頬を伝い落ちる。

「……俺は……お前の傍そばにいたかった……お前とともに生きたかった……」

今、彼の足元に口を開けている冷たい深しん淵えん。そこにはもう瑞ルイ麗リーはいない。ひとたび墮おちていけばもう、決して逢うことは叶わない。

かつて、その手で死を紡ぐ凶手の身であった孔コン濤・タオロー。まさかその彼自身が、死の影かげにこれほど怯おびえることになるうとは。

「やっとお前を取り戻して……なのに今度は、俺が消えるのか？　これで俺は……また独りなのか？　今度こそ、もう二度と……」

「いいえ、大だい丈じょう夫ぶ。兄様さえ、そう望んで下さるのなら……私たちは離はなれ離れになったりしない」

絶望に怯えて鳴お咽えつする兄の頭をかき抱いたまま、妹は無限の慈いつくしみを込めて語りかける。

「私と一いつ緒しよに、来てくれますか？　どこまでも一緒に」

「……」

望むべくもない。だがそんな願いが叶うなら、魂も、来世も惜おしくはない。

まさしく藁わらに縋する心境で、濤タオローは優しい声の主に請こい求め、訴うつたえた。

「連れていってくれ……頼たのむ……もう二度と放さないでくれ……俺を一人にしないでくれ……」

「ありがとう、兄様。嬉うれしいわ。一約束よ。私たちは永遠に一緒。ね？」

「瑞ルイ麗リー……」

“誓ちかうとも。何を引き替かえにしたっていい。お前さえ一緒なら、俺は……”

そう胸の内で幾いく度ども繰り返すうちに、濤タオローの意識は闇やみに呑のみ込まれ、千々に乱れて散っていった。

計測を終えた諸データに、謝ツエ逸・イー達ターは改めて目を通す。

多くの犠牲せいと引き換えに手に入れたサンプルではあったが、いざ手にしてみれば心躍おどるような期待感はない。ざっと眺ながめてみただけでも、あらゆる数値が予測された範はん囲い内に収まっている。

細かな検証をする前ではあるが、すでに科学者としての経験が培つちかった直感が教えていた。恐おそらく……ここから突とつ破ぱ口こうとなるような手て掛がかりは何一つ掴つかみ取れまい。

「いかがですか？ ドクター謝ツエ」

計測装置から身を起こした少女が、澄すました顔で訊きいてくる。謝ツエは苦々しい面おも持もちのまま、申し訳程度に頷うなずいた。

「いま君のメモリ内に構築されたマトリクスは、明らかに高度な精神活動として認められる。魂と呼んでも良かろう。……有り体ていに言えばだな、並の人間を計測したのとまるで変わらん値あたいたしか出てこない」

「もっと別のものを期待していたのかしら？」

少女がそう小首を傾かしげて問う仕し種ぐさには一容姿だけ見れば年とし端はもいかぬ子供でありながら一まぎれもなく成熟した淑しゆく女じよの気品がある。その取り澄ました微笑ほほえみは、ことさらに謝ツエを不愉快かいにさせた。

「まァ、目新しい驚おどろきがなかったのは事実だ。何か間違いがないかを検証するとき、いちばん途と方ほうに暮れるのは……何の間違いも見当たらん時だよ。

正直、ここまで完かん璧べきな結果が出るとは、予想さえしなかった」

「では実験は成功ですか？」

謝ツエは即そく答とうせず黙もくしたまま、傍かたわらに置いてあった安酒のグラスを手にとって呷あおる。

「確かに今の君という存在は、ひとつの成果だ。生体脳を乖かい離り

した魂こん魄ぱくデータが、これほどのレベルで精神活動を維持している例は過去にない。もはや情報体としての君と、君を収納した記録媒体体たいとは、ソフトウェアとハードウェアとして完全に区分されている。バックアップを残すことは不可能だが、それさえ除けばもう脱魂レイス燃焼バーンを気にする必要はない。君は情報体として何ら欠損することなく、別の記録媒体へと移転できるだろう。

肉体のサイボーグ化でも脳の老化までは止められないが、そんな限界さえ超ちよう越えつした所に君はいる。事実上……人類初の不老不死を手にしたわけだ」

「まあ」

まるでしたくない現場を見み咎とがめられたかのように、少女ははにかんだような微び笑ししょうを浮かべる。

「そんなに大層なものを欲しがった憶おぼえはないんですけど……」

「皮肉だな。それを求めて身を滅ほろぼした亡もう者じやどもが、どれだけ大勢いると思う？」

「でも、そういった方々の犠牲があつてこそ、博士もようやく成功に漕こぎ着けたのでしょうか？」

「成功、か……」

忌いま々いましげに言葉を濁にごして、謝ツエはグラスに酒さか瓶びんの中身を注つぎ足した。

「そう、成功と言っていいいなら……その通りだったのだが」

「何かご不満がありそうね」

謝ツエはしばし無言でグラスの中の琥こ珀はく色いろに見入ってから、いかにも気が進まぬ風に語り始めた。

「……魂魄の、生体脳から人工の記録媒体への移行。それが私の研究のテーマだ。今回の実験の成否はな、君が正しく元のままの孔コン瑞・ルイ麗リーとしてそのボディに移転できたのかどうか……その一点に尽つきのだよ」

「そうではないかもしれない、と？」

「情報とは、加工することに劣れつ化かする。とりわけ今回、君に施

ほどこした手法では、小出しに抽ちゆう出しゆつした魂魄コードを後から再統合するという、多くの段階を踏ふむものだった。過程が複雑なだけエントロピーは増大する。今だから言えるが、満足いく結果が出る可能性は限りなく低かった」

「まァ、ひどい」

まるで他人事ひとごとを話題にして興じるかのように、少女は穏おだやかに眉まゆを顰ひそめる。

「あなたにも確信がなかったなんて……兄様が聞いたらどんな顔をするかしら」

「私は予想屋ではなく科学者だ。疑わしいからこそ実験する。万ばん事は試行錯誤さく誤ごだよ」

そう平然と言い捨てる謝ツエには、まるで悪びれた様子がない。

「再生した君の総体に若じやつ干かんの誤差が生じるのは、むしろ前提だった。問題はその誤差が生命としてのゆらぎの許容量に収まるか否いなかだ。それが実験の主眼だったのだが……

あいにく私は、元の君と面識がない。“本当の孔コン瑞・ルイ麗リー”については一いつ切さい知らんのだ。現在の君と比ひ較かくし検証することができん。それが叶かなうとすれば、孔コン瑞・ルイ麗リーという人物像をよく知る人間……君の兄上や劉リユウ氏に頼たよるしかなかったのだ」

淡たん々たんと語ってから、謝ツエは深い嘆たん息そくとともにかぶりを振ふった。

「それが二人揃そろって、あのザマではな……」

そこまで聞いて、少女はまるで抑おさえきれなくなったかのように声を立てて失笑する。

「“本当の私”を知る人間が……よりによってその二人ですか」

愛くるしい笑顔のまま一息ついた後、少女は好奇心もあらわに謝ツエの表情を覗のぞき込む。

「じゃあ博士。もしこの頭の中身が瑞ルイ麗リーじゃないとしたら、今の私は何者なんです？」

少女の問いに、謝ツエは『お手上げた』と言わんばかりに肩かたを竦すくめる。

「そのときは、君の魂たましいが人間のものかどうかとも疑わしいな。君は地じ獄ごくから這はい出てきた悪あく魔まかもしれんし、フランケンシュタインの怪かい物ぶつなのかもしれん。何と呼び習わすにしろ、私の出る幕じゃない。坊ぼう主ずか神父の出番だよ」

「左さ道どう鉗かん子しともあろうお方が、随ずい分ぶんと弱気ですこと」

「いっそ蘇よみがえった君が廃はい人じんで、実験が明らかな失敗で終わってれば、まだ諦あきらめもついたんだがね」

無む邪じや気きな容姿に似合わぬ皮肉に、謝ツエもまた鼻を鳴らして毒づく。

「失敗は失敗でひとつの結果。確かな結果は確実な前進の一步でもある。なのに成功か失敗かも判わからん、結果は保留……実験そのものが徒労に終わったようなものだ。科学者としては屈くつ辱じよくだよ」

捨て鉢ばちに嘯うそぶきながら酒を呷る老人を、少女はしばし苦笑とともに見守ってから、やがて謎なぞかけをするように取り澄ました声で問いかけた。

「じゃあ博士、ひとつ伺うかがっていいかしら。かつて医学界の寵ちよう児じだったドクター謝ツエと、闇やみ医者 of 左道鉗子とでは、いったいどちらが“正しく元のまま”の貴方あなたなんですか？」

「……痛つう烈れつだね」

冷ややかな一瞥を返す謝ツエに、少女は艶えん然ぜんと微笑ほほえみかける。

「貴方だけじゃなく、貴方をよく知る方々に片かた端はしから訊きいて廻まわってもいいでしょう。でもそれで、誰だれかが納なつ得とくできる答えを出してくれると思います？」

「……無理ですよ、きっと。そんな回答を欲しがらうのなら、あなたの研究自体がナンセンスですわ」

「……」

謝ツエの短い沈ちゃん黙もくは、あるいは鼻白んでいたせいかもしれないが、いずれにせよ彼もまた、そういう感情をむざむざ面おもてに出す質たちではなかった。

「……君は、それでいいのかな？ 魂に正体などないと、そう嘯うそぶくのは簡単だ。……だが君自身が本当に、それでいいと思っているのか？ 君の孔コン瑞・ルイ麗リーという自じ我がを、自分が何者なのか確かめたいとは思わないのか？」

穏やかに詰問する謝ツエから目を逸そらし、少女は足元にあるジュラルミンの箱に視線を向ける。乱雑にとり散らかった床ゆかの有象ぞう無む象ぞうに混じって、ぞんざいに放置されているそれは、脳外科医用の緊きん急きゆう搬はん送そうケースである。

緊急時、致ち命めいのてきな重傷を負った患かん者じやでも頭部さえ無事ならば、このケースは最長四八時間にわたって脳の機能を維持したまま保存できる。

「……この人は、私を瑞ルイ麗リーと呼んでくれました。最後の最後になるまで、瑞ルイ麗リーの気持ちには気付いてくれなかった人だけれど……いいんです。彼がそう呼んでくれるなら、私は孔コン瑞・ルイ麗リーで構わない」

「……」

謝ツエもまた、やや複雑な面持ちで少女の足下のケースを一いち瞥べつする。その眼まな差ざしにどこか憐れん憫びんめいたものを見て取った少女は、改めて艶やかな微笑みを浮うかべた。

「自分が誰かなんてことを気にするような、そんな孤こ独どくなんて……これからの私たちには縁えんがないもの。そうでしょう？」

「君は……」

自ら『左道鉗子』の根城を訪おとずれた少女が提案した、さらなる“実験”……謝ツエとしては、出来ることなら最後まで、その申し出はただの冗じよう談だんと思っておきたかった。

異い端たん外道の科学者として悪名を馳はせた彼ではあったが、そ

んな謝ツエをして躊ちゆう躇ちよさせる領域に、少女は進もうとしているのだ。

「今回、君が処置に耐たえきれたのは、偶ぐう然ぜんの賜たま物ものだったのかもしれん。なにぶん不明確な部分が多すぎる。再び君のような存在が生まれる保証は、まだない。いま現在この世界で、君は極きわめてユニークな、唯ゆいーいつ無二の貴重な存在なんだ。私としては.....無む謀ぼうな試みはさせたくない」

「心配して下さるんですか？」

「魂こん魄ぱくの再統合は、たしかに君の断だん片ぺんについては首しゆ尾び良く行ったが.....別人物の魂魄まで統合するとなれば、まったく話が変わってくる」

「私のメモリは、まだ充じゆう分ぶん領域が空いてます。あと一人ぶんくらい大だい丈じょう夫ぶでしょう？」

「容量の問題ではない。君ら二人の精神は文字通り融ゆう合ごうしてしまうんだ。双そう方ほうがどんな影えい響きようを及およぼしあうか.....正直なところ、私にも結果は予測できん。未知の惑わく星せいの大気に身を晒さらすようなものだ。危険すぎる」

「それでも、むろん興味はおありですね？」

「.....」

答えるまでもなく当然だった。未知なる領域を前にして魅み惑わくされる心を持ち合わせないなら、それはもう研究者ではない。

「実験が無む駄だなまま終わるのを嫌いやがっていたのは博士の方じゃないですか。どうせ私、役に立たなかった用済みのモルモットですもの。もう一度くらい冒ぼう険けんしてみてもいいでしょう？」

「君は.....怖こわいとは思わないのかね？」

掠れた声で問う謝ツエに向けて、少女が見せた爛らん漫まんな笑顔は一その真意さえ知らずにおけば一彼女の幼い容姿に相応の、限りなく無む邪じや気きなものだった。

「この人は約束してくれました。今になって私が裏切るわけにはいきません」

「……」

黙もく然ぜんと押し黙だまったまま、謝ツエは床の脳搬送ケースを引っ張り上げて手術台に載のせる。

「……断っておくが、まず魂魄転写の段階だけでも結果は保証しかねるぞ。回収した時点でも、彼の消しよう耗もうはかなりのものだった。今後の処置に耐え得うるかどうかは危あやういところだ。

首尾良く行ったとしても、記き憶おくに欠損が残る可能性は極めて高い。人格さえ維持しているかどうか……」

「構いません。最善を尽つくしてください。当代随ずいーいちの医学博士、左さ道どう鉗かん子しのお手並みを信じます」

ぬけぬけと笑顔でそう言ってのける少女に、謝ツエは深々と溜ため息いきをつく。

「すべて終わった後で、またその皮肉を聞けるといいんだがな……」

目を醒さまし、男は辺りを見回した。

どこだろうか、ここは……

一面に咲さき乱れる桃ももの花。見み渡わたす果ては花はな霞がすみにぼやけ、天地の分け目も判然としない。

息を呑のむほどに美しい……だが見知らぬ場所だった。

何故なぜこんな所に迷い込んだのか……いやそもそも、思えばここに来る前は何処どこにいたのか、それさえも見当がつかない。

男はなにひとつ憶おぼえていなかった。なのに不思議と、不安はない。むしろ忘れていた故郷の景色の中に立ち戻もどってきたかのような、そんな安あん堵どさえ感じる。

見渡せば咲き誇ほこる花も、爽さわやかな風の感かん触しよくも、諸もろ手てを上げて彼のことを歓かん迎げいしているかのようだ。何故か確信を持って……解る。ここには、彼のことを脅おびやかすものなど何一つありはしない。

ふと耳を澄すませば――

蕭しよう。

蕭……と、優やさしく、囁き誘いざなうような鈴すずの音。

どこからかともなく届くその音色は、すぐに男の心を虜とりこにした。美しい響ひびきに導かれるままに、彼は桃の木の間を進んでいく。

鈴の音はいよいよ軽快にリズムを刻み、やがて雅楽の打うち物もの拍びよ子うしに。

その少女を、はじめ彼は桃の精かと見み紛まがった。

着物の裾すそを軽々と翻ひるがえし、まるで舞まい散る桃の花弁と戯たわむれ合うかのように、伸びやかに桴ばちを振ふる走わしり舞まい。鈴の音の拍子に乗って、蝶ちようのように鳥のように、少女は晴れやかに舞い踊おどる。

その美しさに心奪うばわれた。

その懐なつかしさに驚おどろきを忘れた。

“ああ、あの舞は……”

そう、あの舞は知っている。

蘭らん陵りよう王おう……愁うれいの美び貌ぼうを仮面に隠かくし、鬼き神しんを演じた若き王の物語。

そうだ。彼女のことは知っている。

彼女の舞い踊る姿を、何よりも大切に胸に秘ひめてきた。嵐あらしの中も、凍いてつく夜も……それだけを慰なぐさめに耐えてきた。だからまだ憶えている。あの舞姿だけは忘れはしない。

入り乱れる安あ摩ま乱らん声じようの竜りゆう笛てきに陶とう然ぜんと聞き入るうち、男の胸をえもいわれぬ安堵が満たしていく。

彼女が誰だれであろうとも……気き後おくれするような必要はない。二人は今この場所で出会ったのではない。――二人のために用意された約束の地が、ここなのだ。

咲き誇る桃も……竜笛の調べも……ただ二人を祝福するためだけに、ここにある。

男が放心したまま見守るうちに、やがて少女が舞の手を休めて、満面の笑顔とともに彼を振り返る。

まるで千年の時を経て花咲さいた蓮はすの如ごとく、その貌かおは溢あふれんばかりの喜びに輝かがやいて……

「ようこそいらっしやい。濤タオ羅ロー」

そう呼びかけられても、男は何の違和感も感じない。遠い昔からそう呼ばれることを、待ち望んできたのかもしれない。

「約束通り、来てくれたわね。……これからは、もうずっと一いつ緒しよ。もう決してあなたを放さない」

「瑞ルイ麗リー……」

その名が口を衝ついて出た。初めて口にするような、それでいて何故か懐かしい響き。

そう、彼女の名は瑞ルイ麗リー。なんと麗うるわしい名前だろうか。

抱ほう擁ようは固く、優しく、互たがいの鼓こ動どうの溶とけ合うままに。二人が満たされたままに世界は環わを閉じ、完成する。

この場所に還かえるまで、長い長い道のりを旅してきたような……なぜか、そんな気がする。

もしかしたらそれは、思い出すだけでも辛つらくなるような……耐たえがたい道程だったのかもしれない。

だけど、もういい。

こうして何もかも忘れ去ったまま……そう、それで構わない。

もうこれ以上求めるものはない。この喜びは、きっと時の終わりまで続くのだから。

〈了〉

後書き

かつて私は、PCソフト版『鬼哭街』のスタッフコメントにおいて、この作品が活字媒ばい体たいで展開する可能性を徹てつ底てい的に否定した。それが、わずか三年のうちに前言を完全に覆くつがえす形になってしまったことを、平身低頭、皆みな様さまにお詫わびしたい。

製作者が、つねに己おのれの作品の価値を決定できるとは限らない。不当に貶おとしめられることもあれば、逆に予想もしなかった厚こう遇ぐうを受けることもある。骨こつ董とう品などが良い例だ。ただの実用品のつもりで製作した食器や家具が、ただ歳さい月げつを経たというだけで法外な価値を付加されて売り買いされている光景を目にすれば、作った当の職人は途と方ほうに暮れるしかないだろう。

かつて鬼哭街のテキストは、ソフトウェアのパッケージにおける一素材であり部品でしかないものだった。その認にん識しきは今も変わらない。だが他方で、テキストが単体でも商品として店頭に並べるだけの価値があると判断した人たちもいた。

その価値観を拒きよ絶ぜつし続けるだけの確固たる意思を、いつしか私は喪うしなっていた。根負けである。今となっては、つくづく世の中ってのは悪い冗じょう談だんで出来てるんだなァと笑うしか他ほかにない。

しかし、下巻の校正作業も終わりに近づき、結末部分を久々に読み直していた時、自然と耳に蘇よみがえってきたのは—他でもない、PCソフト版『鬼哭街』のエンディングテーマである『涙れい尽ちん鈴りん音いん響しやん』の旋せん律りつだった。

この本は角川スニーカー文庫というブランド力の威いを借りて、全国の書店に置かれることになるのだろう。やがては『ファントム』や『ヴェドゴニア』がそうであったように、PCソフト版の出荷本数すら凌りよう駕がしてしまうのかもしれない。販はん路ろが違ちがう。

価格が違う。よりマスのメディアである書しよ籍せきに、エロゲーは決して敵かなわない。

だが新たにこの本を手にする方々は、活字と挿さし絵えだけの鬼哭街に触ふれることになる。彼らが結末を読み終えるときに、その耳に『涙尽鈴音響』が届くことは、ない。

それを思うと、やるせなさに目め頭がしらが熱くなった。あの曲によって『鬼哭街』という物語は完成するというのに。その事実を忘れ去られたまま、これからの鬼哭街は続いていく。

せめて後書きのこの場を借りて、あの歌の歌詞だけでも紹しよう介かいさせてほしい。

虚 淵 玄

涙れい尽ちん鈴りん音いん響しやん

作詞：江幡育子

想い溢あふれし果て 深き哀しみ呼ぶ 涙は尽きて
何も恐れぬまま 闇に刹せつ那なの風 鈴の音 響く
面影抱いても もう二度と帰らぬ日
摂せつ理りに抗あらい 奇跡をいつしか求めた

おいで.....満ち足りてゆく.....
花咲く季節 見送るままに

想いひとつとなり 虚むなしい現うつつの傷 抱きしめ癒す
此処ここは静かな場所 闇に光射せば 安らぎ満ちて

姿は朽くちても もう二度と離れぬよう
ふたつの魂 生と死の挟はざ間まに閉じこめ

傍そばに.....悠ゆう久きゆうの時.....
流れゆく河 見届けながら

寄り添い歩く.....満ち足りてゆく.....悠久の時.....
花咲く季節 見送るままに

カバー・口絵・本文イラスト / 中央東口

カバー・口絵・本文デザイン / アフターグローウ

(C) Nitroplus 2002, 2005

鬼き哭こく街がい

鬼き眼がん麗れい人じん

虚うろ淵ぶち 玄げん(Nitroplus)



平成25年12月1日

(C) Nitroplus 2002, 2005

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『鬼哭街 鬼眼麗人』

平成17年3月1日初版発行

発行者 山下直久

発行所 株式会社KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745 (営業)

編集 角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694 (編集部)

<http://www.kadokawa.co.jp/>

